

靈界物語 第一〇卷 靈主體從 西の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十卷』愛善世界社

1994(平成06)年11月06日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序歌 じよか

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

信天翁 あはうどり（一）

第一篇 せんぐんばんば 千軍萬馬

第一章	常世城門 <small>とよじやうもん</small> 〔四三一〕
第二章	天地暗澹 <small>てんちあんたん</small> 〔四三二〕
第三章	赤玉出現 <small>あかだましゆつげん</small> 〔四三三〕
第四章	鬼鼻團子 <small>きびだんご</small> 〔四三四〕
第五章	狐々怪々 <small>こんこんくわいくわい</small> 〔四三五〕
第六章	額の裏 <small>がくうら</small> 〔四三六〕
第七章	思はぬ光榮 <small>おもくわうえい</small> 〔四三七〕
第八章	善惡不可解 <small>ぜんあくふかかい</small> 〔四三八〕
第九章	尻藍 <small>しりあゐ</small> 〔四三九〕
第一〇章	注目國 <small>めげしこくに</small> 〔四四〇〕
第十一章	狐火 <small>きつねび</small> 〔四四一〕
第十二章	山上瞰下 <small>さんじやうかんか</small> 〔四四二〕
第十三章	蟹の將軍 <small>かにしやうぐん</small> 〔四四三〕
第十四章	松風の音 <small>まつかぜおと</small> 〔四四四〕

第一五章	言靈別 <small>ことたまわけ</small> 〔四四五〕
第一六章	固門開 <small>こもんかい</small> 〔四四六〕
第一七章	亂れ髪 <small>みだがみ</small> 〔四四七〕
第一八章	常世馬場 <small>とこよばんば</small> 〔四四八〕
第一九章	替玉 <small>かへたま</small> 〔四四九〕
第二〇章	還軍 <small>くわんぐん</small> 〔四五〇〕
第二一章	桃の實 <small>ももみ</small> 〔四五一〕
第二二章	混々怪々 <small>こんこんわいくわい</small> 〔四五二〕
第二三章	神の慈愛 <small>かみじあい</small> 〔四五三〕
第二四章	言向和 <small>ことむけやし</small> 〔四五四〕
第二五章	木花開 <small>このはなびらき</small> 〔四五五〕
第二六章	貴の御兒 <small>うづみこ</small> 〔四五六〕

第二篇 楔身の段みそぎだん

第二十七章 言靈解一 (四五七)

第二十八章 言靈解二 (四五八)

第二十九章 言靈解三 (四五九)

第三〇章 言靈解四 (四六〇)

第三十一章 言靈解五 (四六一)

第三篇 邪神征服

第三十二章 土龍 (四六二)

第三十三章 鯨公 (四六三)

第三十四章 唐櫃 (四六四)

第三十五章 アルタイ窟 (四六五)

第三十六章 意想外 (四六六)

第三十七章 祝宴 (四六七)

附録 第三回高熊山參拜紀行歌（三）

（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）

序歌 じよか

神體詩 しんたいし

（一）

我が日本の本は神の國 あがひのもとはかみのくに
國運隆々天津日の こくうんりうりうあまつひ
開國茲に五十年 かいくこここごじふねん
日清日露の大戦に につしんにちろのたいせん
神勇不撓の御英斷 しんゆうふたうのごえいだん

天地の神の守護厚く てんちのかみのしゅごあつ
御空に昇ります如く みそらののぼりますごとく
宇内列強の班に伍し うだいれつきやうのはんにご
遭遇したるも日の御子の さうぐうしたるもひのみこ
天地神明の御稜威に てんちしんめいのごりようゐ

敵を排除し歸順はせ
國家の進運日に月に
皇威國勢彌振ふ
聖の御代の尊さよ。

(二)

斯の神國の民草は
無限の神助皇恩を
感謝しまつり責任の
重大なるを覺悟して
兵力平和の戦ひに
優勝ならむ事を期し
猶又思想新舊の
靈的戰爭に打勝ちて
天壤無窮の神國を
赤誠籠めて守るべし
皇祖皇宗の御神勅
大本神の御神諭を
遵守し奉り人格を
高めて更に神格も
進め神威を顯彰し
神洲國土を平安に

守りて子孫に至るまで
修理固成る天職と
直靈の御魂に反省し
常世の暗の世界をば
神の御子たる使命をば
赤誠籠めて祈るべし。

(三)

豊榮昇る旭日影
東の空に輝きて
萬邦光りを仰ぐなる
日出づる國の日の本は
神の初めて造らしし
珍の神國美し國
神代よりして青雲の
棚引く極み白雲の
墜居向伏し鹽沫の
致り留まる其の限り
狭けき國は彌廣く
嶮しき國は平けく
遠けき國は八十綱を
打懸け結び引寄せて

我 <small>わが</small> 皇室 <small>くわうしつ</small> の御 <small>ご</small> 稜 <small>り</small> 威 <small>よう</small> を	仰 <small>あふ</small> ぎ敬 <small>ゐ</small> まひ大 <small>おほ</small> 君 <small>ぎみ</small> の
仁 <small>じん</small> 慈 <small>じ</small> に靡 <small>なび</small> き服 <small>まつろ</small> ひて	赤 <small>せき</small> 子 <small>し</small> の慈 <small>じ</small> 母 <small>ぼ</small> を慕 <small>した</small> ふ如 <small>ごと</small>
八 <small>や</small> 十 <small>そ</small> 島 <small>しま</small> 國 <small>くに</small> の果 <small>はて</small> までも	漏 <small>も</small> れ遺 <small>お</small> つるなく安 <small>やす</small> 國 <small>くに</small> と
知 <small>し</small> 食 <small>しょく</small> します御 <small>ご</small> 天 <small>てん</small> 職 <small>しやく</small>	發 <small>はつ</small> 揮 <small>き</small> し給 <small>たま</small> ふ尊 <small>たふと</small> さよ
東 <small>とう</small> 洋 <small>やう</small> 文 <small>ぶん</small> 明 <small>めい</small> を代 <small>だい</small> 表 <small>へう</small> し	西 <small>せい</small> 洋 <small>やう</small> 文 <small>ぶん</small> 明 <small>めい</small> を調 <small>てう</small> 和 <small>わ</small> して
更 <small>さら</small> に世 <small>せ</small> 界 <small>かい</small> の文 <small>ぶん</small> 明 <small>めい</small> を	醇 <small>じゆん</small> 化 <small>くわ</small> し美 <small>び</small> 化 <small>くわ</small> し人 <small>じん</small> 類 <small>るゐ</small> の
眞 <small>まこと</small> の平 <small>へい</small> 和 <small>わ</small> を促 <small>そく</small> 進 <small>しん</small> し	人 <small>じん</small> 道 <small>だう</small> 完 <small>くわん</small> 美 <small>び</small> の瑞 <small>ずゐ</small> 祥 <small>しやう</small> を
圖 <small>はか</small> るは神 <small>みくに</small> 國 <small>くに</small> の神 <small>しん</small> 民 <small>みん</small> の	天 <small>てん</small> 職 <small>しやく</small> 使 <small>しめい</small> 命 <small>めい</small> と覺 <small>かく</small> 悟 <small>ご</small> して
神 <small>かみ</small> の教 <small>をしへ</small> を克 <small>よ</small> く守 <small>まも</small> り	國 <small>くに</small> の光 <small>ひかり</small> を輝 <small>かがや</small> かせ。

凡はん例れい

一、本ほん卷くわんは三さん十じふ七しち章しやうより成なつてゐますが、そのうちの『言こと靈たま解かい』五ご章しやうは、かつて

五六七殿において講演せられ、かつ『神靈界』誌上に掲載されたものです。
二、本巻の『信天翁』はまつたく獨立したお歌であつて、本巻の内容に關係した
ものではなく、今後とも臨時必要に應じて現れるでせう。

大正十一年七月

編者識

總説歌

世は常暗となり果てて
再び天の岩屋戸を
開く由なき今の世は
心も天の手力男
神の御出まし松蟲の
鳴く音も細き秋の空
世の憂事を菊月の
十まり八つの朝より
述べ始めたる靈界の
奇しき神代の物語

三つの御魂に因みたる

三筋の絲に曳かれつつ

二度目の岩戸を開き行く

一度に開く木の花の

色香目出たき神嘉言

常世の國の自在天

高く輝く城頭の

三ツ葉葵の紋所

科戸の風に吹きなびき

思想の洪水氾濫し

ヒマラヤ山頂浸せども

明の鳥はまだ啼かず

長鳴鳥も現はれず

橄欖山の嫩葉をば

御みし鳩の影もなし

天地曇りて混沌と

妖邪の空氣充ち充ちて

人の心は腐りはて

高天原に現はれし

ノアの方舟尋ね侘び

百の神人泣きさけぶ

阿鼻叫喚の慘状を

救ひ助くる手力男の

神は何れにましますぞ

天の宇受賣の俳優の

歌舞音曲は開けども

五つ伴緒はいつの日か

現はれ給ふことぞかし

つらつら思ひめぐらせば
天の手力男坐しませど

手を下すべき餘地もなく
鈿目舞曲を奏しつつ

獨り狂へる悲惨さよ
三五教の御諭しは

最後の光明良めなり
ナザレの聖者キリストは

神を楯としパンを説き
マルクス麵麩もて神を説く

月照彦の靈の裔
印度の釋迦の方便は

其儘眞如實相か
般若心經を宗とする

龍樹菩薩の空々は
これまた眞理が實相か

物理に根ざせる哲學者
アインスタインの唱へたる

相對性の原理説は
絶對眞理の究明か

宗教學者の主張せる
死神死佛を葬りて

最後の光は墓を蹴り
蘇へらすは五六七神

胎藏されし天地の
根本改造の大光明

盡十方無碍光如來なり
菩提樹の下聖者をば

起たしめたるは曉あかつきの

天明てんめい閃ひらめく太白たいはく星せい

東ひがしの方かたの博士はかせをば

馬槽ばさうに導みちびく怪星くわいせいも

否定ひていの闇やみを打破うちやぶる

大統だいとう一の太陽たいやうも

舍身しゃんく供養くやうの炎ほのほまで

残のこらず五み六ろく七しちの顯現けんげんぞ

精神せいしん上の迷信めいしんに

根ねざす宗教しうけうは云いふも更さら

物質ぶつしつ的てきの迷信めいしんに

根ねざせる科學くわがくを燒やき盡つくし

迷まよへる魂たまを神國かみくにに

復かへし助たすくる導火線だうくわせんと

祕ひそかに密ひそかに唯ただ一人ひとり

二ふたり人の眞まことの吾わが知己ちぎに

注そそがむ爲ための熱血ねつけつか

自暴自爆じぼうじばくの懺悔ざんげ火びか

吾われは知しらずに惟かむながら神かみ

神かみのまにまに述のべ傳つたふ

心こころも十たりの物語ものがたり

はつはつ爰こゝに口車くちぐるま

坂さかの麓ふもとにとどめおく

あゝ惟かむながら神かみ々々

御靈みたま幸さちはへましますせよ。

三箇の桃と現はれし
松、竹、梅の姉妹が

獅子奮迅の大活動
智仁勇をば萬世に

残す尊き言の葉の
いや永久に茂りつつ

八洲の國の礎を
造り固めしその如く

數多の人を大神の
誠の道に誘ひて

雄々しき魂となさしめよ
黄泉比良坂大峠

昔も今も同じこと
三つの御魂に神習ひ

三月三日の桃の花
五月五日の桃の實と

なりて御國に盡せかし
神は汝と俱にあり

御仁慈深き大神の
御手に曳かれて黄泉國

うとび來らむ曲神を
誠の教の劍もて

善言美辭に打拂ひ
その身その儘神となり

皇御國の御爲に
力限りに盡せよや

神を離れて神に就き
道に離れて道守る

誠まこと一つの三五教あななひけうの 月つきの心こころを心こころとし
盡つくす眞ま人びとぞ頼母たのもしき あゝ惟かむながらかむながら神かむながら々々
御靈みたまの幸さちを賜たまへかし。

大正十一年二月廿七日 舊二月一日

於龍宮館 王仁識

信天翁あはうどり（一）

至聖しせい至嚴しげんの五六七殿みろくでん 尊たふとき神かみの御教みをしへを
さとす誠まことの神席しんせきに 假設かせつげきぢやうじやうち劇場常置じやうちして
語る靈界物語れいかいものがたり 欺だまされきつた近侍きんじら等が
浮ういた調子てうしで節ふしをつけ 三筋みすぢの絲いとでチャンチャンと

聖場汚す四つ足の副守のすさびを口開けて

言ふ奴聞く奴三味線を弾いて得意になるナイス

横に立てつて作る奴阿呆と阿呆との寄合ぢや

寄席の氣分でワイワイと神の聖場を馬鹿にする

困つた奴が現はれた是も矢張り緯役の

變性女子の世迷言 審神をせねば聞かれない

耳が汚れる胸わるい いやぢやいやぢやと顔しかめ

喰はず嫌ひの没分曉漢 何を云うても汲み取れぬ

デモ先生の尻の穴 餘り小さい肝玉に

あきれて屁さへ出ではせぬ 發頭人のわれわれが

熟々思ひめぐらせば 聞かぬお方の身魂こそ

口が悪いか知らねども 日本一の信天翁

表面ばかりむつかしき 顔をしながら人の見ぬ

所でするいことばかり 體主靈從の偽善者が

却て殊勝らし事を言ひ

聖人面をするものぞ

三味線ひいたり節つけて

語るが馬鹿なら一言も

聞きに来ずしてゴテゴテと

そしるお方の馬鹿加減

變性男子の筆先に

阿呆になりて居て呉れと

書いてあるのを白煙

八十八屋の系統に

知らず識らずに魂ぬかれ

血道をわけて一心に

欺かれたる人だらう

あゝ惟神々々

かまはないからどしどしと

語つて弾いて面白く

六ヶしう仰有る御方等の

肝玉デングリ返しつ

怖めず臆せずやり通せ

分らぬ盲者はあとまはし

やがて齧む時が来る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

曲津御靈はさわぐとも

苦集滅道説き諭し

道法禮節開示する

五六七の教いつまでも

生命の限り止めはせぬ

神の心を推量して

チツとは心廣くもて

神の言葉に二言ない

止めぬと云つたら何處迄も

口ある限りやめはせぬ

ア、さりながらさりながら

こんな事をば書いたなら

自分免許の審神者等が

變性女子の傍近く

歌劇思想を抱持して

寄るモウロクの悪靈が

うつられ易い緯役に

憑いて書かしたと減らず口

又も盛に叩くだる

どうせ綾部の大本へ

寄り来る御魂は天地の

神の眼よりは中なもの

自分の顔についた墨

吾眼さへぎる梁の

少しも見えぬ色盲者

都合の悪い言譯の

世迷言ぞと聞き流し

馬耳東風の瑞月が

嘲罵の雲霧かき別けて

下界をのぞき吹き立てる

二百十日の風の如

力一杯大木の

倒れる迄も吹いて見む
御靈幸はひましませよ。

あゝ惟神々々

大正十一年瑞月祥日

於龍宮館

第一篇 千軍萬馬

第一章 常世城門（四三一）

東と西の荒海の

浪に漂ふ常世國

ロッキー山の山嵐ざん やまおろし
 吹く木枯こがらしに烏羽玉うばたまの
 暗くらき心こころを押し隠かくし
 染そめたる旗はたを翻ひるがへし
 白しろ地に葵あふひの紋もん所ところ
 大國彦おほくにひこの命みことをば
 この世よを欺あざむく神柱かむばしら
 太ふとしく立たてむと種いろ々いろに
 心こころを碎くだき身みを藻も搔がき
 黄泉國よもつのくにの戦たたかひに
 勝鬨かちどきあげて一つ島ひとしま
 浪高砂なみたかさこの島しまの面おも
 心こころ筑紫つくしの神國かみくにや
 醜しこの劍つるぎを抜ぬき持もちて
 常世とよよの國くにの神しん力りきを
 輝かがやかさむと大國おほくにの
 夫つまの命みことを日ひの出で神かみに擬なぞらへて
 大國おほくに姫ひめは伊奘册いざなみの
 神かみの命みことと現あらはれて
 心こころも驕おこる鷹たか取とり別わけを
 暫しばし止とどめて常世とよよしんわう神王わうが宰相さいしやうとなし
 體主たいしゆ靈れい從いじうの政せい策さくを
 廣國ひろくに別わけに事こと依よさし
 天下てんかを偽いつはる常世とよよしんわう神王わうとこそ稱となへけり。

ロツキーの峰分け昇る天津日に、丸い頭も照山彦や、竹山彦は勇ましく、松、竹、梅の宣傳使、輿に昇がせ數多の供人引き連れて、勝誇りたる手柄顔、肩を怒らし歸り來る。

常世城の表門に現はれ出でたる二人の上使は、聲を張り上げ、

「ヤアヤア門番。照山彦、竹山彦が歸城。一時も早くこの大門を開けよ」

折から荒ぶ木枯の風。門番の蟹彦、赤熊の兩人は、

「ハイ」

と答へて表門をサラリと開けば、長途の旅に疲れ果てたる照山彦、竹山彦も功名

心に煽られて、馬上裕に門番を睥睨し、

「ヤア蟹彦、赤熊の兩人、一時も早く常世神王に、吾等が手柄を奏聞せよ」

と云ひ捨て中門に進み入る。蟹彦はその名の如く横歩きをしながら大股に中門さ

して走り來り、

「これはこれは照山彦、竹山彦の御兩所様、暫くお待ち下さいませ。常世神王に奏上した上、お指圖に任せ下さいますやう」

竹山彦「エイ、何を愚圖々々、横さの道を歩むに妙を得たる蟹彦の門番、何彼につけて邪魔を「ひろぐ」か、平家蟹のやうな六かしさうなその面は、泣いて居るのか怒つて居るのか恥かしいのか恐いのか、但は酒に酔つたのか、顔の色まで【赤】熊の、【赤】門守る腰抜け門番、絶世の美人、松、竹、梅の天女の降臨、常世神王に伺ふも何もあつたものか、早くこの門を開けよ」

と馬上ながら叱りつけたり。赤熊は「きつ」となり、

「ヤア竹山彦様、それはあまり傍若無人と申すもの。吾等は卑しき門番と雖も、城内の規則を嚴守致す大切の役目、たとへ天女の降臨にもせよ、城主常世神王の許しもなく、漫りにこの中門を開くこと罷りならぬ」

と澁々顔。蟹彦はその間に松代姫の輿を一寸覗いて、大地に「どつか」と尻餅をつき、

「ヤアヤアヤア、ヒ、ヒ、ヒ、光るぞ光るぞ、光の強い、ダイヤモンドか、天に輝く日輪か、牡丹の花か、菫か、菖蒲か、黑白も分かぬ常世の國に、こんな女神があらうとは、思ひがけない蟹彦の、泡吹き廻つてへたばつた。ヤイヤイ、赤熊の大

將、黒熊のやうな黒い顔を、眞赤に致して怒るより、一寸この輿覗いて見よ。白
いと言はうか、清しと言はうか、春の彌生の梅か櫻か、桃の花か、鼻筋通つて口
許締り、紅の唇、月の眉毛、清しい眼玉は三五の月か、髪は烏の濡羽色、いろい
ろ女もある世の中に、情婦を持つなら、まア、まア、まア……」

剛直律儀の赤熊は、蟹彦のこの體を見て苦笑ひ、

「常世城の鐵門を守る役目仰せつけられながら、汝の醜態は何の態、確り致せよ」

「オイオイ赤熊、さう赤くなつて怒るものぢやない。この蟹面の六かしき蟹彦の
顔の紐でもサラリと解いた天女の姿、堅いばかりが能ではないぞ。貴様は常から
枯木の如く、岩石の如く、味もなければ色もない、冷酷無残の人足だ。一寸お顔
を拜んで見よ、貴様の心の枯木にも春の花が開くであらう。それにつけても、貴
様の鼻は、一入黒い鼻高野郎、それに不思議や、今日この頃は鼻柱がまつ赤いけ、
鼻息荒い表現であらうか、朝瓜、鴨瓜、南瓜のやうな妙な面して、茄子のやうに
お色の黒い色男、高い鼻をば眺めて見れば、瓜や茄子の顔に似合はず、鼻赤いな
赤熊は聲を荒らげ、

「千騎一騎のこの場合、何を吐す」

と睨め付け居る。忽ち門内より聲あつて、

「照山彦殿、竹山彦殿、常世神王の御機嫌最も麗しく、首を伸ばして待たせたまふ。早くお入りあれ」

言下に中門サラリと開けたれば照山彦は、

「ヤアヤア皆の者共、遠路の處御苦勞なりしよ。各部屋に立ち歸り緩りと休息せよ、ヤア竹山彦殿、續かせられい」

と先に立ち、輿を昇がせ、奥殿深く進み入る。

(大正一一・二・一九 舊一・二三 加藤明子録)

第二章 天地暗澹(四三二)

常世の城は雲表に 御空を摩して遠近の

樹の隙を透しキラキラと 三葉葵の紋所

黄金の色の三重の高殿 朝日に輝く天守閣

見上ぐるばかり名も高き 三葉の青き大王松

松、竹、梅の宣傳使 間の里より迎へ来て

勝ち誇つたる照山彦 苔むす巖の幾百樹

限り知られぬ築山の 廣庭前に立ち現はれし

照山彦は大音聲にて、

常世神王廣國別、ア、イヤイヤ、大國彦神に申し上げます。吾等兩人、大命を

奉じ夜を日についで間の國の酋長、春山彦が館に罷り出で、三人の娘を召捕り歸

り候へば、篤と御實檢を願ひ奉る

續いて竹山彦も大音聲、

仰せに従ひ、漸う使命を果し立歸り申候。聞きしに勝る國色の譽、譬ふるにも

の無き天下の美形、永く此城内に留め置かせられ、黄泉比良坂の桃の實として、陣中に遣はし給へば、如何なる英雄豪傑も、美人の一瞥に魂奪はれ魄散り、歸順致すは火を睹るよりも明かならむ。敵の糧を以て敵を制するは、是六韜三略の神算鬼謀、常世神王の御盛運は彌々益々六合に輝き渡り申さむ」

との注進に、常世神王は莞爾として、

「今日に始めぬ二人が活動感じ入る。何はともあれ三人の宣傳使を此場に誘ひ來るべし」

と嚴命するを、照山彦は從神の固虎に向ひ、

「ヤアヤア固虎、松、竹、梅の宣傳使を之へ案内申せよ」

「承知仕りました」

と固虎は此場を立ち出で、三人の輿の前に現はれて、

「ヤアヤア、三人の娘、よつく聽け。吾こそは常世神王の御家來鷹取別の其家來、照山彦の片腕と選ばれたる心も堅い、頭も固い、腕は鐵よりもまだ固い、固虎彦の命であるぞよ。【かた】【がた】以て容易ならぬ、ウラル教を敵と睨ふ頑固者

の女宣傳使、畏くも間の國へ、女の身を以て三五教を宣傳に来るとは、誠に以て片腹痛い。鐵門を以て固く守られたる常世の城、如何に「ガタ」「ガタ」慄うても、焦慮つても、藻掻いても、如何にも斯うにも仕方なからう。もう斯うなる上は、常世神王の御言葉を固く守り、片意地を張つて頑固立て通す譯にはゆかぬ。サア、サア、之から奥殿に連れ參る。この固虎が足跡を踏んで出で來れ」と肩臂怒らしながら鼻息荒く、化石の如く固まり居る。

三人の娘は何と詮方「なく」涙、袖に隠してニコニコと、花の唇淑かに、「これはこれは固虎彦とやら、お使ひ大儀。何を言うても纖弱き女、城内の掟も固く存じませねば、何卒貴方様より宜敷く執成し方を、「かた」「がた」祈り參らする」

固虎「ヤア、此固虎が「かた」「かた」盡しで吐いて見たら、「かた」「がた」以て油斷のならぬ癡れ者、此奴も阿呆と缺ではないが、使ひ方によつては、常世神王の御片腕と成らうも知れぬ、罷り違へば獅子身中の蟲、敵と成つてこの岩より堅い常世城を、「ガタ」「ガタ」と傾けかねまじき魔性の女、何は兔もあれ吾

役目、三人の娘を神王様の傍へに侍らせ、「かた」を付けねばならうまい。ヤア
ヤア方々、松、竹、梅の宣傳使を固く守つて、固虎が後より御供仕れ」
と肩臂怒らし傍への押戸を押し開けて、奥へ奥へと進み行く。姿は何時か消え失
せて、何の様子も片便り、頼り渚の捨小舟、取り着く島も「なき」顔の、横さの
道行く蟹彦は、拍子抜かして泡を吹き、
「ヤアヤア、もうさつぱりぢや、一寸輿を覗いて拜んだ時の松代姫の美しいその
姿、その妹も妹も、何れ劣らぬ花紅葉、桃か櫻か、梅の花か、實に立派な代物だ
つた。ア、吾々もこの木枯のピューピュー吹く寒空に、火の氣もなしに門番を吟
咐けられて、朝から晩まで出入の人を、ナンジャ、「かに」ぢやと言問ひ合せ、
苦しい辛い日を送つて居たが、まるで暗の夜に月が出たやうに、三人の娘の顔を
見た時は、自分の胸は世界晴れ、なんとも、かとも譬へ方ない、心の海に眞如の
日月が照り輝いた。ヤレヤレ、日頃辛い門番も、時には又こんな美しい姫神を拜
む事が出来るかと思つた矢先に、ビツクリ腰を抜かしてヒツクリ返つた。ヤ、烏
賊にも章魚にも蟹にも足は四人前だ。城を傾けると言ふ美人に會うて、俺も身體

を傾けたワイかたむ」

赤熊あかくま「オイオイ、蟹彦かにひこの奴やつ、みつともないぞ。女をんなに心こころを蕩とろかす奴やつが、如何どうして門もん番ばんが勤つとまらうかい。心得こころえたが宜よからう」

「ナ、ナ、何を吐ぬかしよるのだ、赤熊あかくまの野郎やらう、閻魔えんまが亡者まっじやの帳面ちやうめんを調しらべる様やうな七しちむつかしい顔かほをしよつて、人ひとの前まへでは偉えらさうに役人面やくにんづらをさらして居ゐるが、夜分やぶんになつて女房にやぼうに酌しやくをさして酒さけを喰くらつて居ゐたその時ときの顔かほを何なん度も見みて居をるが、見みられた醜態ぎまぢやないぞ。女をんなは見みても穢けがらはしいと言いふ様やうなその面付つらつきは何なんだい。虚偽きよぎの生活せいくわつを續つづけて、この自由じいう自在じざいの世よの中なかを自みづから苦くるめ、自みづから縛しばり、面白おもしろくもない生活せいくわつを送おくるより、この蟹彦かにひこのやうに天真爛漫てんしんらんまん、少すこしの飾かざりもなく淡泊たんぱくに身みを持もつたら如何どうだい。あまり堅かたくなると、第二だいにの固虎かたとらと言いはれるぞよ」

「猿さるに澁柿しぶがきを打ぶつ付つけられて「メシヤゲ」たやうな面付つらつきをしやがつて、腰こしを傾かたむけたの、別嬪べつびんだのとは片腹痛かたはらいたいワイ」

今いままで晃くわう々と輝かがやき渡わたれる天津日あまつひは俄にはかに眞黒しんこくとなり、六合暗澹りくがふあんたんとして咫尺しせきを辨べんぜず、風かぜは縦横無盡じゅうわうむじんに百萬ひやくまんの猛虎まうこの哮ほえ猛たけるが如ごとき唸うなりを立たてて、常世とこよの城しろも、秋あき

の木葉と「コツパ」微塵に散らさむばかりの光景とはなりぬ。赤熊、蟹彦は耳を抑へ目を閉ぢ、大地に平蜘蛛か蟹のやうになつて平伏し、天明風止の時を待つのみ。

(大正一一・二・一九 舊一・二三 北村隆光録)

第三章 赤玉出現(四三三)

花毛氈を敷き詰めたる常世城の大奥には、常世神王中央の高座に現はれ、鷹取別、玉山彦を左右に侍らせ、鶴翼の陣を張りしが如く傲然として構へ居る。照山彦、竹山彦はズツと退つて下座に控へ、間の國に使ひせし一伍一什の顛末を喋々として陳べ立つれば、常世神王は機嫌斜ならず、
「天晴れ天晴れ汝らが功名、流石の日の出神も、汝等が縦横無盡の機略には舌を捲くであらう。今後はますます力を盡し、拔群の功名手柄を顯はせよ」

「ヤア、思ひがけなき御褒の御言葉、照山彦の身として、分に過ぎたる勿體なさ。今後はますます常世神王の御爲に、粉骨碎身、犬馬の勞を吝まざるの覺悟で御座ります。」

鷹取別「わが推量に違はず、今日の使命を首尾よく果せし兩人、常世神王におかせられても嘸御満足ならむ。鷹取別も感じ入りたり。」

「これはしたり、常世神王とやら、廣國別の大國彦、大國彦の廣國別、何が何だか自由自在に千變萬化の自在天だと、途上にての噂、聞いたる時の竹山彦の心の裡の腹立しさ。竹山彦の竹を割つたる清い正しい心は何とやら、常世の暗の雲につつまれた心地ぞ致したり。如何に三五教の宣傳使、常世の國に来るとも、竹山彦のあらむ限りは、わが天眼通力にて所在を探ね、一々御前に引摺り出し御目に懸けむ。頭も光る照山彦の人も無げなる功名顔、餘りの可笑しさ臍茶の至り、ワハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

と四邊に轟く竹山彦の笑ひ聲。

日は早西に傾きて、黄昏告ぐる村鴉、カハイカハイと鳴きながら、峙を指して

歸り行く。無常を告ぐる鐘の音は、コーンコーンコーン、コンコンコンと響くなり。間毎を照らす銀燭の、眩きばかり頭の光り照山彦は、「むつく」と立ち上り、
「ヤアヤア、固虎々々、何を愚圖々々いたして居るか。早く三人をこの場へ誘ひ
來れ」

と呼ばれば、聲の下より固虎は、

「只今三人の娘、それへ召伴れ参ります。暫らく待たせられよ」

と言ふ折しも、忽ち四面暗黒となり、暴風吹き荒び、奥殿の柱は前後左右に搖ぎ
出し、百雷の一時に轟く如き地響、續々として鳴動し、燦然たる銀燭の光は忽然
として消え失せ、黑白も分かぬ眞黒の闇の岩戸は下されたり。鷹取別は暗中より
大音聲、

「ヤアヤア者ども、咫尺も辨じ難きこの暗黒、片時も早く燈火を點ぜよ」

と呼はる聲は、百雷の一時に轟く如くなる大音響に包まれて、聞えざるこそもど
かしき。常世神王は心も心ならず、暗中に端坐し、如何成り行くならむと、默然
として胸躍らせ控へ居る。暗中を縫うて毬の如き一箇の玉、座敷の中央に忽然と

して現はれ、見るみる座敷の中央を右に左に、前に後に浮遊し始めたり。されど色赤きのみにて少しも光輝を放射せず、玉は赤、白、黄、紫、いろいろと色を變じ、照山彦の禿頭に向つて、ポンと突き當れば、

「アイタ、アイタ、」

と照山彦は俯伏せになる。玉は子供の毬をつくやうに照山彦の頭を基點として、ポンポンポンポンとつき出すにぞ、鷹取別はその玉を打たむとして座席より踏み外し、スツテンドウと仰向けに倒れたれば、玉は所を替へて、鷹取別の仰向けに倒れた頭の上を、又もやポンポンポンと毬つき始めぬ。不思議や、鷹取別の身體は強直してビクとも動き得ず、玉は又もや位置を替へ、鼻の上に来りて又もや毬をつく。鷹取別は、

「アイタ、アイタ、アイタ、鼻が破る。堪まらぬ堪まらぬ」

と泣聲をしぼる。玉は又もや常世神王の額に向つて、唸りを立てて衝突したるその勢に、常世神王は高座より仰向けに後方の席に筋斗打つて顛倒し、息も絶え絶えに呻き苦しむ折もあれ、竹山彦は暗中より大音聲、

「ヤア、奇怪千萬なる此の場の光景、火の玉となつて風雨を起し、唸り聲を響かせ、又もや常世城を攪亂せむとする心憎き八十曲津神、わが言靈の威力にくたばれよ」

と言葉の下に、火の玉は姿を掻き消し、今まで猛り狂ひし風の響はピタリと止みて、空には一面の星光り輝き渡る。竹山彦は火打を取り出し、力チ力チ火を打ち銀燭を点じたれば、四邊は晝のごとく輝き渡りぬ。この時三人の娘を伴ひ來りし固虎は、腰を抜かして玄關に蹲踞み居たりき。

「ヤア、思はざる惡神の襲來、これはしたり常世神王様、お怪我は御座いませぬか。竹山彦、御案じ申す。イヤなに松代姫殿、神王の御介抱遊ばされよ。これはしたり鷹取別殿、貴下も常ならぬ御顔色、曲の火玉に打たれ給ひしと見受れたり。竹野姫殿、介抱遊ばされよ。鷹取別殿の鼻は如何致されしや。イヤもう臺なしで

ござる」

鷹取別は、搗き立ての團子のやうな鼻をペコペコさせながら、何か「フガ」フガ言つて居るばかり。

「貴殿の御言葉は判然いたさぬ。【フガ】フガとは何の事でござるか。不甲斐ないことだとの御歎きか。ヤアヤア照山彦殿、貴下の頭は如何遊ばされた。實に妙な恰好でござる。梅ヶ香姫殿、サア早く御介抱遊ばさるるがよからう」

「アイ」

と答へて三人の娘は、竹山彦の命ずるままに甲斐々々しく介抱に取りかかりぬ。

「ヤアヤア、常世の國の雪起しか、城倒しか何だか知らないが、生れてから見た

こともない天狗風が吹きよつて、この固虎も吃驚仰天、齒の根も【ガタ】【ガタ】

【ガタ】虎になつて了つた。皆の方々は美しい御介抱人が出来て結構だが、吾々

は肩は抜け、腰は抜け、旁型の悪いものでござる。三人のお方は夫々御介抱人が

あつて結構だが、この固虎に限りて誰も世話する女がないとは、片手落にも程が

ある。何れの方か此の場に現はれて、わが身の介抱して呉れてもよささうなもの

だな」

竹山彦「オイ固虎、貴様は日頃から無信心で、【おまけ】にエルサレムの宮で昔

から型もないやうな悪戯をいたしただらう。それが爲に時節到来、神様が仇敵を

御討ち遊ばしたのぢや。【ガタ】虎でなうて【カタ】キとられた。御氣の毒様な
がら、生命の失くなるまで、其處で辛抱なさるがよからう。】

「ヤア竹山彦殿、そんなこと所ではない。本當に眞面目になつて、誰か呼んで來
て下さいな。」

「常世神王様、お歴々の方々のこの大難を救はねばならぬ吾々の任務、汝が如き
に介抱する暇があらうか。」

時しも馥郁たる香氣は室内に充ち渡り、嚙曉たる音楽は何處ともなく聞え來る。
常世神王は松代姫に救はれ、御機嫌斜ならず、鷹取別、照山彦も、竹野姫、梅ヶ
香姫に介抱され、メシヤゲた頭や鼻の痛さを忘れて悦に入る。音楽の音はますま
す冴え渡り、何處となく四邊は賑しくなり來れり。

空に轟く天の磐船、鳥船の響は手に取る如く聞え來る。これより松、竹、梅の
三人を始め、竹山彦は常世神王の覺え目出度く、何事も一切の重要事件の帷幕に
參ずることとはなりぬ。

第四章 鬼鼻團子（四三四）

皮膚滑かにして雪の如く、肌柔かにして眞綿の如く、眼の潤ひ露の滴る如く、
優しみの中に何處となく威嚴の備はる三人の娘、天津乙女の再來か、さては彌生
の櫻花、臥龍の松か雪の竹、鶯歌ふ梅ヶ香の、春の衿を姉妹の、松、竹、梅の宣
傳使、四邊眩き銀燭の、光に照りて一人の、その麗しさを添へにける。常世神王
は御機嫌斜ならず、三人の娘を左右に座らせ、満面笑を湛へながら、
「見れば見る程優しき女の姉妹連れ、ウラル教の最も盛んなる常世の國に、三五
教を宣傳せむと、華々しく進み來るその勇氣には感じ入つたり。さりながら、常
世の國はウラル教の教を以て國是となす。萬民これに悦服し、その神徳を讚美渴
仰す。然るに、主義精神全く相反せる三五教を此地に布くことあらむか、忽ち民
心離反して、擧國一致の精神を破り、天下の爭亂を惹起せむは、火を睹るよりも
明かなれば、常世の國は三五教の宣傳を嚴禁せり。然るに纖弱き女の身を以て、
雄々しくも我國に入り來り宣傳歌を歌ふは、天下擾亂の基を開く大罪人なれば、

汝等姉妹を嚴刑に處すべきは、法の定むる處、さりながら汝等姉妹三人は、吾等が危急を救ひたる其功に愛で、今迄の罪を赦し、殿内の一切を任せ、わが身邊に侍して、家事萬端の業務に盡さしめむ」

と嚴命するにぞ、松代姫は莞爾として、常世神王に向ひ、羞かしげに花の唇を開き、

「實に有難き御仰せ、世事に慣れざる不束者の妾姉妹を、畏れ多くも殿内に止めさせ給ふは、暗中に光明を得、盲龜の浮木に逢へるが如き身の光榮、愼んでお受け致します」

と、言葉淀みなく述べ立てたり。

「ヤア、松、竹、梅の宣傳使様、貴女方は天地赦すべからざる大罪人なりしに、今日只今よりは、常世神王が掌中の玉、女御更衣にも、ずっと優れたお局様。吾々は今後は貴女様の御指揮を仰ぎ奉る。何分粗暴極まる竹山彦、御遠慮なく宜敷く御叱り下さいませ」

と敬意を表しける。鷹取別は鼻をフガフガ云はせながら、

「ヤア、目出度いめでたい、お祝ひ申す、三人のお局様、如何に出世をしたと言つて、鼻を高くしてはなりませんぞ。何と言つても、常世神王の宰相は此の鷹取別、如何に勢力を得ればとて、この鷹取別を除外する事はなりませんぞ」

「アハ、ハ、ハ、ヤア、今迄は鷹取別様の家來となつて居た竹山彦、今日より常世神王のお言葉に依りて、直々の家來、最早貴下の臣下では御座らぬ。貴下は吾々の同僚と心得られよ。斯く申す竹山彦の顔の眞中なるこの鼻は、何時とはなしに、ムクムクと高くなつた心持が致す。それに引替へ、貴下は火の玉に鼻を突かれ、平素の鼻の鷹取別も、お氣の毒千萬、柿の「へた」のやうに潰挫げて終つて、兩方の頬邊にひつ附き申した。これからは鼻の低取別となつて、今迄の傲慢不遜の態度を改められよ。さてもさても鼻持ならぬ御顔だなア、ワハ、ハ、ハ、ハ、」

「常世神王は打解け顔、松代姫にお尋ね申したき事がござる。貴女方は孱弱き女の身をもつて、この常世の國に宣傳すべく御出でになつたのは、何か深い様子が御座らう。包まず隠さず仰せられたし。斯くなる上は、何の隔てもなければ、心置きなく事實を述べられ

たし』

と問ひかくる。松代姫は言葉も軽々しく、

「ハイ、妾姉妹三人の者、艱難苦勞を嘗めて常世の國に参りしは、餘の儀では御

座いませぬ。畏れ多くも三五教の守護神、神伊奘册命様、日の出神様、ロツキ

山に現れますと承はり、お跡慕ひて参りました。郷に入つては郷に従へとかや、

妾はこれより三五教を棄て、常世神王の奉じ給ふウラル教に歸依いたします。然

しながら、伊奘册命様にも、日の出神様にも、矢張り三五教をお開きで御座いま

せう』

「イヤ、伊奘册大神、日の出神は、ロツキ一山に宮柱太敷き立てウラル教を開き

給ふぞ』

と、したり顔に述べ立つる遠山別の抗辨いと怪し。この時門番の蟹彦は、畏る畏

る此の場に現はれ、

「鷹取別の司に申上げます。唯今ロツキ一山より、美山別命、國玉姫と共に、御

使者として御來城、別殿に御休息せられあり。如何致しませうや』

「吾は是より寢殿に入つて休息せむ。鷹取別よ、ロッキー山の神使の御用の趣、しかと承はり、わが前に報告せよ。松、竹、梅の三人の局來れ」と云ひつつ、常世神王は三女と俱に寢殿指して悠々と進み入る。鷹取別は蟹彦に向ひ、

「汝は別殿に於て、美山別、國玉姫の御上使に向ひ、速かに此場に御出場あらむ事を申傳へよ」

「委細承知致しました」と顔を上げる途端に、鷹取別の顔を眺め、

「ヤア、貴方様、その鼻は如何なさいました。【ハナ】【ハナ】以て合點の行かぬ御鼻、一割高い鷹取別の天狗鼻も、今は殆ど柿の【へた】同様でございますなア。餘り慢心致して、鼻ばかり高う致すと、良の金神が現はれて、鼻を捻折つて潰挫いで終ふぞよと、三五教とやらの教ふるとか聞きました。眞實に貴方の鼻は、【へしやば】つて、穴も碌に見えませぬ。鼻の穴【ない】教ではございませぬか」

「何馬鹿申す、速かに別殿に報告致せ」

「これはこれは、失禮致しました。「ハナ」「ハナ」以て不都合千萬、平た蟹になつて謝罪ります。何卒「カニ」して下さいませ」

と蟹彦は馬鹿口を叩きながら、この場を立出で獨言、

「何だ、折角美人が来たから、このお使を幸に、美しいお顔を拜みたいと思つて居たのに、アタ面白うもない、鷹取別の潰れ面や、照山彦の禿頭を見せつけられて、エエ胸糞の悪い事だワイ。二つ目には竹山の火事のやうに、ポンポンと吐かしようつた鷹取別、何の醜態だい、甚だ以て人氣の悪い面付だぞ」

斯かる處へ現はれ出でたる固虎は、

「オイ、蟹彦、今貴様は何を言つて居つたか、天に口あり壁に耳だ。チャンと此固虎さまのお耳に這入つたのだ。鷹取別様に言上するから、覺悟を致せ」

「ヤアヤア、瘦兒に蓮根とは此事かい。固虎奴が何時の間にか聞きよつて……貴様は聞かねばならぬ事は一寸も聞かず、聞かいてもよい事はよく聞く奴だ。言はねばならぬ事は一寸も能う吐かさず、言はいつでもよい事はベラベラと喋りたがるなり、困つた奴だ。が貴様が鷹取別様に言ふなら言つてもいい。その代りにこの

蟹彦も堪忍ならぬ。貴様は最前、中門の傍で、三人の娘を魔性の女だと言つてゐたであらうがな。チヤンとこの蟹彦が聞いてゐるのだ」

「オイ、もうこんな事は爲替だ爲替だ、互に言はぬ事にしようかい。又屑が出る」と互の迷惑だからなア」

「態見やがれ、固虎の野郎、ガタガタ慄ひしよつて、他人を呪へば穴二つだ。二つの穴さへ滅茶々々になつた。鷹取別の鼻の不態つたら、見られた醜態ぢやありやアしない。ヤア、ガタ虎、貴様も来い」

と肩肘怒らし、横に歩いて別殿に進み入つた。蟹彦、固虎の兩人は恐る恐る別殿に進み入り、右の手を以て頭を幾度となく掻きながら、

「これはこれは、御上使様、長らくお待たせ致しました。サア、案内致しませう、奥殿に……」

と云ひながら先に立つて手を振り、怪しき歩み恰好の可笑しさ。殊に蟹彦は腰を曲げ、尻を一步々々、プリンプリンと振りつつ行く。美山別、國玉姫は悠々として奥殿に進み入り、正座に着き、

美山別「オー、常世城の宰相神、鷹取別とはその方なるや」

「ハイ、仰せの如く、吾は鷹取別でございます」

「ヤア、貴下の顔は如何なされた。少しく變ではござらぬか」

「ハイ……」

竹山彦は恭しく、

「これはこれは御上使様、よく入來せられました。今迄は鷹取別、今日よりは鼻

の高きを取り、低取屁茶彦と改名致しました」

鷹取別は鼻をフガフガ言はせながら、何事が言はむとすれども、聲調亂れて聞

き取り得ざるぞ憐れなる。

「何はともあれ、伊奘册大神の御神勅、慥に承はれ。常世の國に渡り來る松、竹、

梅の宣傳使は、間の酋長春山彦の家に隱匿はれ居ると聞く。汝は速かに捕手を遣

はし、彼ら三人を生擒にして、一時も早くロツキー山に送り來れよとの嚴命」

と嚴かに言ひ渡す。美山別の言葉に蟹彦は、

「モシモシ美山別の御上使様、その松、竹、梅の三人は既にすでに常世神王の御

居間に……」

遠山別「シート、蟹彦、要らざる差出口……門番の分際として何が解るか。汝ら

の口出すべき場所でないぞ、退り居らう。……これはこれは御上使様、鷹取別は

御覽の通り言語も明瞭を缺きますれば、次席なる遠山別が代つてお受け申さむ。

御上使の趣、委細承知仕りました。一日も早く三人の娘を生擒にし、お届け申さ

む」

「早速の承知、満足々々、大神におかせられても、嚙御満足に思召すらむ。さら

ば某は、急ぎロッキー山に立歸らむ。常世神王に委細傳達あれよ」

と言ひ棄て、數多の家來を引連れ、馬上裕に揺られながら、國玉姫と諸共に門外

さして歸り往く。蟹彦は美山別の後を追驅けながら、

「モシモシ御上使様、遠山別の「トツケ」もない言葉に欺されぬやうになされま

せや。慥にこの蟹彦が、何も「カニ」も承知致して居ります」

と、皺枯聲に叫べども、蹄の音に遮られ、美山別は耳にもかけず、足を早めて雲

を霞と歸り行く。

第五章 狐々怪々〔四三五〕

美山別、國玉姫の二人の上使の悠々と歸りし後の奥殿は、何となく一座白けて、互に吐息の聞ゆるのみ。

「ワハ、ハ、ハ、何とまあ、世の中は「まま」ならぬものだなア。吾々が力を盡し心を竭して照山彦と二人で、松、竹、梅の三人を此處までお供を申し上げ、常世神王様の御機嫌斜めならず、吾々もお蔭で神王様にお賞めの詞を戴いて喜ぶ間もなく、有爲轉變の世の中とは云ひながら、變れば變るものだなア。手を覆へせば雲となり、手を翻へせば雨となる。折角喜んで連れ歸り、常世城内に錦上更に花を添へたと思つたのは束の間、夢か現か幻か、ロッキー山の大神様より、松、竹、梅の三人を速かに生擒にして送つて來いとこの御嚴命、あれ程御機嫌のよい常

世神王様に、如何してその嚴命を傳へられやうか。屹度掌中の玉を奪られたやうに、失望落膽の淵に沈まれるのは見えるやうだ。マアマアお役目柄、斯う云ふ時は下役の竹山彦は都合がいいワイ。サアサア鷹取別さま、上使の趣、常世神王へ御奏上遊ばさるがよからう」

鷹取別、鼻のベシヤゲた顔をあげて、

「フガフガホンガ……ホンナホトハ、ハタハタハタドリハケガフハズトモ、フチノヨウヒク、ハケハマヒコガ、ソソモンヒテフレ」

「フガフガフガ、ホンナホトハなんて、何の事だか竹山彦にはさつぱり分りやしない。ハナハナもつて困り入った。ヤア、仕方がない、遠山別さまの番だ。フヤクホウジヨウハサレハセ」

遠山別は苦蟲を噛むだやうな面付しながら、「むつく」と立ち、寢殿目蒐けて足重たげに、ノソリノソリと出でて行く。

「折角生命がけになつて猪を捕つた犬が、獵師に鐵砲の臺で頭を【こづかれ】たやうなものだなア。酒屋へ三里、豆腐屋へ五里の山坂を越えて、漸う油揚を買つ

て大方家の軒まで歸つた時に、空の鳶に禿頭をコツンとやられて、吃驚して腰を
抜かした矢先、油揚を攫へて去なれたやうな、面白からぬ有難くもない怪體な場
面だ。常世神王様も短い夢を見られたものだ。今夜のやうな【こん】な結構な、
丸で婚禮見たやうに、目出度いめでたいと【よる】【こん】だ間もなく、【コン】
【コン】さまに魅まれたやうに、何が何やらさつぱり【コン】と譯が判らぬ事になつて了うた。それだから【コン】【タン】は夢の枕と云ふのだ。ああ、【コン】
【コン】【チキチン】、【コン】【チキチン】だ。春山彦が【よる】【こん】で
隠まうて居つた綺麗な女を、鷹取別が鷹が雀を掴むやうに引奪つて歸つて、常世
神王に賞めてもらつて、鼻高々と今夜は歸つて女房に自慢をしようと思つて居た
のに、鼻はメシヤゲて【こん】な態、それについても常世神王の廣國別さま、今
夜の驚きはお察し申す。【コン】ナ【コン】トラストが又と世界にあるものか。
驚に尻をぬかれたと言はうか、嘘を月夜に釜をぬかれたと言はうか、たとへ方な
い今晚の仕儀、實に【コン】難【コン】窮の至りだ。【コン】【コン】【チキチ
ン】、【コン】【チキチン】だ

照山彦てるやまひこ「オイ竹山彦たけやまひこ、ソナ無駄口むだぐちを言いつてる場合ばあひぢやなからう。何とか善後策ぜんごさくを講かうじなくてはならないのだ。お前まへもいよいよ鷹取別たかとりわけさまと肩かたを並ならべる様やうになつたのも、三人さんにんの娘むすめを首尾しゆびよく連つれて歸かへつたお蔭かげぢやないか。神王しんわうさまのお心こころをお察さつし申まをせば、そんな氣樂きらくな事ことを言いうて居をられるかい」

「ハテ、困こまつたなア、誰たれぞよい智慧ちゑ貸かしては呉くれまいか、この竹山彦たけやまひこにかかる處ところへ、廣國別ひろくにわけの偽常世神王にせとこよしんわうは、遠山別とほやまわけを従したがへこの場ばに現あらはれ、氣分きぶん勝すぐれぬ面おももちにて、

「アイヤ皆みなの者もの、松まつ、竹たけ、梅うめの三人さんにんを、一時いちじも早はやくロツキー山ざんの館やかたにお送おくり申まをさなくてはならぬ。ぢやと申まをして……」

竹山彦たけやまひこ「【ぢや】と申まをして、鬼おにと申まをして、虎とらと申まをして、竹山彦たけやまひこには何なんとも、しし仕様しやうがありませぬワイ。これは一ひとつ鷹取別たかとりわけさまに智慧ちゑを貸かして貰もらひませう。もし、モシ、ハタホリアケハン、ホイケン八、ホウデホザリマス」

とわざと鼻聲はなごゑを出だす。鷹取別たかとりわけは、
「フガフガフガ」

と解らぬ言語を續けるのみ。

折角豫が氣に入つたる三人の娘、お渡し申すは本意なれど、今暫く當城内に留め置きたし。吾聞く、春山彦には、月、雪、花の三人の花の如き娘ありとのこと、手段を以て三人の娘を連れ歸り、身代りとしてロッキー山に送らば如何に」

イヤ、遠は常世神王さま、天晴れの妙案、遠山別言葉を構へ、これより間の國に向ひ、三人の娘を召し連れ歸らせませう」

委細は汝に任す。よきに取り計らへよ」

ワハ、、、、妙案々々妙ちきチン、「コン」「コン」「チキチン」、

【チキチン】、竹山彦、カンカンチキチン、カンチキチン」

斯かる處へ、目付役の雁若は慌しく進み來り、

申上げます。ただいま中依彦様、間の國より三五教の宣傳使、照彦と云ふ豪の者を唐丸駕籠に乗せ御歸城でございます。如何取り計らひませうか」

アイヤ、遠山別、その他一同の者、中依別の連れ歸りし照彦とやらを、この庭前に引き据ゑ、詳細なる訊問いたせ」

一 同 『ハハーツ』

常世神王は悠々として寢殿さして進み入る。

(話は少し元へ返る)

馬に跨り悠々と意氣衝天の鼻息荒く、三五教の宣傳使照彦を捕へて、常世城の門前に立歸つたる中依別は、門の戸叩いて大音聲。

『アイヤ、門番、中依別なるぞ。速かにこの門開け』

蟹彦『ヤ、ナンヂヤ、又妙な奴がやつて来たのでないかな。〔中よりアケ〕なんて、決つたことを言ひよるワイ。門のした門を、〔中より開け〕るのは當然だ。外より開けられる門なら、外から吠鳴らなくても、黙つて開けて這入れればいいのだ』

とつぶやきながら、門を左右にソツと開いた。

中依別は馬に跨りながら、
『アイヤ、蟹彦、夜中に開門大儀であつた。この駕籠が通つた後は、門扉を堅く

閉め守れよ。ヤアヤア家來の者共、大儀であつた。汝らは各自家に歸り休息せよ
と云ひ捨てて奥へ奥へと進み行く。

中依別は中門の外にて馬をヒラリと飛び下り、馬の鬣、顔、首などを撫で擦り
ながら、

「ヤア、鹿毛よ、長々苦勞をかけた。ゆつくり廐へ行つて休んでくれ」

蟹彦は腰から上の横に曲つた、細長き身體を揺りながら馳せ來り、駕籠の中を
一寸覗き、

「イヤー」

と又もや腰を抜かして大地に倒れ伏す。中門はサツと開かれ、中依別は駕籠を昇
がせながら奥深く進み入り、庭先に駕籠を下させ、

「只今無事歸城致しました。三五教の宣傳使照彦、よく御檢視下さいませ」

竹山彦「ヤー、これはこれは中依別殿、お手柄お手柄、定めて別嬪で御座らうな
「イヤ、なに竹山彦殿、八字髭を生やした、筋骨逞しき鬼をも取りひしぐ大丈夫

でござる、御油斷あらせられるな」

鷹取別は鼻聲にて、

「ホレ八ホレ八、八カ八カヒヨリワケカ、ヒヤクメ、ハイギハイギ」

竹山彦「百目、二百目、一貫目、三十貫目の荒男、さぞ重かつたでござんせうな」

竹山彦殿、冗戯も時にこそよれ、櫛風沐雨、難を冒して使命を全うし、漸く歸

り來りし中依別殿、鄭重に御待遇なさらぬか、照山彦御注意申す」

駕籠の中より、

「三五教の宣傳使照彦とは假の名、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

天の數歌名に負ひし戸山津見の神、見參せむ」

竹山彦「ヤア、これは中々手強き奴でござる。アイヤ方々、御油斷あるな」

遠山別「拙者はこれより臣下を召し連れ、間の國に出張いたさむ。後は鷹取別殿、

照山彦殿、竹山彦殿、萬事宜しく頼み入る」

と言ひ捨てて旅装を整へ、馬に跨り、數十人の家來を引き連れ、月の光を浴びな

がら一目散に進み行く。

照彦は駕籠の戸開けて立ち現はれ、遠慮會釋もなく座敷の眞中にドツカと坐し、

「吾こそは三五教の宣傳使、常世の國の枉神を言向け和すそのために、手段を以て中依別が駕籠に乗り、ここに現はれし上は、汝らが運命も朝日に露の消ゆるが如く、春日に雪の解くるが如く、風前の燈火、扱も扱もいぢらしい者だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

と言ふかと思れば、姿は消えて行方も空に白煙、松吹く風の庭木をわたる聲のみ聞え来る。

照山彦「合點ゆかぬこの場の仕儀、中依別殿、彼は何者なりしぞ」
中依別「……」

竹山彦「ワハ、ハ、ハ、ハ、ハ、此奴、狐の悪戯だらう。多士濟々たるこの城中に、人もあらうに中依別の、【中】にも【別け】て【より】處のない馬鹿役人を遣はしたその酬い、泣かぬばかりの顔付して、よりどころなき今の體裁、譯の判らぬ事だワイ。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

かかる折しも、横歩きの蟹彦は、庭先の樹間潜つてこの場に現はれ、御一同に申し上げます。夕、大變でございます。只今駕籠に乗つて來た罪人は、

門前に現はれ、大勢の家來を手玉に取つて、亂暴狼藉の最中、一時も早く彼を召捕り下さいますやう」

鷹取別「ホガホガホガ」

照山彦「素破こそ一大事。ヤアヤア者共、表門に向へ」

竹山彦「コリヤ面白い、ワハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

照山彦は數多の家來を引連れ、門前に慌しく走り出て見れば、こはそも如何に、見渡す限りの馬場先は、皎々たる月に照らされ晝の如く、人影らしきもの目に當らず寂然たり。照山彦は兩手を組み、首を傾け、

「ハテナー」

彼方の森蔭より、何物の聲とも知らぬ、

「【コン】【コン】、クワイクワイ」

「今のは狐の聲ではなからうかな」

（大正一一・二・一九 舊一・二三 東尾吉雄録）

第六章 額の裏〔四三六〕

鷹取別、中依別、その他の竝居る役人共は呆氣に取られ居る時しも、照山彦はこの場に引返し來り、

「ヤア、妙な事もあるものですなア。今御覽の如く、照彦とやらこの場に現はれ、

忽ち姿を隠し、門外にて又もや數多の從者共を相手に亂暴狼藉を働くと、注進に

よつて、取るものも取敢へず、表に驅け出し様子を見れば、豈計らむや、人影さ

へもなく、ただ彼方の森に、コンコンと狐の鳴き聲聞ゆるのみで御座つた。さて

もさても不思議な事で御座るワイ」

竹山彦「不思議と言つても、斯様な不思議が御座らうか。イヤ中依別殿、はるば

ると御苦勞千萬にも、間の國まで御足勞になつたのも全く水の泡、泡を喰つてア

フンと致すとはこの事で御座らう」

鷹取別「フギヤフギヤフギヤ」

竹山彦「是はしたり鷹取別殿、まだ明瞭とは申されませぬか。寔に以て不憫、不

體裁、不幸、フギヤフギヤの至りで御座る」

欄間の懸額の後より、ウーと唸り聲響き来る。一同は合點ゆかずと、懸額に向

つて目を注ぎ耳を傾くれば、額の後より、

「【ア】ハ、、、【ア二】圖らむや、妹圖らむや、はかり知られぬ神變不思議

の魔術にかけられ、案に相違の汝らが、【ア】フンと致して呆れ果てたるその面

付き、餘りと云へば餘りでないか。頭拘へて【ア】イタ、コイタ、暗から現は

れた赤玉に、頭を押へ叩かれ、鼻をメシヤゲられ、赤い顔して目をキヨ口つかせ

た悪神の寄合ひ、浅い智慧を以て何を企んでも、足下の見えぬ汝等が盲目神、足

下から鳥が立つぞよ。何程焦慮つても鐵面しう致しても細引の禪、彼方へ外れ此

方へ外れて、後の始末はこの通り、【あ】な可笑しやな。三五教の宣傳使と侮つ

て、阿呆の限りを盡した汝等、餘りの事で二つの眼から【あはれ】や雨が降る。

怪しい物音に耳を澄ませ、有らう事か有るまい事か、肝腎の玉を取られたその有

様、有るに有られぬ御心配、御察し申す、【ア】ハ、、、阿呆々と鳥のお悔

み、才ホ、、、」

照山彦「ヤア怪しき額の裏、何れの悪神か、汝が正體暴露し呉れむ」
と額を目がけて、あり合ふ木刀を取るより早くハツシと打てば、怪しき聲は再び
方向を轉じ、何處ともなしに、

「【イ】ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、【い】ぢらしいものだ。幾程この方の所在を探した處で、煎
豆に花が咲くまで此方の姿は判るまい。如何なるらむと呼吸も絶えだえに心を焦
つ意氣地なし、俺が意見をトツクと聞け。長途の旅を漸う此處に手柄顔して威張
顔、歸つて来た中依別、一寸一服憩ふ間もなくこの場の仕儀、聊か以て御迷惑千
萬、石が降つても槍が降つても、照彦の居所を探して常世神王の御目にかけてねば、
汝の顔は丸潰れ、上役の椅子も保てまい。今迄の威勢はさつぱり地に落ちるぞよ。
手柄顔して欣々歸つた中依別も、嗚呼痛はしや【い】たはしや、只一人の照彦を
數多の人数に守らせ、漸う歸つて来たものの、何時の間にやら蛻の殻、お憫しい
事で御座るワイ。今も古も類例なき赤恥を搔いて、犬にも劣る淺猿しさ。犬でさ
へも嗅付けけるのに、何と困つたものだのう。言ひ甲斐なき汝ら一同、忌々しさう
なその面付、常世の國人に茨の如く忌み嫌はれ、嫌らしい面付きになつて胴も据

らず、【い】ら【い】らとその肝煎り、曲津の神の好い容器、思案の外とは色情ばかりではないぞよ。ウフ、フ、フ、フ、

照山彦 如何にも合點のゆかぬ物聲で御座る。何れも方、如何いたしたらよからうかな。色いろと工夫を致して、斯の如き異聲を打ち消さねばなりませんまい」

又もや何處ともなく、

「【ウ】フ、フ、フ、呆氣もの、狼狽もの、何を【ウ】サ【ウ】サ吐くのか、憂いか、辛いのか、【う】か【う】か」と計略にかかり、こんな憂き目を見せられて、浮ぶ瀬もあるまい。動きの取れぬこの有様、嘘で捏ねた罰は目の前、頭を打たれ鼻を打ち、呆けた面して現三太郎、智慧の疎いにも程がある。甘い企みも水の泡、

【う】よ【う】よと毛蟲のやうに何をして居る。【ウ】ラル彦の教を奉ずる狼狽もの、この方の申す事は氣に入るまい、煩さからう。その憂ひ顔は何だ。この上もなき馬鹿な目に遇うて、頭は【へさへ】られ、鼻は挫がれ、照彦には逃げられ、他所の見る目も氣の毒なりける次第だ。ワハ、ハ、ハ、ハ、

中依別 「ヤ、方々、あの聲は何者で御座らうな。強う耳に觸り申す。ウラル教の

宣傳歌でも歌へば消えるでせうかな。コレコレ竹山彦殿、貴下は何とか御工夫はあるまいか」

「サア、吾々も斯の如き聲ばかりに向つては、何の手段も御座らぬ」
額の上より、

「エへへへ、オホへへへ」

照山彦「エ、又始まつた。奇怪千萬な笑ひ聲で御座る」

何處ともなく、

「【エ】へへへ、【エ】、面倒な、モ一之位で止めようか。イヤイヤまだあるまだある。【オ】ホへへへ、大國彦の神を日の出神と偽り、大國姫を伊邪那美神と偽つて、ロッキー山に立籠り、この世を亂さむ汝等一味の企み。常世神王とは眞赤な偽り、極悪無道の廣國別、鬼とも蛇とも分らぬ悪人、【カ】へへ、神も堪へ袋が切れるぞよ。固虎や蟹彦の不具人足の構へて居る常世城の表門、體主靈從國はサツパリ破れて今の状態、悔んで還らぬ照彦の宣傳使、どうして顔が立つと思ふか、返す返すも馬鹿な奴だ。可憐相なから、神は之きりにして歸つてやらう。」

今後は氣を附けたが宜からう。ウー」

固虎、蟹彦は廣き庭前に蛙突這となつて、蛙に煙草の汁を吞ませし如く、目を

しばしばさせながら、

固虎「ア、阿呆らしい、悪性な目に遇はされて、【イ】、何時の世にか

忘れられやうか。【ウ】、迂闊々々して居ると、【カ】、蟹彦よ、【キ】、

狂者になるぞよ」

蟹彦「何だ、貴様は化物の眞似をしよつて、【ク】、なんて目計り【クル

【クル剥いて、黒い面して【くたば】つて、【ク】、もあつたものかい。

【ケ】、怪體が悪いぞ、怪しからぬ目に遇うた。マア怪我がなくてまだしもだ。

【コ】、【こ】んな目に遇うたら、如何な鷹取別でも、【サ】、早速に開い

た口が閉まるまい」

【シ】、靜かにせぬかい、聞えたら叱られるぞ、【ス】、好かぬたらしい。

【セ】、【せ】んぐり【せ】んぐり仕様もない事言ひよつて、背に腹が替へら

れぬと言ふ様な、誰も彼も面付を遊ばした【そ】の可笑しさ。【タ】、狸の奴

に、チ、チ、【チ】ツクリ、【ツ】、魅【こ】ままれよつて、【テ】、體裁【ていさい】の悪い、
 【ト】、、蜥蜴【と】かげつら面して、【ナ】、、何【なん】の態【ざま】だ。中依別【なかよりわけ】もあつたものか。【二】、、
 二進【に】つちも三進【さん】つちもならぬ目に遇【あ】はされて、月夜【つきよ】に釜【かま】を抜【ぬ】かれたやうな面【つら】をして、根【ね】つ
 から葉【は】つから見當【けんたう】が取れぬでないか。【ノ】、、進退【の】つびきならぬ目に遇【あ】うて、
 【ハ】、、恥【は】ぢを搔【か】き、【ヒ】、、雲雀【ひ】ばりのやうに、【フ】、、【ふ】ざいた、
 【へ】、、屁理屈【へ】りくつも、【ホ】、、反古【ほ】こになつて、【マ】、、松代姫【ま】つよひめや竹野姫【たけのひめ】、梅【うめ】
 ケ香姫【が】かひめの、【ミ】、、三人【み】たりの、【ム】、、娘【む】すめを、【メ】、、妾【め】かけにしよつて、
 【モ】、、桃【も】もの實【み】だとか、梅【うめ】の實【み】だとか、【ウメイ】事【こと】ばつかり、【ヤ】、、
 【や】らかそと思つても、【イ】、、【い】きはせぬぞよ。【ユ】、、幽靈【い】うれいの濱【はま】
 風【かぜ】ぢやないが、またドロンと消【き】えられて、【エ】、、豪【えい】らい泡【あわ】を吹【ふ】くのであらう。
 【ヨ】、、餘程【よ】つほど【よ】い白癡【たわけ】ぢやワイ
 竹山彦【たけやまひこ】「ヤイ、その方共【はうども】は何【なに】を小【ちひ】さい聲【こゑ】で吐【ほき】いて居【を】るか。なぜもつと大【おほ】きな聲【こゑ】で
 申【まを】さぬのか
 固虎【かたとら】「【カ】、、勘忍【か】んにんして下【くだ】さいませ。一寸化物【ちよつとばけもの】の【かたとら】を行【や】りました。

〔か〕たたら 固虎の狂言、〔が〕た〔が〕た顛ひの御一同、實に以て御氣の毒千萬

照山彦は大聲にて、

馬鹿ツ

固虎、蟹彦、兩手を擴げ立上り、

ア

固虎「オイ蟹公、貴様は何を言うたのだ」

蟹彦「固公、貴様は何言うたのだい。俺は何も言ふ積りぢやなかつたのに、俄に

腹の中から何だか出て來よつて、止度もなく喋つたのだ」

「貴様もさうか。俺も何だか腹の中から聲が出て來よつて、止めようと思つても

止まらぬ。止めて止まらぬ【こゑ】の道だ」

洒落ない、洒落どころの騒ぎかい」

この時門前に又もや騒がしき人馬の物音聞え來る。一同は立ち上り、何事なら

むと聞耳立つるを、蟹彦は矢庭に横しなげになりて、表門に駆け付ければ、

「ヤアヤア吾こそは、常世神王の命を奉じ間の國に使ひして、月、雪、花の三人

を奪^{うば}ひ歸^{かへ}つた手柄^{てがらもの}者[、]一時^{いちじ}も早^{はや}く此門^{このもん}を開^あけよ」

蟹彦^{かにひこ}「何^{なん}と合點^{がてん}のゆかぬ事^{こと}だワイ。現^{げん}に今夜^{こんや}出立^{しゅつたつ}した遠山^{とほやま}別^{わけ}が、何^{なに}ほど足^{あし}が速^{はや}いと言^いつても、閒^{はま}の國^{くに}へは三百里^{さんびやくり}もある。そんな馬鹿^{ばか}な事^{こと}があつて堪^{たま}るものか。這^{こい}奴^つアまた化物^{ばけもの}だ。開^あけて堪^{たま}らうかい」

門外^{もんぐわい}より、

「コラコラ門番^{もんばん}、何^{なに}をグツグツ、……速^{すみや}かにこの門^{もん}開^{ひら}け」

「此門^{このもん}も彼^あの門^{もん}もあるもんか。譯^{わけ}の分^{わか}らぬ【もん】が遣^やつて來^きよつて、又^{また}も一^{ひと}

【もん】ちやくを起^{おこ}さうとするのか。よしこの方^{ほう}にも考^{かんが}へがある、門番^{もんばん}だとて馬

鹿^かにはならぬぞ。この蟹彦^{かにひこ}さまの腕力^{わんりよく}で、【もん】で【もん】で揉^もみ潰^{つぶ}してやら

うか。オーイオーイ、赤熊^{あかぐま}早^{はや}う來^こぬかい、又^{また}【こん】【こん】さまだ。今夜^{こんや}のや

うな怪體^{けつたい}な夜^よさりと云^いふものは、古^こ今^{こん}獨步^{どつぽ}珍^{ちん}無類^{むるゐ}だ。今晚^{こんばん}は非^ひが邪^{じゃ}でも、この門^{もん}

開^あける事^{こと}はまかり成^なる【もん】か」

と呶^ど鳴^なり立^たてて居^ゐる。

赤熊^{あかぐま}はこの場^ばに走^{はし}り來^{きた}り、

「ヤイヤイ蟹彦、確りせぬか。何を吐いて居るのだ。門はすつかり開いてあるぢやないか、開けるも開けぬもあつた「もん」かい。モーつい夜が明けるのだ。何を寢呆けて居るのだ」
と拳固を固めて横面をポカンと打てば、蟹彦は吃驚し目を擦りながら、よくよく見れば門は「がらり」と開いて人影もなく、月は西山に落ちて、木枯の風ヒユウヒユウと笛吹いて渡り行くのみなり。

(大正一一・二・一九 舊一・二三 森良仁録)

第七章 思はぬ光榮 (四三七)

ロッキー山の山嵐
漲り溢れ轟々と

篠つく雨に百川は
西北指して流れ行く

その水音も高野川 常世の國の神人の

心も騒ぐ荒波に 常世神王始めとし

鼻の潰れた鷹取別や 激しき憂目を美山別
立歸つたるその後

中依別は門番の蟹彦、赤熊を庭前に呼出し、

「ヤア、蟹彦、赤熊、その方は門番として今日の不體裁、照彦を取遁がせし罪に

依つて、唯今より暇を遣はず。一時も早くこの場を立去れ」

竹山彦「これはこれは、中依別殿の御言葉とも覺えぬ。今日の不始末は、些々た

る門番の知る所にあらず。大切の玉を取遁がせしは、監督の任に當らるる貴下中

依別にあらずや。蟹彦、赤熊が如き門番に當り散らさるるは、吾々として一圓合

点ゆかず。貴下は先ず良心あらば責任をもつて自ら退職せられよ」

蟹彦「イヤア、偉いえらい、流石は竹山彦の御大將、それでこそ人民の水の上に立

ち、人を治むる寛仁大度の御仁徳、蟹彦實に恐れ入る。ヤアヤア中依別、良心あ

らば貴下先づ責任を以て退職せられよ」

竹山彦「コラコラ蟹彦、門番の分際として聲名高き中依別の上役に向つて無禮で

あろうぞよ」

蟹彦「これはこれは竹山彦の御大將様、中依別は常世城に、大勢上役の坐します

【中より別】て、イヤハヤもう話にも、杭にもかからぬ奴でござる。どうぞ公明

正大なる御判断のほど願ひ奉ります」

門番に似合はぬ面白いことを申す奴、併しながら今迄は、頭を振り、尾を掉り、

喪家の狗の如く、唯々諾々として上長と仰ぎし中依別に對し、餘りと云へば餘り

の現金ではないか」

「ヤア、何も彼も世の中は時の天下に隨へといふ事があります。旗色の好き方に

つくのが當世、もはや竹山彦の一聲にて日ごろ傲慢不遜なる中依別が退職となり

しは、この蟹彦一人ではござらぬ、城内一同の下役共は一人も残らず手を拍つて

喜ぶことと存じます。イヤもう氣味のよい事で、餘り麥飯……ドツコイ……【む

ぎ】道な事をいたした罰で、【あは】喰つて貴方様に一時も早く【いね】だとか

【こめ】米だとか言はれたその時の面付、見られた【ざま】ぢやありませんわ。【そば】に見て居る私は、イヤもう【うどん】でも呑み込んだ様に、つるつると咽の溜飲が下りました。何時迄も驕る何たらは久しからずとかや。是も世間の【みせしめ】、中々以て【より】に【よつた】中依別の【がらくた】役人、粉から米を取った後の粕役人、この蟹彦が一つ鼻息したら十間先へペロペロと散るやうな【ざま】になりました。どうぞ竹山彦の御大將、一時も早く御英斷を願ひます。私一人が喜ぶのではなく、城中もこれからは皆の役人共が喜んで勇んで、寝轉んで、ころこんで、滑つて跳ねて、尻餅搗いて、涎をくつて……』

『コラコラ、止度もなく何をべらべら囀るか。控へて居らう』

『ハイハイ、【かに】して下さいませ。あまり逆上て、蟹が一寸泡を吹いたのでございます。泡に就て思ひ出した。【あは】喰つたのは中依別、哀れなものぢや。』

こんな毒性な目に【遇は】ぬ昔がまだよかつたに、【ア】ンポントンの眞黒氣の黒焼奴が、案外はやく失策つた。晝行燈の餡【ころ】餅、暗夜に間に合ふのは提燈、行燈の明り。常世の城に晝行燈は、イヤもう一寸も御用は【あ】りますまい。

【イ】、因縁が因果か、【い】んちき野郎が陰氣陰鬱なその陰險な陰謀を企んだ因縁に依つて、今この通り夢にも知らぬ大鐵槌を頭上から痛々しくも下され、これ迄の位置をすつかりと返上し、何時にない曲けた顔して【い】としいことだ。早く歸して下さいな。古も今も悪人の榮えた例はない。猪武者の中依別、一時も早く家に歸つて隠居でもしたが大よからう。【い】らざる事に肝煎致したその罰で、居るに居られぬこの場の仕儀、曲津の容器、色は眞黒けの黒助」

「アハ、ハ、ハ、よう貴様は泡を吹く奴だ。よしよし、中依別も唯今限り常世城の規則に照し、退職を命ずる。就てはその部下の蟹彦も罪は同然」

「モシモシ、そりやちつと違ひは致しませぬか。オイ赤熊、俺が御拂ひ箱となつたら貴様も同然だぞ」

赤熊「チヨツ、何を吐しよるのだ、受賣ばつかりしよつて、偽物を賣つたつて買手が無いぞ。【ウ】、運の悪い貴様だ。動きのとれぬ御仰せ、【う】ぢ【う】ぢ致さず早く歸れ。常世城の鐵門はこの方一人で大丈夫だ。貴様のやうな泡吹き野郎がけつつかると、俺までが、しまひには【いね】と云はれて、【そば】杖を喰

はねばならぬ。エ、エ、【きび】の悪い。早く歸るがよからうぞよ」

蟹彦「オイ、そんな偉さうなことを申すと、もう斯うなつては友達でもない、赤の他人だ。【エ】、遠慮會釋があるものか。貴様の腸を抉つて【え】らい目に遇はしてやるのだ。今まで偉さうな面構をして居つたが、もう叶ふまい。高野川にでも身を投げて死んで了へ」

竹山彦「コラコラ兩人、此處を何と心得て居る、勿體なくも常世城の常暗の御城内だ。面黒い事を吐かず、早く狐の尾を下げて、コンコン今後はきつと憤みます、クワイクワイ改心改良仕ると四這になつて謝れ。然らば竹山彦が暫らくの猶豫を與へる。その間によつく胸に手を當てて去就を決するがよからう。不届きな奴、門番を免職さして中依別の後釜に据ゑてやらうか。常世神王の御側附に致してやらうか」

蟹彦「あゝモシモシ、竹山彦の御大將、ソ、それは本當でございますか。叱られて上の役になると云ふことは、根つから葉つから蕪から譯が解りませぬ。今後はもつともつと不都合を致してドツサリ叱らるることですな。私が今日より中依

別、ヤア、有難いありがたい、夢に牡丹餅食つたやうだ」

赤熊「コラコラ、貴様は改心致さぬと今後は赦さぬぞ。中依別の後釜に赤熊を命ずるぞよ」

「ナ、何を吐しやがる。自分のことを自分が命ずる奴が何處にあるか。コン畜生、貴様狐に魅まれてそんな【うさ】言を吐きやがるのだな。俺が一言云つたつて、さうきつう根にもつて、コンコン吐すに及ばぬではないか」

竹山彦「矢釜敷いワイ。ぐづぐづ吐すと常世神王の御脇立にして了ふぞ。中依別の後の役を仰付けるぞ」

蟹彦「ナンダか狐に魅まれたやうだな。斯んな結構なやうな、怪體なやうな、こんがらがった、混沌としたことが又と世にあらうか」

「何はともあれ、兩人は元の如く赤門に退つて門番を致せ。追つて沙汰を致す」
ふたり
二人は、

「ハイハイ、【しやちこば】りました。【しやつちけのう】ございます」
と云ひながら、元の門番の溜り所に腑に落ちぬやうな面構をして歸り行く。門外

にはかに騒がしく、人馬の物音手に取る如く聞え来る。

蟹彦「オイオイ又だ。照彦の奴、蒸返しに來やがったのだらう。豪い勢だ。今度は澤山の手下を伴れて居るらしい。一つ貴様と俺と、とつときの智慧と力を放り出して、照彦をふん縛つて神王様の前へ突き出したら、御褒美が頂けようも知れぬぞよ」

赤熊「オケオケ、そんなことしたら何時迄も門番だ。貴様は門番に適當な奴だ。貴様に限ると一口言はれたが最後、門附になつて一代浮ぶ瀬はありはしないぞ。こんな失敗があつた御蔭で、中依別は氣の毒だが、吾々は常世神王の御側附、一段下つた所で中依別の後釜だ。傘屋の丁稚ぢやないが、骨折つて叱られるより優しだ。貴様も割とは氣の利かぬ奴ぢや。とつくりと思案をしたがよからうぞ」

この時門外より聲高く、

「ヤアヤア遠山別、月、雪、花を召伴れ立歸つたり。一時も早くこの門開け」と呼はる聲に兩人、

「何が何だか一寸も聞えはしない。戸を開けたとか、遠山【あけ】だとか、何の

事ことだい、遠とほの昔むかしに俺おれの耳みみは遠山とほやま別わけになつて了しまつた』

門もんを叩たたき、

『開あけよあけよ』

と叫さけぶ聲こゑ、ますます激はげしくなり來きたる。

蟹かに彦ひこ『豆腐とうふ屋やでも遠山とほやまでも、左官さくわんでも構かまふものかい。この門もん開あけて堪たまらうかい。

この方ほうは勿體もつたいなくも常世神王とこよしんわうの御脇立おわきだちだ。中依別なかよりわけの後繼あとつぎだ。遠山とほやまが何なんだ、豆腐とうふ

のやうな腰こししよつて偉えらさうに云いふない。御役おやくが違ちがふぞ。仕損しそこなふな』

中門なかもんの方ほうより、馬鹿ばか役人やくにんの粕熊かすくま馳はせ來きたり、

『ヤア、ギヤアイ、赤あかよ、蟹かによ、竹山たけやまさまが赤蟹あかがににちよつと來こいて仰有おつしやるぞ』

二人ふたり『赤蟹あかがになんて莫迦ばかにしやがる。まるで二ふたつ一いちだ。オイ粕熊かすくまの粕野郎かすやらう、そら何なに

吐ぬかす。常世神王とこよしんわうの御脇立おわきだち様さまに向むかつて、一寸ちよつと來こいだの赤蟹あかがにだのと、貴様きさまは狐きつねにでも

魅つままれよつたな』

折をりしも六時むつときを報ほうずる常世城とこよじやうの鐘かねの音ねは、コーンコーンコーン、コンコンコンと

響ひびき渡わたる。

第八章 善惡不可解 (四三八)

鳩、雀、鶉、【つむぎ】齧かす、鷹取別の秘藏の臣下、閒の國に使用して、片道さへも三百里、山河荒野を打渉り往復したる遠山別、漸う此處に月、雪、花の三人を、肩肘【はる】山彦の館より、意氣揚々として駒に跨り、濁流漲る高野川を打渡り、門前に立ち現れ、
『遠山別歸城せり、門番早く此門開放せよ』
と呼ばはりある。

蟹彦『エー、矢釜しいワイ。奥から一寸來て呉れ、門外からも開けて呉れ、之だから人氣男になるのも困るワ。彼方からも袖を引かれ、此方からも袖を引かれ、去んでは嬢に【ボヤ】かれ困つた事だ。ア、ア、色男も辛いものだなア。オイ赤

熊、その方に門番を申し付ける、この方は奥へ行つて休息致す

赤熊「洒落るない。この赤熊は今日只今より中依別と申すお歴々の役人様、ヤア

蟹彦、その方に門番を申し付ける

「何を吐しよるのだ」

と言ひながら兩人は、中門ガラリと開いて奥殿に進み入る。

鷹取別、鼻聲で、

「フラフラ、ホノホハ、ホンパカギリノ、ハンヒラカナイカ、八二ヒホ、八カフ

マヂヤナイカ、ハガレオロー」

蟹彦「ヤアヤア、中依別が申付くる。鼻「ベチヤ」の鷹取別は門番を仕れ。ヨウ

照山彦、その方も同然、門番に昇級させる。有難く思へ

照山彦「オイ蟹彦、赤熊、その方は氣が違つたのか。血迷つたか。確り致せ

蟹彦「ワツハツハ、血迷ひもせぬ。呆けも致さぬ。この方の申す事、一時

も早く承はり、門番となつて表門を堅く守れ。イヤ何、竹山彦殿、今日よりは貴

下と同役、今後はお心安く願ひ申す

竹山彦「これはこれは痛み入つたる御挨拶、何分よろしく御願ひ申す」

鷹取別は呆けたる顔を「シヤクリ」ながら、

「ハテさて合點のゆかぬ事だワイ。天が變つて地となり、地が天となり、山は海となり、海は山となり、桑園化して湖水となり、墓場は化して觀劇場となる。何と合點のゆかぬ事で御座るワイ」

竹山彦「ヤア鷹取別、照山彦、何をグツグツ致して居るか、早く表門を開けぬか。中依別は何故この場を立ち去らぬか」

何時の間にやら表門を「ガラリ」と開いて、威勢よく入り来る遠山別、三人の娘を引つたてながら此場に現はれ、

「ヤア、某は間の國に使用して首尾よく御用を仕遂げ、華々しき功名手柄を顯はして歸城致せしものぞ」

蟹彦「ヤア、遠山別か、大儀」

「何ぢや、その方は蟹彦、門番の身として、畏くも奥殿に入り居るさへあるに、この方向に向つて恰も臣下を扱ふが如き雑言不禮、何と心得居るか」

「ヤア、何とも、【カニ】とも心得居らぬ。一時も早く月、雪、花の三人をこの場に御案内申せよ」

「何だツ、怪體な、譯の分らぬ事になつて來たワイ。ヤア、鷹取別のその鼻は如何なされた。照山彦、その頭は如何なされしか」

「エイ、頭も顔もあつたものか、早く此場へ姫を出さぬか、何は兔もあれ、某が三人の娘の首實檢いたさむ」

と玄關先に据ゑられたる駕籠を一寸開き、中を窺いて呆れ聲、

「ヤア、赤熊よ、何とも彼とも言へぬ。呆れ果てたるばかりなりけりだ」

赤熊「また、照彦か」

蟹彦「照るの照らぬのと、イヤもう偉い照りで御座る。空照り渡る秋月姫、眩き

許りの眞白けの深雪姫、四季時を論ぜず咲き匂ふ橘姫、某も腰抜かさむ許り【ビツクリ】仰天致した」

「コラ蟹彦、【タカ】が知れた三人の女、何だ恐ろしさうに何を【ビク】つく」
三人の娘は悠然として此場に現はれ、

「ヨー、遠山別とやら、お迎へ大儀であつた。その褒美として今日ただ今より常世城の重役を免じ、門番に命ずる。一時も早く門番部屋へお下りあれ」

この時奥殿より常世神王を始め、松、竹、梅の三人の局は此場に現はれ來り、常世神王「ヤア、遠山別、御苦勞御苦勞」

「ハイ、實に以て遅なはり候段、平にお許し下さいませ。愈松、竹、梅の三人、アー否々、月、雪、花の三人の乙女、これへ引き連れ申候。篤と御實檢下さいませ」

何處ともなく、何神の聲とも知らず、中空より、
「ワツハツハ、、、、オツホツホ、、、、常世神王をはじめ一同の者、足許に注意致せよ」

と呼はるにぞ、常世神王は此聲に「ハツ」と氣がつき四邊を見れば、常世城の馬場に「へた」張り、その他一同の役人も泥にまみれて蠢いて居る。またもや中空に聲あつて、

「ヤア、コンコンチキチン、コンチキチン、ネツカラホントカ、コンチキチン、

コンコンチキチン、コンチキチン[㊦]

(大正一一・二・二一 舊一・二五 北村隆光録)

第九章 尻藍^{しりあゐ} (四三九)

ひとときせんきはな 一時千金花の春、金勝要大神の御分靈言靈姫命の鎮まり給ふ常世國、山野は青
はるひめ 春姫の、百機千機織成して、緑紅白黄色、花咲き亂れ百鳥は、木々の梢に歌ひ
ま 舞ひ、天津日かげも麗かに、陽炎の野邊に立つ有様は、大海原の凧ぎたる波の如
くなり。龍宮城に救はれて、日の出神と諸共に、琴平別の龜に乗り、智利の海邊
にうかび上りし淤^あ藤山津見は、朝日も智利や祕露の國、宇都山峠を踏み越えて、
あゆ 歩みもカルの國境、御稜威も著く高照の山を下りて、神のめぐみも高砂や、常世
くに 國をつなぎつけ、東と西に波猛る、大海原に浮びたる、^{はさま}「間」の國に一人旅、
こころ 心も軽き蓑笠の、盲目もひらく「目」の國の、荒野ヶ原を治めむと、草鞋脚絆の

扮装に、夜と晝との別ちなく、恵みの露に濡れながら、草の衾に石枕、星のついでたる蒲團着て、山河あれし國原を、心も清き宣傳歌、歌ひて進む雄々しさよ。三
五教の宣傳使、五六七の神代を松代姫、心直くなる竹野姫、梅ヶ香姫の夜晝を、
露に濡れつつ進み来る。人足繁き十字街、川田の町の真中に、ピタリと合す顔と
顔、

於滕山津見「ヤア、貴女は珍の都の城主、正鹿山津見の御娘子におはさずや。風
に香へる梅ヶ香の、床しき後を尋ねつつ、此の町の入口まで、スタスタ進み来る
折しも、町人の噂によれば、年は二八か二九からぬ、十九や二十の美しき女の宣
傳使通過ありとの女童の囁き、まさしく御姉妹にめぐり會ふ時こそ來れりと、心
の駒に鞭つて、思はず驅出す膝栗毛、イヤ去年の夏、アタルの港に上陸し、玉山
の山麓にてお別れ申してより、何の便りも夏蟲の、秋も追々近づきて、哀れを添
ふる心の淋しさ。鬼をも挫ぐ於滕山津見の大丈夫さへも、かくも淋しき秋の旅、
紅葉は散りて啼く鹿の、「しか」とお行方も探すによしなく、心の色の紅葉散る、
智利の山路を踏み越えて、「間」の國に來る折しも、心驕れる鷹取別が目付の者

に捕へられ、常世の國に送られ給ひしと聞きたる時のわが思ひ、隙間の風にもあてられぬ花の蕾の女宣傳使、秋野にすだく蟲の音の、【いとど】哀れを催して、男泣きにぞ泣きゐたる、折から囁く人の口、聞き耳立つる時の駒、花の姿の宣傳使、艶麗まばゆきばかりの【やさ】姿と、道説きあかす「目」の國の、今日あたり御目にかかり、嬉しさ、悲しさ、御いたはしや、その御姿のやつれさせ給ふことよ。神の御爲め道のためとは言ひながら、聖地エルサレムに於て神政を掌握し給ひし天使長、桃上彦命の御娘子の雄々しき御志、男子としての吾等、實に汗顔の至りに堪へませぬ」

と、三人の娘が應答するの暇さへ與へず、心のたけを【くだ】くだと、賤の小田巻繰返すのみ。

松代姫「どなた」かと思へば、淤藤山津見の宣傳使様、珍しい所で御目にかかりました。妾姉妹三人は「間」の國の酋長春山彦に助けられ、照彦の戸山津見、駒山彦の宣傳使にめぐり會ひ、月、雪、花の三人の春山彦が娘と共に、この「目」の國に進み入り、メキシコ峠の山麓にて、あちらへ一人こちらへ三人と袂を別ち、

宣傳歌を歌ひつつロッキー山に進み行かむとする所でございます。マアマア御壯健でゐらせられます。貴下に妾は異郷の空で巡り會ふことの嬉しさ、天にも上る心地がいたします。ここは路の上、彼方の森に行つて休息の上ゆるゆるのお話をいたしませうか

「それも宜しからう。然らば、あの森を目當に一足参りませう」

ここに一男三女の宣傳使は、宣傳歌を歌ひながら東北指して進み行く。永き春日も早西に傾きて、四邊は霧の如き靄に包まれ、闇の帳は下されて四邊は暗く、千羽鳥は空を包んでカハイカハイと啼きわたる。夕暮告ぐる鐘の音は、四人の胸を打ちて秋の夕の寂寥身に迫る。

花の姿を「目」の國の、野邊にさらすも絲櫻、心も細き絲柳の、竝木を縫うて進み行く。俄に前方にあたり、騒々しき物音聞ゆるにぞ、四人は思はず立ちどまり耳を傾くれば、宵闇の空を通して細き篝火瞬き出し、忽ち宣傳歌が手に取る如く聞え来る。一同は聲する方に引きつけらるる如く近より見れば、數百人に取り圍まれ、何か頻りに述べ立つるものあり。

四人は竊に足音忍ばせつつ、闇に紛れて群集の中に紛れ込み、よくよく見れば一人の男、小高き巖の上に立ちて、頻りに群集に向ひ何事か説き諭しめる。

群集の中より、眼のクルリとした鼻の左に曲つた、色黒の大男は宣傳使に向ひ、
「ヤイ、貴様は三五教の宣傳使であらう。ここは常世神王の御領分なるぞ。ウラ
ル教を奉じて、民心を統一する神國なるに、汝等が如き惡宣傳使、魔術を使つて
常世の城を攪亂し、鷹取別の司の高き鼻を「めしやげ」させたる惡神を奉ずる宣
傳使であらう。この方は牛雲別と申す者、汝を召し捕らむがために、常世神王の
大命を奉じて、三五教の宣傳使を搜索に來たのだ。この「目」の國は、その名の
如く鷹取別の幕下の鵜の【目】、鷹の【目】を光らす國だ。サア、その
巖を下つて尋常に縛に就け。もはや叶はぬ。「ヂタバタ」したとても、かくの如
く數十人の手下をもつて取り圍みたる以上は、汝が運命ももはや百年目、素直に
降伏いたせ」
と雷の如き聲を張り上げて呶鳴りある。巖上の宣傳使は、殆ど耳に入れざる如き
鷹揚なる態度にて、

「アイヤ、牛雲別とやら、よつく聞けよ。吾こそは汝の言ふ如く三五教の宣傳使だ。如何に多勢を恃み吾を取り圍むとも、吾には深き神護あり。一時も早く此の世を亂すウラル教を捨てて、治國平天下の惟神の大道なるわが教を聞け。常世神王かれ何者ぞ。鷹取別かれ何者ぞ。積惡の報い、神罰立所に下つて鼻挫かれしその哀れさ。斯くの如き神の戒めを受けながら、なほ悔い改めずば、鷹取別が臣下たる汝等が鼻柱、一人も残らず粉碎し呉れむぞ。サア、わが一言は神の言葉だ。救ひの聲だ。きくか、きかぬか、善惡邪正、天國地獄の分水嶺、この巖の如き堅き信仰を以てわが教に従ふか。否むに於ては吾は千變萬化の神術によつて、汝等が頭上に懲戒を加へむ。汝等の中、わが言葉の身に沁みし者は名乗つて出よ」と牛雲別の雷聲に數倍せる銅鑼聲して、獅子の咆ゆるが如く唸りある。數十人の手下は、この強き言靈に膽を挫がれ、耳を塞ぎ、思はず地上に縮み踞むぞをかしけれ。

牛雲別は、

「エ、面倒なり、思ひ知れよ」

と言ふより早く、巖上に羅刹の如き相好にて駆け上り、鐵拳を固め、宣傳使の面部を目がけて、骨も砕けよとばかり力を籠めて殴りつけむとする。

この時遅く、かの時早く、宣傳使は飛鳥の如くヒラリと體をかはし、牛雲別の足に手をかくるや否や、牛雲別はモンドリうつて、さしにも高き巖上より、大地にドツと許り顛落する途端に、體の重みにて柔かき土の中に頭部をグサリと刺し、臀部を天にむけ、花立の如き調子にて手足を藻掻き居る。

「また 吾もや群集の中より、

「われ 吾は蟹雲別なり、わが鐵拳を喰へ」

と云ふより早く、拳骨を固めて打つてかかるを、宣傳使は、

「めんたう 工、面倒なり」

と首筋掴んで、猫を提げし如く片手に撮んで、牛雲別の上に向つて吊り下したり。牛雲別の兩足と、蟹雲別の兩足はピタツと合うて、ここに面白き輕業が演ぜられたり。頭と頭とは天と地に、尻と尻は向ひ合して、【シリ】合ひとなりぬ。流石兩人の亂暴なる計畫も、【シリ】滅裂となりける。

☐ 神の誠の道を取違いたすと、頭を土に突込んで足を仰向けにして、のたくらねばならぬぞよ」

との神諭そのままである。

牛と蟹との兩雲別は、頭を下に牛の【しり】の、手四つ足四つ、ドタリと倒けて四つ這ひとなり、蟹雲別の八つ足となつて大地を這ひ廻る可笑しさ、外の見る目も哀れなりける次第なり。

(大正一一・二・二一 舊一・二五 櫻井重雄録)

第一〇章 注目國〔四四〇〕

神力無雙の宣傳使に打つてかかつた牛雲別は、さしもに高き巖上より地に抛げ落され、鋭利なる頭上の角をへし折り、ギウ牛云ふ目に遇はされて、牛叶はぬとも何とも云はず、雲を霞と群衆を別けて【のた】のたと姿を隠しぬ。蟹雲別は横

腹を、倒れた拍子に岩に打ちつけ、蟹のやうに平たくなりて、「カニ」して呉れとも何とも云はず横這になり、雲を霞と群衆を別けて、ガサリガサリと逃げ出せる。

宣傳使は聲張り上げて、

「ロツキーの山より高き、天狗の鼻の鷹取別は、火玉に打たれて鼻を【めしやが】れ、中依別は、常世の狐に魅まれて、大事の役目を仕損じた。鬼の様なる角の出した牛雲別は、力の強い麻柱の、神の教の宣傳使、蚊々虎に、大事の大事の角折られ、牛々言はされ牛叶はぬと、群衆に紛れて逃げ歸り、たうとう姿を牛なうた。蟹雲別は、鋏のやうな鋭い腕を振り上げて、蚊々虎に飛びかかり、膽を摧がれ腰痛め、蟹面をして、暗にまぎれてガサガサと、雲を霞と逃げ失せたり。サアこれから次の番、百人千人一時に、かかれかかれ、欲に目のない目の國の、心の聾の曲津神、これから此方が驚掴み、驚にはあらで鷹取別の、烏の様な黒い面、鳩の奴【め】が豆鐵砲、喰つたやうな面をして、ずらりと竝んだ皆の奴、蚊々虎の目の前に、阿呆面さらした可笑しさよ。つらつら思ひ廻らせば、常世の國は盲目

國、「盲が垣を覗くよな、恰好致してこの方を、十重や二十重に取圍み、アフンと致して空むいて、もろくも白くも目の玉を、白黒々と剥きながら、未だ目が醒めぬか盲ども、こんな苦しい目に遇うて、かち目もないのにちよん猪口才な、盲千人目の開いた、奴は一人もないとは情ない、ホンにお目出度い奴ばかり。コンナ結構な麻柱の、教が滅多に聞けるかい、目無堅間の救ひの船だ、摧げる恐れは一つもないぞ、今に眩暈が出て来るぞ、面目なげに「め」そめそと、吠面かわくも目の前ぢや、吾はこれから目の國を、「め」げ醜國と云うてやる。醜の曲津の遠近に、荒ぶる罪穢の深い國、何を目あてにウラル教、一寸先は暗の夜と、曲の教に目が眩み、心の眼は眞の暗、何と哀れなことぢやらう。聲を「烏」の蚊々虎が、「鳶」のやうに掛けて来て、「つる」「鶴」述べる言靈を、首を長うして聞くがよい。聞く耳もたぬ木耳の、松茸、椎茸、濕地茸、毒茸、滑茸を食はされて、黒血を吐いて目を廻し、終にや冥土の旅枕、首も廻らぬ眞暗がり、なまくら者の寄り合うた、この目の國をよつく見よ。四方の山々禿だらけ、大野ヶ原は草だらけ、茨の中を潜るよな、この國態は何事ぞ、蚊々虎の申すこと、馬鹿にするならする

がよい、天の冥罰立所、神の恵にあひたくば、今日を醒ませ目をさませ、前途の
見えぬ目の國の、人こそ實に憐れなれ、人こそ實に憐れなれ
と巖上に突立ち、群衆に眼を配りながら唸鳴り立てて居る。

この時、男女の聲を交へし宣傳歌が、暗の帳を破つて音樂の如く聞え來る。折
しも東の海面を照して、まん圓き月は下界を覗き給ふ。今まで百舌鳥か、燕か、
雀か、雲雀か、山雀のやうに囀つて居た牛、蟹の手下の者共は、蛇に狙はれた蛙
の如く、蟆蛙に魅られた黼の如く、「なめくじり」に追ひかけられた蛇の如く、
縮かまりて大地に喰ひつき【しが】みつぎ、地震の孫か、ぶるぶると慄ひ戦き居
たりける。

☞ 月は照る照る目の國曇る、荒れた目の國暗となる
と涼しき聲またもや聞え來る。蚊々虎は巖上より聲する方に向つて、
☞ ホー、その聲は淤滕山津見か、よい處でお目にかかった。マアマア、緩り話さ
うかい

珍山彦の化けの蚊々虎は、涼しき聲を張り上げて宣傳歌を歌ひ始めたるに、四

人の宣傳使は聲に應じて共に歌ふ。月は海より【いづの】御靈の【すみきり】渡る、心も赤き言靈に打たれて、一同は思はず宣傳歌につられて歌ひ始むる。歌の調子に乗せられて、今まで足腰立たぬ憂目に遇ひし悪神等も、嬉し涙を流しながら立ち上つて舞ひ踊る不思議さ。これよりこの國の神人は三五教の教を固く守り、今までの悪心を残る隅なく拂拭し、靈主體從の身魂となり變りたるぞ畏けれ。この國は今に珍山彦の血縁傳はり居るといふ。

(大正一一・二・二一 舊一・二五 加藤明子録)

第一章 狐火(四四一)

川田の町を離れたる 常磐の森の岩の根に
心も堅き五柱 珍山彦を始めとし

浪の響や吹く風の
於滕山津見の宣傳使

ミロクの御代を松代姫
梅ヶ香姫や竹野姫

ここに五人はいそいと
〔アナウ〕の高原打ち越えて

シラ山峠の東麓を
こと問ひあはす〔コトド〕川

湯津石村にたばしれる
血潮に染むる曲神の

苦しき悩みを洗はむと
思ふ心も〔カリガネ〕の

たより渚の力リガネ灣
東を指して浪の上

進み行くこそ雄々しけれ。

南北に帯の如く延長せる力リガネ半島に、五人の宣傳使は上陸した。宣傳使の

影は細き竹の如く、長く地上に東に向つて倒れる。遠に長き春の日も、〔カリガ

ネ〕灣の彼方に春き始めた。立つて行く人、寢て進む人、十曜の紋の十人連、日

没と共に惜しき別れを告げにける。

靄に包まれたる浪を分けて、十四夜の月は東天に輝き始めぬ。照りもせず曇り

も果てぬ春の夜の朧月夜に、
は、
も果てぬ春の夜の朧月夜に、
は、

「ホー 淤藤山さま、
て、音に響いたコトドリ川をやうやう渡り、
の、入江を渡つて十人連、
レ淋しやと思ふ間もなく、
歌ではないが、
此地まで青息吐息の爲體でやつて来た。
松吹く風の松代姫、
鎮まり給ふ常世國、
ねば吾々の役目がすまぬ。
れから行きませう」

淤藤山津見「モシモシ珍山彦様、
たは十人連れと云ひましたねえ。
いつも途方途轍もない法螺を吹いて
吾々に栃麵

棒を振らすのですか」

珍山彦「日の神様のお蔭で十人連れぢや、神のお蔭がなければ、矢張り男女五人だ。日の神のお蔭にはづれたと思へば、今度は三口ク様のお蔭でまた元の十人連れ。情ない浮世と人は言へども、蛸さへ釣れる世の中だ。貴下も深山の谷底で、照彦神に蛸をつられたさうですなア」

「その話は聞いて下さるな。一時も早くこのシラ山峠を向ふに渡つて、常世の國へ参りませう。實は「アナウ」高原を渡つて、「テキサス」の方から常世城の背面に出る考へでしたが、何だか俄に足が東に向つて、川田の町で不思議にも三人の姫に出會ひ、又もや常磐の森で貴下にお目にかつたのも、何かの靈界からの御指揮でせう」

と話す折しも、前方より幾百とも知れぬ人馬の物音聞え来る。五人の宣傳使は又もや敵の襲來かと、腹帯を締め、直に月光に向つて手を合せ、神言を奏上し、聲を揃へて宣傳歌をうたひける。

追ひおひ近づき来る群衆の中より、一人の棟梁らしきもの現はれ、

「ヤアヤア、それに居る五人の者は三五教の宣傳使であらう。「テツキリ」松、竹、梅の三人の女に相違はあるまい。常世城を夜陰に乗じて逃げ出し、又もやこの力より固き固虎が召捕に向うたり。サア尋常に縛に就くか。否と申さば、この槍の「キツ」尖にて貫かうか。返答如何に」

と馬を進ませ唳鳴りつつ迫り来る。

一行は何の應答もなく、默然として佇立し居たるに、前後左右に忽ち起る鬨の聲、追ひおひ身邊に近寄り来る。空には數十の天の鳥船天を覆ひて猛り狂ひ、威嚇運動が開始されて居る。固虎は、

「ヤア、汝らは此方の威勢に恐れて、一言半句も言葉はなく、がたがた慄うて居るのか。今にこの固虎が合圖を致さば、空の鳥船より下す投弾に、汝ら五人の身體は木端微塵。微塵となつて滅ぶるよりも、一寸延びれば尋とやら、一息の間も命が惜しからう。サア此方に四の五の吐さず隨いて來い。六でもない事轉つても、この方はエエ七面倒くさい、頭を叩くと八り倒して九て仕舞ふのだ。十こよの國

の固虎の旭日昇天の御威勢を知らぬか」

と空威張に威張り散らして吠鳴り居る。珍山彦は吹き出し、

「ウワハ、ハ、ハ、ヤア固虎、【ほざい】たりなほざいたりな、ロッキー山に常世

城に、巢を構へたる八岐の大蛇の尻尾の奴ども、此方を何と心得てをるか、世界

に名高い三五教の蚊々虎さまとは俺の事だ。名を聞いて一同の奴、肝を潰すな。

何程上から爆弾を投げたとして、それが何恐ろしいか。一時も早く合圖を致して、

爆弾を投げさせよ。此方は神變不可思議の神力備はる、【いづの】みたまの五人

連れ。貴様の方は烏合の衆だ。うごうご致した密集部隊へ、爆弾投下は此方にも

つて来いだ。敵の武器をもつて敵を滅ぼすとはこの事だ。サア、貴様の用ふる合

圖は此方がやつてやらう。自縄自縛、自滅の端を開く大馬鹿者」

と云ひながら、蚊々虎は懐より火打を取り出し、火口に火を移し、枯葉を集めて

三箇所に火を焚き出せば、固虎は、

「ヤア、そりや大變だ。此方の合圖をどうして知つたか。味方の武器で味方が滅

る。耐らぬ耐らぬ、ヤイヤイ、皆の者ども、一時も早くあの火を消せよ」

一同は焚火に向つて消しにかからうとする奴を、松、竹、梅の三人は、三ヶ所の火の傍に突つ立ち上り、寄り来る奴を手玉に取つて、一々カリガネ灣に投げ込む。

忽ち轟然たる響聞えて、爆弾は密集部隊の頭上に破裂せしかば、泡を吹いて死傷算なく、命辛々逃げ行くもあり、その場に倒れて呻く聲、此處彼處に聞え来る。珍山彦は大音聲、

「ヤアヤア、固虎の部下の者共、改心したか。肝を潰し、腰を抜かし、鼻を挫かれ、口は引き裂かれ、眼球は飛び出し、耳はちぎれ、腕は折れ、足は「むし」られ、實に氣の毒千萬なるよ。今この場に於て改心致さばよし、否と云ふなら、ま一度合圖をしようか」

一同の中より、泣き聲を絞りながら、

「蚊々虎様、三人の姫様、私は改心致します。どうぞ助けて下さいませ」

「改心致した奴は、この場で罪を赦してやらう。改心致すほど世の中に結構はな

い。サア一同此方の後に隨いて宣傳歌を歌へ」

一 同 常世の國やロツキーの 山に隠るる曲津神

八岐大蛇に狙はれて 神の御國を亂さむと

鼻息高き鷹取別の 醜の魔神の腰抜かし

鼻「みしや」がれたその家來 肩で風切る固虎が

部下の者よ、よつく聞け 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 常世の國は沈むとも

曲津の砦は破るとも 三五教は世を救ふ

口は引き裂け鼻曲り 眼球は飛び出し耳ちぎれ

腕は折れて足はとれ 子供の玩具の人形箱

ぶち開けたやうな今の態 改心するのは此時ぞ

改心するのは此場合 月日は空に蚊々虎の

宣る言靈に耳澄ませ 口を清めて目を洗ひ

鼻を低くして天地の 神を稱ふる神言を

一度に宣れよ皆のもの のれよのれのれ皇神の

救ひの船に皆乗れよ
ロッキー山に現はれし

日の出神や伊奘册の
神と申すは世を亂す

大蛇や金狐の化身ぞや
早や目を醒ませ目を醒ませ

心にかかると村雲を
吾言靈に吹き拂ひ

清めて救ふ神の道
國てふ國は多けれど

神てふ神は多けれど
常世の國は常久に

暗ではおけぬ神の胸
ロッキー山の曲神の

醜の企みを此儘に
捨ててはおかぬ神心

この世を造りし神直日
心も廣き大直日

唯何事も人の世は
直日に見直し宣り直し

鬼や大蛇や曲神の
醜の猛びを皇神の

救の舟に乗り直し
心を直せよ諸人よ

この世を渡す麻柱の
神の造りし方船は

どこにも一つ穴はない
あな有難や尊やと

ひだりみぎ
左右りの手を合せ

いの
祈れよ祈れカリガネの

しまびと
この島人や固虎の

てした
部下のものよ逸早く

かみ
神の光に目を醒ませ

かみ
神の光に目を醒ませ

ひ
日は照る光る月は盈つ

ひ
日の出神が現はれて

とこよ
常夜の暗を照せども

ゆくへ
行方も知らぬ荒浪の

なか
中に漂ふ醜船の

かぢ
舵を取られて人心

こころ
心の海に日月の

ひかりた
光湛へて黄泉島

よもつ
黄泉比良坂の戦に

ちから
力を盡せ身を盡せ

かみ
神の守りは目のあたり

かみ
神の恵みは此通り

うた
と歌ひ舞ふ。

かたとら
固虎を始め部下の者共は思はず知らず、蚊々虎の言靈車に乗せられて、自分の

こと
事と知りながら、知らず知らずに歌ひ舞ひ踊り狂ふ。目も鼻も口も耳も手も足も、

かみ
神の恵みに救はれ、元の通りの完全な肉體に還元して、負傷の痕さへ止めざるこ

そ不可思議なる。

これより固虎は、珍山彦の歌に感じ、翻然として悟り、道案内となつてロッキー山に進み行く。固虎は後に固山津見の神名を戴き、神界のために大活動を爲すに至れり。

(大正一一・二・二二 舊一・二六 加藤明子録)

第一二章 山上瞰下(四四二)

固虎の案内にてシラ山山脈を春風に吹かれながら、漸うにしてその峠の巔に達したり。東には漂渺たる大海原、際限もなく展開し、西に聳ゆるロッキーの山は、中腹より山巔にかけて、或は濃く、或は淡き叢雲に包まれてゐる。

一行六人は峠の青草萌ゆる芝生の上に息を休め、四方の景色に眼を新しく洗ふ。珍山彦「ホー、淤滕山さま、貴方は矢張りロッキー山に伊邪那美尊、日の出神が

坐ましますと信しんじて居ゐますか」

淤おど滕やま山づみ津み見み 「無む論ろんの事ことです。之これがどうして信しんぜられずに居をれませうか。現げんに龍りゅう宮くうじ城やうから御お供ともして海かい上じやうで別わかれた時とき、之これからロツキー山ざんに行いつて身みを隠かくす、とお口くちづから御お言こと葉はを承うけたまはつたのですから」

「成なる程ほど、それも無む理りのないことだが、私わたくしの神かむ懸がりで言いつた事ことは、如どうしても信しんじませぬか」

「信しんじない事こともないですが、今いまの處ところでは五ご里り霧む中ちゆうに彷徨はうくわうするとでも言いふやうな心しん理り状じやう態たいです」

「神かみ様さまの御ご經けい綸りんは、その大だい體たいに於おいて一いつ定てい不ふ變へんであつても、其そ處こには又また裏うらもあおもてもあるものだ。奥おくの奥おくにも奥おくがあれば、底そこの底そこにも底そこがないほど深ふかい底そこのあるもの、「そこ」の處ところをよく審さ神しんせぬと大たい變へんな間ま違ちがひが起おこりますよ。それだから神かみの道みちの宣せん傳でん使しは、見み直なほし、聞きき直なほし、宣のり直なほせと神しん歌かに示しめされてあるのですよ」

「ハア、その眞しん偽ぎ、當たう否ひは時ときの問もん題だいです。吾われ々われは一いち日にちも早はやく萬ばん難なんを排はいして敵てきの嚴きびしき警けい戒かいを突とつ破ぱし、ロツキー山ざんに登のぼつてその消せう息そくを探さぐつて見みたいと思おもふのです」

「斯う申すと濟まぬが、貴方の心の裡は恰度、あのロッキー山の様ですよ。半分は雲に包まれ、半分は春の野山の生地を顯はして居ると同じ事だ。心の雲を晴らさねば、眞實の神の經綸は「ハツキリ」しない。この固虎に聞いたら一番よく分るであらう」

固虎「いえ、私も確な事は申上げられませぬが、常世神王の仰せによれば、伊邪那美の大神様、日の出神様は、ロッキー山に居られるとの事、常世城は申すに及ばず、一般の人民も左様だと思つて確く信じて居ります。吾々も、どちらかと言へば、信じて居る方の仲間ですよ」

珍山彦「淤滕山さまと云ひ、固虎さまと云ひ、實に曖昧模糊の考へですな。貴方の精神は不安ではありませんか。よくマア、そんな頼りない事で信念が續くかと、不思議に思はれてなりません」

淤滕山津見「何を言つても、愚昧な吾々人間の考へで、廣大無邊の神様の御神業が「ハツキリ」と分るべきものでない。寧ろ分らないのが當然だらうと思ひます。神様の御神業に對して審神をしたり、或は批評をするのは、人間の分際として僭

越だえつと考かんがへて居をります。只何事ただなにごとも刹那心せつなしんで、行く處ところまで行ゆかなくては分わからない」

「若もし伊邪那美神様いざなみのかみさま、日ひの出神様でのかみさまが贖物にせものであつたら、その時とき貴方あなたは如何致どういたしますか」

「その時とき始めて心こころの雲霧くもぎりが晴はれ、心こころの海うみに眞如しんによの日月じつげつが輝かがき渡わたるのです。只何事ただなにごとも惟神かむながらです」

「腹はらを立てる様やつな事ことはありますまいか」

「三五教あななひけうの宣傳歌せんでんかの通とほり、その時ときこそは直日なほひに見直みなほし聞き直なほし、宣のり直なほす覺悟かくごです」

「ホー、そのお考かんがへならば貴方あなたも宣傳使せんでんしの及第點きふだいてんが得えられますよ。大變たいへんに信仰しんかうの持もち方かたが變かはつて來きましたなア。信仰しんかうの力ちからは山やまをも動うごかすと云いふ事ことがあるが、貴方あなた

はあの山やまを自分じぶんの前まへに引寄ひきよせるだけの信仰力しんかうりよくをもつて居ゐますか」

「到底たうていそんな事ことは靈的れいてきの事ことで、現實げんじつ的には出來できますまい。貴方あなたは出來できますか」

「出來できますとも、靈界れいかいのみでない、現實げんじつ的に私わたくしの前まへに山やまを引寄ひきよせて見みせませう。貴方等あなたがたも私わたくしの後うしろに跟ついて御出おいでなさい。手てを翻ひるがへせば雨あめとなり、手てを覆くつがへせば雲くもと

なる、自由自在の世の中、萬々一吾言靈によつて動いて來なかつた時は、山の神さまに何か御都合があつてお忙しいのだらうから、こちらの方から歩いて往つて目の前に引寄せるまでの事ですよ」

「大抵ソナ事だと思つて居た。それなら吾々も海でも引寄せるワ」

「オー、固虎さま、貴方は今の今まで、悪神の眷屬となつて大變に吾々を苦しめようとされたが、ようマア俄に掌を返した様に變つたものですよなア」

固虎「手を翻せば雨となり、手を覆へせば雲となる」

珍山彦「オイオイ、眞似をしてはいかぬよ。悪なら悪、善なら善、何處迄もつき通したら如何だ。悪かつたと思つて、俄に精神を燕返しにすると云ふのは、日頃剛毅の固虎さまにも似合はぬではないか」

「これは心得ぬ宣傳使のお言葉、悪を謬つて善と信じた時は、何處までも猛進するのが男の本領だ。悪かつたと思つて氣がついた時は、忽ち見直し、聞き直し、宣り直すのが誠の男ではありませんまいか」

「變説改論の御本尊、宣り直しは結構だ。角の生えた牛雲別や嘴の鋭い鷹取別を

離れて、牛を馬に乗り換へ【のり】直すと云ふやうなものだなア」

於藤山津見「アツハツハ、面白面白」

珍山彦「固虎さま、またロッキー山へ行つたら、燕返しではないかなア。變説改

論の張本だから案じられたものだよ」

固虎「巖より堅い固虎の鐵の様な腹中を見て下さい。さう馬鹿にしたものぢやあ

りませぬよ。かたがた以て無禮千萬なことを仰有いますが、それに就ても合點の

ゆかぬは、常世城の昨冬の不思議、今此處に御座る三人の宣傳使様と同じ名のつ

いた宣傳使が、間の國から召捕られて常世城に入り、常世神王の大變なお氣に入

りであつた處、何時の間にやら煙の様になつて消えて了つたのです。そのとき私

は門番をやつて居ましたが、照彦と言ふ三五教の宣傳使も召捕られて、これまた

不思議や、煙となつて消えて了ひ、種々な不思議を現はし、常世神王や鷹取別等

を心の儘に散々の目に遇はし、私はその時の罰によつて、門番から常世城の上役

人に落されましたのか、上げられたのか、イヤハヤ、もう譯の分らぬ事ですよ。

之が所謂、迷宮と云ふのでせうか。門番も俄に天に上つて羽振りを利用し、大勢

の家來けらいを連つれてカリガネ半島はんたうに貴方あなた等を圍かこんで一つ手柄てがらをしようと思おもつたらあの有様ありさま、改心かいしんせずには居をれないぢやありませんか」

「怖こはさ、恐おそろしさ、生命いのちが惜をしさの改心かいしんは眞實ほんたうの改心かいしんぢやない、怪心くわいしんだ。固虎かたとら、宣のり直なほしなさい」

この時ときロツキー山ざんの方ほうに當あたつて鬨ときの聲こゑ一時いちじに聞きこえ來きたる。一行いっかう六人ろくにんは、

「ヨ一きき危機いっぱつ一髮ぱつだ。皆みなさま、之これから各自めいめいに覺悟かくご致いたしませう」

と思おもひ思おもひに山頂さんちやうに向むかつて袂たもとを別わかち、愈いよいよロツキー山ざんに對たいして自由行動じいうかうどうをとる事こととなれり。嗚呼ああこの結果けつくわは如何いかに。心許こころもとなくまた心強こころつよし。

(大正一一・二・二二 舊一・二六 北村隆光録)

第一三章 蟹かにの將軍しやうぐん (四四三)

固虎かたとらは淤滕山おどやま津見神づみのかみの案内者あんないしやとして、山道やまみちを攀よぢ、谷たにを渡わたり、間道かんだうを經へてロツ

キー山の山麓に着きしが、數多の魔軍は武装を整へ、今や出陣せむとする眞最中なり。淤滕山津見は偵察の爲に固虎を遣はして、ロッキー山の城塞に向はしめ、城門に入らむとする時、ピタリと蟹彦に出會せり。

蟹彦「オー固虎、數多の軍勢を引率れて、目」の國カリガネ半島へ宣傳使を捕縛すべく出陣したではないか。その後一向何の消息も聞かぬので、如何なつたことかと思つてゐたが、唯一人此處へ出て來たのは何か様子があらう。常世城へも歸らず、一體引率した軍隊は如何したのだい」

固虎「何うも斯うもあつたものか。戦ひは多く味方を損ぜざるを以て最上とする。何も知らぬ數多の戦士を傷つけるよりは、高の知れた宣傳使の三人や五人、計略を以て常世城へ誘き寄するに如かずと、取置きの智慧を出したのだ。マア見て居て呉れ、此方の働きを」

「門番の成上り奴が、あまり偉さうに法螺を吹くない」

「門番の成上りはお互ひだ。併し斯く騒々しく數多の戦士を集めて、日の出神は如何する積りだい」

「そんな間の抜けた事を云つて居るから困るのだ。貴様は未だ知らぬのか。餘程薄「のろ」だな。常世の國の、眼とも鼻とも喉首とも譬へ方ない大事の黄泉島に、天教山より伊奘諾神が現はれ給うて、この醜けき汚き黄泉國を被ひ清め、常世の國まで進み來らむと、智仁勇兼備の神將を數多引率して、黄泉比良坂に向つて攻めかけ來り給うたと云ふ事だ。さうなれば常世の國は片顎を取られたやうなもので、滅亡をするのは目のあたりだと云ふので、伊奘册大神様、日の出神の御大將が此處に數多の戰士を集め、是より常世城の軍隊と合し、黄泉比良坂に進軍せむとさるる間際なのだ。貴様も早く軍隊を引率れて黄泉比良坂の戦に参加せなくて、千載一遇の好機を逸するぞ。愚圖々々いたして悔を後世に胎すな。千騎一騎のこの場合、手柄をするなら今この時だ」

「神様の夫婦喧嘩といふものは、大袈裟なものだな。犬も喰はない夫婦喧嘩に大勢のものが、馬鹿らしくつて往けるものか。若も戦に行つて生命でも取られて見よ。數萬の戰士は、何奴も此奴も可愛い女房や子に別れねばならぬ。たつた一つ夫婦喧嘩に使はれて、大勢のものが後家にならねばならぬとは、合點の行かぬ

世の中だ」

「貴様は餘程よい薄馬鹿だ。ロッキー山や、常世城の祕密は、うすうす判つて居りさうなものぢやないか。知らないうてやらう。伊奘册命と名乗つてござるのは、その實は大國姫命だ。そして日の出神と名乗つて居るのは、その夫神の大國彦命だよ。固虎もそれが判らぬ様ではダメだよ」

「初めて聞いた。貴様の話は益々合點がゆかなくなつて來た。それなら常世神王は誰だい。蟹公知つてるだらう」

「常世神王は廣國別だよ。一旦死んだと云つて常世の國の一般のものを誑かし、自分が大國彦様と相談の結果、廣國別が常世神王になつて居るのだ。これには深い仔細がある。その祕密の鍵を握つた蟹彦は、常世神王の内々の頼みに依つて、今まで故意と門番になつてゐたのだよ」

「それなら貴様は、元は誰だい」

「馬鹿だな、未だ分らぬか。俺は【わざ】と身體を歪めて横に歩き、顔にいろいの汁を塗つて化けてゐたのだが、【もと】を糺せば聖地エルサレムの家來であ

つた竹島彦命だよ。是から吾々は先頭に立つて、黄泉比良坂に向ふのだ。併し軍機の秘密は洩らされない、他言は無用だ。併し乍ら、ロッキー山の伊奘册大神さまは全くの贗物だ。吾々も本物に使はれるのは、たとへ敵にもせよ氣分がよいが、生地をかくした鍍金ものだと思ふと、何だかモ―一つ力瘤が這入らぬやうな心持がするよ」

「貴様、今度は誰が大將で往くのだ」

「定つたことだ、これだよ」

と自分の鼻を押へて見せる。

「弱い大將だな。今度の戦ひは【馬一の毛】だ。何分大將が間拔けだから仕方が

ない」

「馬鹿を云ふな。大將は馬鹿がよいのだ。あまり智慧があつて、コセコセ致すと

大局を誤る虞があるので、この薄【のろ】の竹島彦が全軍統率の任に當つて居る

のだ。これでも三軍の將だぞ。あまり馬鹿にしては貰ふまいかい。併し固虎、五

人の宣傳使を何處に置いたのだ。松、竹、梅の三人の桃の實がなければこの戦ひ

は勝目がないと、伊奘册命様の……ドツコイ大國姫命の御命令だ。早く三人を貴様の手にあるなら御目にかけて、拔群の功名をなし、手柄者と謳はれるがよからう」

「よし、今見せてやらう」

「俺に見せる必要はないから、早く伊奘册の鷹の大神さまに御目にかけるのだよ。ヤア鳴雷、若雷、早く來れ」

と馬に跨り法螺貝を吹き立てながら、ブウブウと口角蟹のやうな泡を飛ばして進み行く。

固虎は蟹彦の偽らざる此の物語を聽いて胸を躍らせながら、淤滕山津見に一切を報告したるに、淤滕山津見は太息を吐き、

「ア、さうか。疑はれぬは神懸りだ。蚊々虎の神懸りを實の事を云へば、今まで疑つてゐたのは恥かしい。審神は容易に吾々の如き盲では出来るものではない。併し乍ら之を思へば、珍山彦の神變不思議の力には感嘆せざるを得ない。先づまづ暫らく身を潜めて、様子を窺ふことにしよう」

と、樹木茂れる森林の中に兩人は姿を隠し時を待ちみる。蟹彦の竹島彦が一隊を引率し、威風凜々として四邊を拂ひ出陣した後、又もや法螺貝の音、太鼓の響、八テ訝かしやと木の間を透して打眺め、固虎は頓狂な聲にて、
「ヤア、また第二隊が出て行き居るぞ。第二隊の大將は誰だか知らむ」
淤藤山津見「御苦勞だが、敵近く寄つて様子を查べ報告して呉れないか」

「畏まりました」

といふより早く固虎は、猿が梢を傳ふが如く、しのびしのび敵前近く進み行く。
美山別は陣頭に立ち采配を打揮ひながら、

「進め進め」

と號令してゐる。左右の副將は土雷、伏雷の猛將である。花を欺く松、竹、梅の三人に扮したる國玉姫、田絲姫、杵築姫は馬上に跨りながら、桃の實隊として美しき衣裳を太陽に照されながら、ピカリピカリと進んで来る。數多の軍勢は足音を揃へて、種々の武器を携へ繰出す仰々しさ。固虎は直様引返し、淤藤山津見に詳細の顛末を報告したり。

「ヤア、御苦勞ご苦勞、ロッキー山の軍人はあれでしまひか」

「ナニ、ほんの一部分です。必要に應じて未だ未だ出すかも知れませぬ」

「ウン、油断のならぬ醜神の仕組、吾々も一つ考へねばならぬワイ」

このとき木靈に響く宣傳歌の聲、二人は思はず其の聲に聞耳澄ました。忽ち東

南の風吹き荒んで音騒がしく、宣傳歌は風の音に包まれにける。

(大正一一・二・二二 舊一・二六 外山豊二録)

第一四章 松風の音(四四四)

風のまにまに近より来る宣傳歌の聲に、前方を眺むれば、山上にて袂を別ちたる珍山彦、松、竹、梅の三人、悠々として此方に進み来る。

於藤山津見「ホー、妙な所で邂逅しました。大變でございますよ」

珍山彦「大變とは何ですか」

「今少し前に、法螺の聲、鼓の音が聞えたでせう」

「ア、あれですか、あれは敵が黄泉比良坂に進軍するのですよ。面白い事が始まつて来た。吾々共が斯うして宣傳に歩いたのも、黄泉比良坂の戦ひに出陣せむが爲の用意であつた。ヤア、面白うなつて来たワイ」

「珍山さま、面白どころぢやありませんか。一時も早く、松、竹、梅は桃の實の御用に立たねばならぬ。敵に黄泉比良坂を占領せられぬ先きにと今まで思つてゐたが、餘り俄の敵軍の出陣で時期を逸して了つた。あゝ如何したら宜しからう」

「何うも斯うもあるものか。松、竹、梅の三人の宣傳使は去年の中に黄泉島に渡つて居られますよ」

「そんな馬鹿な事がありますか。ここに現に三人、松、竹、梅の宣傳使がゐられるではないか」

「この山を御覽なさい。松は世界に一本より生えないといふ規定はない筈だ。竹も梅もその通りだ。この三人は實は化物だよ」

言葉の終ると共に、三人の娘の姿は煙となりて消え失せにける。

「イヨー、珍山さま、あなたは餘程變つてゐますね」

「變つてゐるでせうが、今氣がつかしましたか。随分ウスノ口な眼力ですな」

「あなたのお口の悪いこと、それでも宣り直し宣り直しと仰有るのだから、妙なものだ。まるで狐に魅まれた様だワイ」

この時、又もや人馬の物音凄じく聞え來る。見れば鼻の「めしやげ」た鷹取別、照山彦の兩人は、戎衣の袖に日光をキラキラ浴びながら駿馬に跨り、采配揮つて進め進めと下知してゐる。

今度は餘程の大部隊で、部將には、大雷、黒雷、火雷、拆雷が各自部隊を引率し、白地に葵の紋所の旗を春風に靡かせながら、旗鼓堂々として進み行く勇ましく光景なり。

淤滕山津見「あれだけの軍勢を繰り出して了つたら、後の陣營は空虚でせうか」
珍山彦「形に於ては空虚だ。そのかはりに幾百千萬とも限りなき醜女探女の魔神が城の内外に充滿してゐる。最後になつて彼の魔軍は比良坂に攻め寄せるのだ」といふより早く、珍山彦の姿は又もや煙となつて消え失せにける。

淤^{おど}山^{やま}津^づ見^み「ア、何^{なん}だ、怪^{けつ}體^{たい}な事^{こと}だワイ。オイオイ固^{かた}虎^{とら}さま、お前^{まへ}も煙^{けむり}となつて消^きえるのではないかな」

固^{かた}虎^{とら}「餘^{あま}り偉^{えら}い神^{かみ}さまばかりで、恥^{はづ}かしくて私^{わたし}は消^きえたいやうに思^{おも}つてゐるが、どうしても消^きえられないのですよ」

「あゝ仕^{しか}方^{かた}がない。これから口^{くち}ツキー山^{ざん}の城^{じやうない}内に化^ばけ込^こんで様^{やう}子^すを探^{さぐ}らうか。今^{いま}から黄^{よもつ}泉^{ひらさか}比^ひ良^ら坂^{さか}へ行^ゆくのも後^{あと}の祭^{まつ}りだ。オー固^{かた}虎^{とら}殿^{どの}、そなたは今^{いま}まで常^{とこ}世^{よじ}城^{やう}の家^{けら}來^いであつたのを幸^{さい}ひに、私^{わたし}を連^つれて城^{じやうない}内に導^{みちび}いてくれまいか」

「それはお安^{やす}いことながら、淤^{おど}山^{やま}津^づ見^みの名^なを知らぬものは滅^{めつ}多^たにない。また大^{おほく}國^{くに}姫^{ひめ}命^{のみこと}は元^{もと}の貴^{あな}方^たの素^す性^{じやう}もお顔^{かほ}も知^しつてゐる。輕^{かる}々^{がる}しく進^{すす}み入^いるは劍^{けん}呑^{のん}ですよ」

「さうかな。併^{しか}し、あまりグツグツいたして居^をつて、黄^{よもつ}泉^{ひらさか}の神^{しん}業^{げふ}に遅^{おく}れて了^{しま}つた。それだから大^{おほ}神^{かみ}様^{さま}の本^{ほん}陣^{ぢん}と連^{れん}絡^{らく}を取^とつておかねばならぬのだ。自^じ由^い行^{かう}動^{どう}を執^とつたばかりで、吾^{わが}計^{けい}畫^{かく}は六^む日^{じつ}の菖^{あやめ}蒲^め、十^と日^{じつ}の菊^{きく}となつて了^{しま}つたのか。エ、殘^{ざん}念^{ねん}な、口^{くち}惜^{をし}しい。どうしてこの失^{しつ}敗^{ぱい}を挽^{ばん}回^{くわい}しようか」

と悔^{くや}し涙^{なみだ}に咽^{むせ}びながら、兩^{りやう}手^てを拍^うつて神^{かみ}言^{こと}を奏^{そう}上^{じやう}し、力^{ちから}なげに宣^{せん}傳^{でん}歌^かをうたひ始^{はじ}

むる時しも、忽然として現はれ出でたる宣傳使あり。淤滕山津見は、

「オー、貴方は照彦、戸山津見様、エ、お互に残念な事をいたしましたなア。千載一遇の比良坂の戦に参加し遅れたのは口惜しい。最早ロッキー山の魔神らは大擧、黄泉島へ出陣して了つた。どうしたら宜からうか」

照彦「イヤ、別に心配はいりませぬ。神界の御經綸によつて、貴方を此處に止め置く必要があるのですよ。幸ひ、固虎さまを案内者として、ロッキー山深く進み入り、伊奘册の贗神の様子を探る必要がある。遅れたのは所謂水も洩らさぬ神の仕組だ。戦に出陣するのみが神業ではない。サア、これから御兩人はロッキー城にお進み下さい。吾々は常世城に忍び入り、一切の計畫を調査いたします。左様なら」

と言ふかと思れば姿は消えて白煙、松吹く風の音のみぞ聞ゆる。

あゝ、この三人は如何なる神業に参加するであらうか。

(大正一一・二・二二 舊一・二六 櫻井重雄録)

第一五章 言靈別〔四四五〕

國祖國治立命出現されし太初の世界は、風清く澄み、水清く、空青く、日月曇なく、星を満天に麗しく輝き、山青く、神人は何れも和樂と歡喜に滿され、山野には諸々の木の實、蔓の實豐熟し、人草は之を自由自在に取りて食ひ、富めるもなく貧しきもなく、老もなく病もなく死を知らず、五風十雨の順序正しく、恰も黄金時代、天國樂園の天地なりき。然るに天足彦、胞場姫の體主靈從的邪念は、凝つて惡蛇となり、また惡鬼惡狐となり、その靈魂地上に横行闊歩して茲に妖邪の氣滿ち、貧富の懸隔を生じ、強者は弱者を虐げ、生存競争激烈となり、地上は遂に修羅の巷と化したるのみならず、神人多くその邪氣に感染して利己主義を専らとし、遂には至仁至愛の大神の神政を壞滅せむとするに至りける。地上神人の邪氣は、遂に世界の天變地妖を現出し、大洪水を起し、一旦地の世界は泥海と化し、數箇の高山の巔を殘すのみ、慘状目も當てられぬ光景とはなりぬ。

この時、高皇產靈神、神皇產靈神、大國治立神は顯國玉の神力を活用し、天の

浮橋を現はし給ひて地上の神人を戒め、且つ一柱も残さず神の綱に救ひ給ひ、諾冊二神を地の高天原なる天教山に降して、海月なす漂へる國を、天の沼矛を以て修理固成せしめ給ひ、國生み島生み神を生み、再び黄金世界を地上に樹立せむとし給ひぬ。然るに又もや幾多の年月を経て地の世界は惡鬼、惡蛇、惡狐その他の妖魅の跳梁跋扈する暗黒世界と化し、優勝劣敗、弱肉強食の社會を出現し、大山杙、野椎、萱野姫、天の狹土、國の狹土、天の狹霧、國の狹霧、天の闇戸、國の闇戸、大戸惑子、大戸惑女、鳥の石楠船（一名天の鳥船）、大宜都姫、火の燒速男（一名火の迦々彦、火の迦具土）、金山彦、金山姫等の諸神の荒び給ふ世を現出したりける。

一旦天地の大變動により新に建てられたる地上の世界は、又もや邪神の荒ぶる世となり、諸善神は天に歸り、或は地中に潛み、幽界に入りたまひて、陰の守護を遊ばさるる事となりしため、再び常世彦、常世姫の系統は、ウラル彦、ウラル姫と出現し、ウラル山を中心として割據し、自ら盤古神王と僞稱し、大國彦、大國姫の一派は邪神のためにその精魂を誑惑され、ロツキー山に立て籠り、自ら常

世神王と稱し、遂には伊奘册命、日の出神と僭稱し、天下の神政を私せむとする野望を懐くに至れり。

茲に伊奘册命は、この慘状を見るに忍びず、自ら邪神の根源地たる黄泉の國に出でまして邪神を歸順せしめ、萬一歸順せしむるを得ざるまでも、地上の世界に荒び疎び來らざるやう、牽制運動のために、黄泉國に出でまし、次で海中の龍宮城に現はれ、種々の神策を施し給ひしが、一切の幽政を國治立命、稚櫻姫命に委任し、海中の龍宮を乙米姫命に委任し、自らロッキー山に至らむと言擧し給ひて、竊に天教山に歸らせ給ひ、又もや地教山に身を忍びて、修理固成の神業に就かせ給ひつつありたるなり。

天地の神人は、此周到なる御經綸を知らず、伊奘册命は黄泉の國に下り給ひしものと固く信じ居たるに、伊奘册命のロッキー山に現はれ給ふとの神勅を聞かや、得たり賢しとして元の大自在天にして後の常世神王となりし大國彦は、大國姫その他の部下と謀り、黄泉島を占領して、地上の權利を掌握せむとしたれば、大神は遂に前代未聞の黄泉比良坂の神戰鬼鬪を開始さるるに致りたるなり。

この戦は、善悪正邪の諸神人の勝敗の分るる所にして、所謂世界の大峠是なり。

この物語に就て附言して置きたい事は、諾冊二神が海月成す漂へる國を修理固成して、國生み、島生み、神生み、萬の物に生命を與へ給ひし世界以前に於ける常世城と、以後の常世城の位置は非常に變つて居る。また鬼城山その他の神策地も多少の異動があり、國の形、島の形、河川湖水山容等にも餘程の變化がある事を考へねばならぬ。一々詳説すれば際限がないから、この物語には煩を避けて省いた所が澤山ある。また第一卷、第二卷に現はれた天の浮橋以前の神が、第二の世界に現はれて、その時よりは若くなつたり、或は一旦歸幽した神人が神界に前の姿を現はして活動してをるのは、常識の上から判断すれば常に矛盾のやうである。また混亂無秩序、支離滅裂の物語と聞えるのは寧ろ當然である。しかし、この物語は總ての神人の靈を主とし、その肉體を閑却したる、いはゆる靈界物語であつて、靈主體從主義であるから、この神人は何時の世に歸幽し、また幾年後に肉體をもつて現はれ、何々の活動をなし、或は善を行ひしとか、惡を行ひしとか、

何神の體に宿つて生れたりとか云ふやうな詳細の點は、際限がないから大部分省いてある。

總て地上の神人は、靈より肉へ、肉より靈へと、明暗生死、現幽を往來して神業に従事するものであるから、太古の神人が中古に現はれ、また現代に現はれ、未來に現はれ、若がへり若がへりして、永遠に靈即ち本守護神、即ち吾本體の生命を無限に持續するものなるが故に、その考へを頭腦に置いて此物語を讀まねば、幾多の疑惑や矛盾が湧いて來るのは當然である。

數千里の山野河海を一ヶ月或は二ヶ月に跋涉したり、又は一日の間に跋涉する事がある。千變萬化、明滅不測の物語も、總て靈界の時間空間を超越したる現幽一貫の靈的活動を物質化、具體化して述べたものである事も承知して貰ひたい。また北極に夏の太陽が出たり、赤道直下に降雪を見たり、種々の奇怪な物語がある。口述者に於いても、今日の知識より考へて不可解である。されど永遠無窮に熱帯は熱帯、寒帯は寒帯の儘、何時までも一定不變たる事を得ない。此宇宙は死物ではない限り、氣候に於て位置に於て變動するも、幾十億萬年の間の事である。

から、強ち否定する譯にも行くまいと思ふ。故に讀者の本書を肯定するも、否定するも、口述者に於ては何の感じもしないのである。至大無外、至小無内、若無所在、若無不所在、無明暗、無大小、無廣狹、無遠近、過去と現在、未來とを問はず時間空間を超越し、人界を脱出し、大宇宙の中心に立つて、神靈界の物語を口述したものである。されど口述者は、決して自己の臆測や推考力によつたものでない。幽齋修業の際、見聞したる其儘の物語であつて、要するに七日七夜の靈夢を竝べたものである。併しながら私としては些しも疑うて居るのではない。また不確實の物語とも思つて居ない事を告白して置きます。

(大正一一・二・二三 舊一・二七 加藤明子録)

第一六章 固門開〔四四六〕

常世の國を東西に、分ちて立てるロツキーの、山の尾の上に濃き淡き、雲を透

してひらひらと、白地に葵の百旗千旗、翩翩としてひるがへり、峰の嵐も淤藤山津見の宣傳使は、シラ山峠の頂上に、全く歸順を表したる、心も固き固虎に、固山彦と名を與へ、ロツキー城を蹂躪し、醜女探女の計略を、根底より覆へさむと、猫を冠りて進み行く。

ここはロツキー城の表門である。美山別、竹島彦等の勇將は、獅虎の如き猛卒を率ゐて黄泉島の戦鬪に出陣したる事とて、城内の守兵は甚だ手薄になつてゐる。それが爲め警戒は益々嚴にして、晝と雖も表門を容易に開かず、鎌彦、笠彦の兩人をして、數人の門番と共に嚴守せしめてゐた。固山彦は大音聲を張り上げて、
「ヤア門番、この門を開け。常世神王の命に依り、目の國カリガネ半島に於て生擒にしたる淤藤山津見を始め、四人の宣傳使を召伴れ歸り來れり」
と呼ばれば、主人の威光を眞向に被つて笠彦は居丈高になり、
「オー、さういふ聲は常世城の上役固虎彦に非ずや。貴下は常世城の勇將として目の國に出陣されしもの、何故に常世城に還らず本城に來りしか。その委細をつぶさに物語られよ。様子如何に依つてはこの門絶対に開く可らず」

と唳鳴り付けたり。固山彦は大聲にて、

「卑しき門番の分際として、常世神王の從神固虎彦に向つて無禮の雑言、四の五の言はず速かにこの門を開け。否むに於ては危急存亡の場合だ、一刻の猶豫もならず。固虎彦の鐵より固きこの腕を以て叩き破つて這入つて見せうぞ」

笠彦「オイ鎌彦、何うしよう。偉い勢ぢやないか。こんな場合は門番の吾々には判断がつかぬ。伊奘册大神に、どんな御叱りを受けるかも解らぬなり、鎌彦、貴様は奥へ行つて開門の許しを受けて來て呉れないか」

鎌彦「何、構ふものか。開けてやれ」

「若しも固虎彦が寢返りを打つて、敵の間者にでもなつてゐたら大變だからな」
「何、構ふことがあるものか。開けるに限る」

と云ふより早く、自ら門の門を外し、左右にサラリと戸を開けば、固山彦は、
「サア、淤藤山さま、漸く門が開きました。ヤア笠彦、大儀であつた。貴様は何時も主人を笠に被て威張る奴だが、矢張り癖は治らぬと見えるの」

笠彦「ハイハイ、貴方のやうな結構な、立派な、勇將の御越し、御通し申したい

は胸一ぱいでございますが、何を云つてもこの鎌彦奴が頑張るものですから、
【ついで】手間を取りまして申譯がありませぬ。吾々の如き微々たる門番、三軍を
指揮し給ふ貴方様に向つて、一言半句にても抵抗致すは、恰も螻蛄が斧を揮つて
龍車に向ふやうなもの、到底駄目だから早く御開け申せと言ふに、鎌彦の奴、螻蛄
のやうな勇氣を出しよつて、容易に開けないのです。本當に譯の解らぬ奴です
から」

鎌彦「何を云ひよるのだ、腰抜け野郎奴、貴様が拒んだのぢやないか、俺はちつ
とも構はぬ、御開け申せと言つて居るのに、日の出神の御叱りが怖いとか、大神
様の御目玉が光るとか云ひよつて、邪魔をし居つた癖に、何だい今の【ざま】は。
少し強い者には直に犬のやうに尾を掉り居つて、見えた嘘を云ひ、自分の不調法
を同役の俺に塗りつけやうとは不届き千萬な奴。以後の【みせしめ】、この鎌公
の鐵拳を喰へ」

といふより早く、笠彦の横面を【はり】飛ばせば、笠彦は大肌脱となつて、
「ヤイ鎌、馬鹿にしよるない。貴様こそ強いと見たら尾を下げて、心にもない追

従をべらべらと喋くりよつて、よし覺えて居れ。この笠彦が貴様の笠の臺を引抜いてやるから」

と首筋目掛けて飛びついた。二人は組んづ組まれつ、上へなり下になり争うてゐる。固虎の固山彦は、両手に拳を固め、肩肘怒らしながら大股に「のそり」のそりと中門目がけて進み入る。淤滕山津見は二人の格闘を見返り見返り、中門を開いて二人とも奥に進み入る。

「オイオイ、笠公、鎌公、何うしよう。開けようか、開けよまいか。喧嘩してゐるやうな場合ぢやない。あんな強い奴が二人まで奥へ通つて了つた。吾々は何うなる事かと思つて大變心配して居るのだ。それに又もや偉い勢で門が破れる程叩いて居るぞ。喧嘩どころの騒ぎぢやない。早く止めぬかい」

笠彦「門も糞もあつたものかい。何うなと勝手にせい。俺は鎌彦の首を引き抜かねば置かぬのだ」

鎌彦「オイ笠、喧嘩は中止して明日まで延ばしたら何うだ。兄弟牆に鬨ぐとも外

その侮りを防ぐといふことがあるぞ。平穩無事の時には何程仇のやうに喧譁をしてみた兄弟でも、サア強敵が出て来たと言ふ時には、犬と猿とのやうな兄弟が腹を合して敵に當るものだ。貴様も謂はば兄弟だ。貴様は俺の弟だ。兄の云ふことを聞いて首を放せ」

「何を云ひよるのだ、弟もあつたものかい。貴様は俺の奴になつて尻拭をすると云へ。そしたら首を放してやらう。首も廻らぬやうな九死一生の場合に當つて、まだ減らず口を叩くか」

門を叩く音は益々激しくなり來り、四五の門番はガタガタ慄へながら、「オイオイ、笠彦、早く放さぬか。放さぬ放さぬで、俺等一同が寄つて掛つて貴様を打ちのめすが、それでも放さぬか」

笠彦「放せと云つたつて、鎌彦を始め譯の解らぬ奴ばかりで、話せるやうな氣の利いた奴が一足でも居るかい。【はな】しとうても【はな】されぬワイ。もつと身魂を研げ、研けたら大は宇宙の眞理より、小は蚤の腸まで知つて居るこの方、

【はな】して聞かしてやらう」

鎌彦「オイ執拗いぞ、いい加減に洒落て置け。そんな時ぢやなからう。大奥は今大騒動が始まつてゐる。さうして門には獅子とも虎とも狼ともわからぬやうな強い奴が、大勢の武士の出陣した後を狙つて攻めて来て居るのだ。前門には虎、後門には狼を受けて居る危急存亡のこの場合、喧嘩どころの騒ぎぢやなからう」

「ナンでもよいワイ。俺の奴さまになるか」

門は強力無雙の男に押破られ、門は「めき」めきめきと音して裂けた。四五の門番はこの物音に腰を抜かし、大地に坐つたまま慄へてゐる。門ひき開けて入り来る一人の男、花を欺く三人の娘と共に悠々としてこの場に現はれ、この體を見て、

「オイ、その方は何を致して居るか。其處は地の上だ」

一同「ハイ、畏まつて御迎へを致して居ります」

「それには及ばぬ。早く立つて案内いたせ」

「ハイ、何分笠公と鎌公の門番頭が組付き合ひを始めて離れないものですから困つてをります。立つても居ても居られないので、止むを得ず腰を据ゑ、胴を据ゑ

て泰然自若と構へて居るのです」

「貴様らは慄うてゐるぢやないか。早く立つて案内いたせ」

「たつ」て立てと仰有るなら立たぬことはありませぬ。何卒笠公と鎌公に掛合うて下さい」

「妙な奴だな。オイ、笠とか鎌とかいふ門番、何を争うてゐるか」

笠彦「ヤア、誰かと思へば去年の冬、常世城に唐丸駕籠に乗せられて來よつた照彦の奴ぢやないか。オイ、鎌公、大變な奴がやつて來たぞ。もう喧嘩は中止だ。また改めて明日にしようかい。貴様も生命冥加のある奴だ。この照彦の奴を生擒にして常世城に送つてやらうか」

と云つて首を放す。

照彦は三人の美人を隨へ、悠々として委細構はず中門目がけて進み行く。鎌と笠は此體を見て、

「オイ、皆の奴、中門指して行き居るぞ。襟髪とつて引戻せ」

一同「引戻したいは山々だが腰が立たぬ。笠公、鎌公、喧嘩をするだけの元氣が

あるなら、二人一緒になつて彼奴の足をさらへて、ひつくり返し縛り上げて常世城へ送りなさい」

笠彦「オイ、鎌公、貴様は首のないとこだつた。死んだと思つて、一か八か早く

追ひかけて飛びついてでも捉まへないか」

鎌公「何だか氣分が悪い、醫者にでも診察して貰つて、醫者が行つてもよいと吐したら飛びつきに行かうかい」

「ソナナことを云つてる場合かい、呆けやがるな。俺が【けしかけ】てやるから行け行け。犬でも【けしかけ】が上手だと、自分の身體の五倍も十倍もある猪に

向つて飛びつくものだ。【けしかけ】も上手でないと犬は弱いものだ」

「馬鹿にするない、人を犬にたとへやがつて」

「貴様、何時でも口癖のやうに、日の出神様の爲には粉骨碎身だとか、犬馬の勞を吝まぬとか吐いたぢやないか。犬馬の勞を盡すのは今この時だ。口ばかり矢

釜敷く轉りよつて、肝腎要の場合に尾を股に【はさ】んで、【すつこん】である野良犬奴が、早く行け。オツシオツシ」

中門なかもんの内に男女だんぢよの涼すずしき宣傳歌せんでんか聞きえ來きたるを、門番もんばん一同いちどうは顔かほをしかめ、耳みみに手てを
當あてて地ちに「かぶり」つき縮ちぢみ居ゐる。

大奥おほおくの模様もやうは如何いかに、心許こころもとなし。

(大正一一・二・二三 舊一・二七 外山豊二録)

第一七章 亂みだれ髪がみ (四四七)

固山彦かたやまひこは何なんの憚はげる氣色けしきもなく、淤おど滕山津見やまづみを伴ともひて奥殿おくでん深く入いる。この時とき、逆さか
國別くにわけは玄關げんくわんに現あらはれ、

「ホー、固虎彦かたとらひこ殿、貴下きかは常世神王とこよしんわうの命めいによつて、軍隊ぐんたいを召めつれ、目めの國くにに
出陣しゅつぢんされしと聞きいてゐた。黄泉島よもつじまに味方みかたは殆ど出陣しゅつぢんして、今いまはロッキ―城じやうとこよじやう常世城とこよじやう、
共ともに守まもり甚はなはだ手薄てうすとなつてゐる。然しかるに貴下きかは常世城とこよじやうに歸かへらず、ここに出張しゅつぢやうされ
しは何なにかの仔細しさいあらむ。つぶさに物語ものがたられたし」

固山彦「お前は逆國別、これには深い仔細がある。兔も角、常世城の固虎彦、三五教の宣傳使、
五教の宣傳使、
逆國別は、

「暫く待つて下さい。日の出神に申上げ、お指圖をうけます」

と踵をかへして奥に入った。二人は案内もなく玄關に靴と草鞋を脱ぎ捨て、一間に
入つて息を休めたるに、日の出神は四五の従者を引連れ、儼然としてこの場
に現はれ來り、

「ホー、固虎彦、何用あつて來られしぞ」

「これには深い様子も御座れば、暫く餘人を遠ざけ給へ」
「皆の者、この場を遠ざかり、居間に歸つて休息いたせ」

「ハイ」

と答へて一同は、この場を立ち去る。

日の出神「イヤ、汝は三五教の宣傳使に非ずや」

於滕山津見「然り、吾は昔、貴下に仕へたる醜國別、今は三五教に偽つて宣傳使

となり、敵の様子を窺ひみる者、如何に機略縦横の貴下自在天大國彦と雖も、遠く慮る所なかる可からず。吾は舊恩に報ゆるためワザと三五教に入り、一切萬事の様子を探知し歸りたる者、必ず疑ひ給ふことなく、胸襟をひらいて語らせ給へ。貴下は日の出神と名乗らせ給へども、その實は神力無雙の自在天大國彦命に坐しますこと、一點の疑ひの餘地なし。また伊奘册大神と稱へ給ふは、貴下の御妃大國姫なる事判然せり。斯くなる上は、包みかくさず、一切の計畫を詳細に物語られたし」

「汝が推量に違はず、吾は自在天なり。吾神謀鬼策には汝も驚きしならむ」
「吾々は斯くの如く三五教の宣傳使と化け込み、艱難辛苦を致す位のもの、貴下の計畫は略ぼ承知の上の事なり。今この固虎彦は常世神王廣國別の命を奉じ、吾を召捕らむために「目」の國に數多の軍勢を引連れ進み來りしも、漸く吾胸中を悟りヤツト安堵し、一切を打明けて吾を本城に導きたる英雄豪傑、感じ入つたる固虎が働き。随分お賞めの言葉を賜りたし」

「イヤ兩人の眞心には感じ入つた。併しながら、汝が伴ひし松、竹、梅の宣傳使、

及び蚊々虎は如何されしや」

この言葉に兩人はグツとつまり、

「彼ら四人は慮る處あり、或る所に秘め置きたり。後して御目にかけて申さむ」

「一時も早く會ひたきものだ。その所在を今ここに於て吾に報告されよ。吾は適

當なる者を遣はして、之を本城に迎へ還らしめむ。四人の宣傳使の所在知れざる

間は、汝等を疑ふの餘地充分なり。早く所在を知らせよ」

固山彦「ここ四五日の猶豫を願ひます」

「汝が言ふ如く、眞に吾々の爲めに、今まで暗々裡に活動せしこと眞なりとせば、

その所在の知れざる筈なし。返答し得ざるは汝ら歸順せしと偽り、心を合せ、手

薄のロッキ―城を顛覆せしめむとの惡計ならむ。返答次第によつては容赦し難し。

サア早く告げよ」

と稍聲をはげまし厳しく問ひ詰められ、二人は蚊々虎および三人の娘に、山中に

於て煙と消えられ、その所在を知らず、その返答に苦しみ、顔色を變じ、心中に

「サア失敗つたり」と思ひ煩ふ折からに、中門を開いて進み來る照彦は、俄に蚊々

虎の姿と變じ、月、雪、花の三人を伴ひて入り來り、

「吾は自在天大國彦、今は日の出神の舊の家來蚊々虎にて候。月、雪、花と偽つて、三五教を宣傳し、天下を惑す松、竹、梅の女宣傳使を召連れ、この場に引連れ参りたり。一時も早く、日の出神、實檢せられよ」

と呼ばはり居る。

日の出神を始め固山彦、淤滕山津見は、寢耳に水の面持にて互に顔を見合はせ、默然として控へゐる。照彦は三人の娘を伴ひ、この場にドシドシと現はれ來り、

「ヤア、これはこれは大國彦様、吾こそは舊臣の蚊々虎でございます。漸く三人の宣傳使を尋ね求めて、これに参りました。ここに現れたる固山彦、淤滕山津見の二人も、この事はよく御存じの筈です。仔細に御調を願ひ奉る」
といふより早く、三人の娘の被面布を取り除けば、一同は思はず、

「ヤア」

と聲をあげたまま、默然と三人の顔を看守つてゐる。暫くあつて、日の出神は三人の娘の顔を熟視した上、

合點の行かぬ三人の宣傳使、汝は松代姫、竹野姫、梅ヶ香姫に相違なきや。去年の冬、常世神王より松、竹、梅の三人なりと申し立て、本城に送り來れる三五の松、竹、梅の宣傳使に比ぶれば、容貌骨格その他において非常に相違の點あり。汝は果して松、竹、梅に相違なきや」

妾等は珍の國の城主正鹿山津見神の娘、松、竹、梅の三人に相違これなく候。妾等三人は、未だ嘗て常世城に捕はれし事もなければ、従つて本城に來りし事もなし。何かの相違ひにはおはさずや」

日の出神は雙手を組み、首を傾け思案に沈む。

固山彦「モシ、日の出神様、昨年常世神王より送り來りし松、竹、梅の三人は、御承知の如く何時とはなしにこの警護嚴しき中を煙の如く消え去りしは、要するに常世神王廣國別が妖術にて、彼は表面貴下に隨從する如く見せかけ、密かに天教山に款を通じ、貴下等の計畫を根底より覆へさむとするの惡辣なる計略を企みてる者。拙者はその計略の奥の手を存じをれば、廣國別に迫つて、その不都合を詰責せし處、廣國別は終に兜を脱ぎ、賤しき門番の固虎をして口ふさぎのため重

職よくを授さづけたるは、全まくその奸計かんけいの他たに洩もれざらむがための彼かれの術策じゆつさく。昨冬松さくとうまつ、竹たけ、梅うめと稱しょうしたるは、廣國別ひろくにわけが魔術まじゆつによつて現あらはれたる惡狐あくこの所爲しよゐなれば、必かならず御油ごゆだ斷んあつてはなりませぬ』

と言葉巧ことばたくみに述のべ立てたり。

大自在天だいじざいてん大國彦おほくにひこの日の出神でのかみはこれを聞きくとともに、怒髮天どはつてんを衝つき、

『ヤアヤア逆國別さかくにわけ、一時いちじも早はやく家來けらいを差さし向むけ、常世神王とこよしんわうを召捕めしとりかへれ』

と大音聲だいおんじやうに呼よばれば、

『ハイ』

と答こたへて逆國別さかくにわけはその場ばに現あらはれ、日の出神でのかみの命めいの【まに】まに數百人すうひやくにんの部下ぶかを引率ひきつれ、常世城とこよじやうに向むかひ、馬うまに跨またがり、あわただしく出張しゆつちやうする。

淤滕山津見おどやまつみ『日の出神でのかみに申上まをしあげます。實じつに油斷ゆだんのならぬは人心ひとこころ、一切いっさいの祕密ひみつを打うち明け、御信任ごしんにん淺あさからざる常世神王とこよしんわうの廣國別ひろくにわけは、かかる腹黒はらぐろき者ものとは思おもはれなかつたでせう。吾々われわれも初はじめて固虎彦かたとらひこの言葉ことばを聞ききました。驚おどろきました。人ひとは見みかけによらぬものとは、よく言いつたものですワ』

「さうだ、人は見かけによらぬものだ。醜國別が淤滕山津見となつて三五教のウラを「かき」、廣國別が常世神王となつて此方のウラを「かき」、天教山に款を通ずるのも同じ道理だ。敵の中にも味方あり、味方の中にも敵ありとはこの事だのう」

「私を信じて下さいますか」

固山彦「吾々が日の出神であつたら、容易に信じないなア。ハ、、、、」

淤滕山津見「固虎さま、あまり口が過ぎますよ。あなた、そんな顔して居つて、心の底は天教山の三五教に款を通じてあるのでせう。アハ、、、、」

日出神「何だか譯が分らぬやうになつて來た。狐につままれたやうだワイ」

(大正一一・二・二三 舊一・二七 櫻井重雄録)

第一八章 常世馬場 (四四八)

春日に照れる常世城、霞棚引く天守閣、ロッキー山とロッキー城、常世の城の三つ葵、日の出神の自在天、大國彦の疑ひ受けしとは露白旗の、ばたばた風に翻へる、様子も知らぬ門番は廣き馬場の芝生の上に、身を横たへて雑談に耽り居る。高彦は、

「オイ倉彦、去年の冬だつたかねえ、松、竹、梅の天女のやうな宣傳使がやつて来て、常世神王さまが、【ほく】ほくもので、終には逆上つて門番の縮尻つた奴を重役にしたり、一生懸命に働いた立派なお役人を門番に昇級したり、照彦といふ化物が出て来て荒れ廻す、月、雪、花と云ふ途方途轍もない別嬪がやつて来て、この廣い常世の城は、日々百花爛漫たる彌生の陽氣に満ちて、絲竹管絃の響きに、吾々も耳の穴の掃除をしたものだが、【コロリ】轉變の世の中、城の中だと思つて居たら、神王さまを始め、吾々迄が、この馬場だつたね、夜露に曝されて馬鹿を見たことがある。狐の聲が、彼方にも此方にもコンコン、クワイクワイ聞えると思へば、駕籠に乗つて来た照彦も、六人の娘も煙になつて消えてしまふなり、怪體な事があつたものだ。横歩きの上手な蟹彦奴が、豪さうに竹島彦と名

乗つて、澤山の軍隊を引率して黄泉島へ出陣する、まるで世の中は【クラリ】轉變だ。又あんな事があると、門番だつて馬鹿にならぬワ。待てば海路の風があると云ふ事だ。ロッキー山も常世城も皆出陣して仕舞つて、後に人物が拂底と來て居るのだから、【きつと】選抜されて高彦が鷹取別におなり遊ばすかも知れないよ」

倉彦「貴様、日が永いので夢でも見て居るのか。高彦が鷹取別になつて、化物の火の玉に鼻を挫かれて、鼻【ビシヤゲ】彦となるも面白からう」

「何、鼻位【べしやげ】たつて構ふものか、鷹取別は矢張り鷹取別ぢや。三軍の將として威風堂々四邊を拂ひ、黄泉島に數多の軍を引率して出た美々しい姿は、この高彦の目から見ても實に羨望の至りだつたよ」

「欲の熊高彦、股裂けると云ふ事を知つて居るかい」

「め【くら】の、ぼん【くら】の、なま【くら】彦、何を吐しよるのだ。人の出世は運にあるのだ。俺の運が貴様に分るか」

「貴様の【ウン】を知らぬものがあるかい。この間も雪隠に行くのが邪魔くさい

と云ひよつて、橋の袂で行燈のかきた坊子のやうな形をした、【どえらい】左巻を垂れたぢやないか。澤山の金蠅が出て來よつて、ブンブンと黒くなるほど

【たか】つて居た。貴様は鷹取別ぢやない【はへたかり】彦の糞野郎だなア

困つた奴だなア。運と云ふ事はそんなものぢやないワイ

それなら何だ

運と云うたら、雲の上まで出世をする事だ。それにどんな望みでも、この大將の常世神王さまが諾と云つたら最後、あの横歩きの糞垂腰の蟹彦でも上役になつたぢやないか。どうだ分つたか、運の因縁が

あゝさうか、ウンと云へば出世が出来るのだな。それなら貴様を常世神王の上役、脇立にしてやらう、ウン、ウン、ウン

何だ、雪隠に這入つて跨げたやうな聲を出しよつて、そんな運が何になるか

かく雑談に耽る折しも、數十騎の馬に跨り、此方に向つて勢よく進み來る者あり。

イヨー、ロツキー城から又何だか上使がやつて來たぞ。かうしては居られない、

早く這入つて門を閉めるのだ」

と二人は狼狽てて門の内に飛び込み、門をがたりと入れ、

高彦「サア、運の開け口だ。この門開けといつたが最後、ウンと云うて開くのだ

よ」

倉彦「オイオイ、さう心易く開いちや價値がないぞ。蟹彦のやうに出世をしよう

と思へば、力一ぱい、頑張つて見るのだ」

かかる所へ、逆國別は數多の部下を引き連れ門前に現はれ、

「ロツキ一山の館の姫神伊諾册大神、ロツキ一城の御大將日の出神の御上使逆國

別、常世神王に急用あり、一時も早くこの門を開け」

二人「ヤア、お出でたお出でた、いよいよ運の開け口、これだから辛い門番も辛

抱せいと云ふのだ。犬も歩けば棒に當る」

と譯も知らずに喜んで居る。門外よりは聲高く、

「ヤア、何故この門開けぬか、門番は眠つて居るのか」

高彦「オー、ロツキ一山の上使とかや、大切な役目を蒙るこの門番、晝の日中

に眠る奴があつて耐らうか。何程立派な御上使でも、此門の開け閉ては、門番の權利だ。頭ごなしに吠鳴り立てな、駄目だぞ」

倉彦「オイ、もつと〔カスリ〕聲を出さぬか。そんな間抜けた、竹筒を吹いたやうな聲では、おちこぼれがないぞ。底抜け野郎」

門外より、

「早く開けよ、時が迫つた」

と頻りに叩く。兩人は、

「オイ、兔も角開けての上の御分別だ」

と門を外し、左右にパツと表門を開く。逆國別は乗馬の儘門を潜り入り、

「ホー、皆の者、常世城の東西南北の鐵門を警護致せ。一人たりとも見のがしてはならぬぞ」

と云ひ捨て、ドシドシ中門に向つて進み入る。高、倉は後追つかけ、一生懸命に馬の尻尾に縋りつき、

高彦「モシモシ、逆國別さま、みだりに中門を潜る事は出来ませぬ」

逆國別さかくにわけ 上使じやうしに向つて不都合ふつがふ千萬せんばん、退れさがッ

馬うま 〇 ヒンヒン、ブウブウブウ

倉彦くらひこ 〇 ヤア、馬鹿ばかにしやがる、臭くさい屁へを嗅かがしよつて、日ひに三升さんじやうのくづ豆まめ喰くらひ、
十六文じふろくもんで二足にそくの履穿くつはきよつて、この倉彦くらひこさまに屁へを「くら」はし、音高彦おとたかひこさまと
は洒落しやれて「けつ」かる。モシモシ御上使ごじやうし、物ものを注文ちゆうもんする時ときには前金ぜんきんが要いりますぜ。
あなたが中門なかもんを開ひらけと仰有おつしやるなら、此方こちらにも注文ちゆうもんがある

かくする内うち、中門なかもんはサラリと開ひらいた。逆國別さかくにわけは乗馬じやうばのまま中門なかもんを潛くぐらむとする。

高彦たかひこ、倉彦くらひこは頓狂とんきやうな聲こゑを出だして、

〇 ヤア、この門もんみだりに入るいるべからず。下馬下乗げばげじやうだツ、下れさがッ

と唳鳴どなりつけるを、逆國別さかくにわけは數人すうにんの家來けらいと共にとも、委細あさいかまはず奥おくへ奥おくへと進すすみ入いる。

高彦たかひこ 〇 たうとう我慢がまんの強つよい、這入はいつて仕舞しまひよつた

倉彦くらひこ 〇 門番もんばんの權威けんゐもよい加減かげんなものだなア。貴様きさまの云いふ通とほり、倉彦くらひこが照山彦てるやまひこで、
貴様きさまが鷹取別たかとりわけになるかも知しれないぞ。まア、そんな心配しんぱいらしい顔かほをすな。ヨウヨ

ウ、門を閉め置かないものだから、吾々に無断で駕籠が三つも這入つて來よる。

また昨年さくねんの冬ふゆのやうに、松まつ、竹たけ、梅うめの化物ばけものかも知れないぞ」

「これが出世しゅつせの導みちびきだ。昨年さくねんもさうだつたらう。三人さんにんの女をんなが來て、次に強つよい照彦てるひこがやつて來て暴あばれよつて、その後あとへまた三人さんにんの綺麗きれいな女をんなが這入はいつて來ただらう。その時ときの騷動さうどうのお蔭かげで、蟹彦かにひこの奴やつ、今は立派りつぱな三軍さんぐんの將しやうとなりよつたのだ。うまいうまい」

と云いひながら門もんを「ぴしやり」と閉しめ、門かどをおろし、

「サアサア、これから次つぎの幕まくだ。また強つよい奴やつが破やぶつて這入はいつて來るまで、開あけてはならないぞ」

この時とき何處いづくともなく、破鐘われがねのやうな聲こゑがして、

「天狗てんぐの鼻高彦はなたかひこ、心こころの目倉彦めくらひこ、今いまに運うんが開ひらかぬぞよ。ウワハ、ハ、ハ、ハ、」

二人ふたりは思おもはず聲こゑする方ほうに向むかつて仰天ぎやうてんしたり。

(大正一一・二・二三 舊一・二七 加藤明子録)

第一九章 替玉（四四九）

天津日の光は清く照り渡り、三五の月は大空に隅なきまでに輝けど、曲の企みの薄暗き、常夜の闇の奥殿は、八十の曲靈のたけび聲、何處ともなしに洩れ來る。蟲が知らずか何となく、心塞がり胸痛む、常世神王廣國別は、廣國姫と諸共に、黄泉島にと遣はせし、勇將猛卒のあと見送つて、しめじめと不安の念に驅られる。

常世神王「ア、廣國姫、日頃股肱と頼む照山彦、中依別、鷹取別などの豪傑は、皆出陣して了つて、何とはなしに拍子抜がしたやうだな。恰度行燈を蹴破つたやうな城内の寂寥、萬々一突然に強い敵が攻めて來ようものなら、常世城は「まるつきり」袋の鼠だ。去年のやうな怪しいことが、又復出て來ようものなら如何することとも出來ない。せめて竹山彦だけなりと残して置けばよかつたに」

廣國姫「ナンダか妾も不安で堪まりませぬ。昨夜も妙な夢を見まして、大變に心配を致しました。併しながら夢の浮世と云つて、何うなるも斯うなるも、總て運

は天に任さねば、吾々が何うすることも出来ませぬ。何だか日々に氣が咎めて、天道様から唼鳴りつけらるるやうな心持がして、何時も「おど」おど心が落着きませぬ」

「ソナ弱音を吹くな。捨てる神もあれば拾ふ神もある。よいことが来れば又悪いことも来るものだ。黄泉島の戦ひがうまく此方の勝利となれば、この廣い世界は伊奘册命様の自由自在だ。さうなれば、吾々も常世の國ばかりでなく地上の大神王だ」

と夫婦は前途を氣づかひ且つ望みを抱きながら、首を鳩めてひそひそ話す折しも、小間使の清姫はこの場に現はれ、恐るおそる兩手をつき、
「只今ロツキー城より日の出神の御上使として、逆國別數多の供を引率れ、常世神王に申渡す仔細があると、それはそれは偉い權幕でございます。如何取計らひませうか」

常世神王「ホー、それは吾々にも出陣せよとの御命令だらう。廣國姫、其方はわが代理となつて、この常世城を守つて呉れ。御命令とあれば止むを得ない」

廣國姫ひろくにひめ「

………」

清姫きよひめ「如何御返事を致しませう」

常世神王とこよしんわう「笠取別を呼べ」

「ハイ」

と答へて清姫は此の場を立去る。笠取別は庭前の木の植込の間を潜つて慌しく入

り來り、沓脱石の前に拜跪して、

「笠取別只今參上仕りました」

常世神王とこよしんわう「ホー笠取別か、汝に申付くる事がある。ロッキー城の上使、逆國別に

應對を致せ」

「小神の吾々、御上使に向つて申上げる權利がございませぬ」

「アイヤ、今日は汝を宰相に命ずる。鷹取別の代理だ」

「エー、一寸伺ひます。今日だけでございませぬか。永遠に鷹取別の役を仰付け下

さいますのか。臨時なれば平に御断り申します。時の代官、日の奉行では誠に以

て心細くて、實を入れて談判する勇氣も出ませぬから」

この時逆國別は大音聲、

「ヤアヤア、日の出神の上使逆國別、詮議の次第あつて本城に向つたり。常世神王一刻も早く此場に御出會ひあれ」

笠取別「モシモシ、根つから笠取別に御出會ひあれと申しませぬ。常世神王に上使が呶鳴つてゐます」

常世神王「その方が代理に出るのだ」

「ア、私が常世神王の代理ですか。偉いものだな。蝸牛が天上したと云はうか、雪隠の中の糞蟲が出世して、羽根が生えて王さまの頭へとまつたと云はうか、彦が將軍になつたやうなものだ。矢張り常世城は常夜の闇だな。これだから骨折損の草臥儲け、力のある正直な奴は皆落されるのだ。俺のやうな上役の威光を笠に被て、蔭で【こそ】こそと下手ばかりやつて居るものは、斯う云ふ結構なことが出て来るのだ。ドレ是から一つ此方が常世神王になつて、逆國別を眼下に瞰下して呶鳴りつけてやらうかい。又俺の腕はマア斯んなものだ、一泡吹かすのも面白からう」

「オイ笠取別、何をブツブツ言つてゐるか。早く行かぬか」

「行くも行かぬもありますか。鶴の一聲、常世神王の代理、貴方は代理を御使ひなさつた以上は、最早御用はない筈、御黙り召され……ヤアヤア、ロッキー城の上使逆國別とやら、常世神王……モシモシ常世神王様、代理だけ一寸ぬかして置きますから、そのおつもりで」

常世神王は廣國姫と共に、默然として別殿に進み入り様子を考へてゐる。

笠取別「常世神王代理……ではない笠取別……オツトドツコイ廣國別、此處にあり。逆國別に拜謁を許す。近う近う」

逆國別は悠然として此場に現はれ、一揖しながら常世神王の座に、つかつかと上り行く。

笠取別「ヤア御上使、其處は拙者の場席でござる。御退り召され」

逆國別「常世神王、魔術を以て松、竹、梅の三人と偽り、上を欺く不届者、今日只今より常世城を明渡し、且つ此駕籠に乗つてロッキー城に来るべく、早く手を廻せ」

「これは怪しからぬ」

と言ひも終らぬに、四五の供人は逸早く笠取別を高手小手に縛めたり。

笠取別「俺は笠取別だ。繩捕恨めしい。笠取も恨めしいワイ。俺は常世神王ぢや

ない。家來の家來のその家來だ。今一寸臨時に神王になつて見たのだ。俺を縛る

よりも本當の常世神王を縛つて呉れ」

逆國別「如何に巧に吾を欺かむとするも、此方の眼力に依つて、一眼睨んだ以上

は、その方は擬ふ方なき廣國別、常世神王だ。ヤアヤア、家來共、文句は聞くに

及ばぬ。早く駕籠に打込めよ」

「ホーイ」

と答へて、無理無體に駕籠に捻込み、

逆國別「サア、斯うなればもう大丈夫、常世城の明渡しは追つての事、一時も早

く本城へ立歸らむ」

と馬に跨り、數多の家來を引率れて、ロツキ一城指して意氣揚々と歸り行く。

(大正一一・二・二五 舊一・二九 外山豊二録)

第二〇章 還軍（四五〇）

善を退け、悪を勧め、天地の道に逆國別の上使は、虎の威を借る野狐の、意氣揚々として主人を笠に威張り散らす笠取別の贗物を、これこそ眞の神王と思ひ誤り、唐丸駕籠に投げ入れ、勝鬨揚げて悠々と駒に跨り、數多の軍勢を引連れて、歸城の途にぞ就きにける。

常世城の門番高彦は、

「オイ倉彦、常世神王様は科人の乗る唐丸駕籠に乘せられて、ロツキー城へ召連れて行かれたぢやないか。大變な事が起つて來たものだのう。かうなると吾々も門番をして居つても氣が氣ぢやないね。主人の留守の門番も、何だか影が薄いやうな氣がして威張り甲斐がないぢやないか」

「そんな事はどうでもよいワ。飲めよ騒げよ一寸先は闇だ、闇の後には月が出る、と云ふからには、常夜の闇もいつしか晴れる事があるよ。まあまあ此門を吾々は確りと守る事だ。まあよく考へて見よ、この城内には、豪い奴は皆黄泉島へ出陣

して仕舞つて、本當に人物拂底だ。オイ、一つ物は相談だが、これから倉彦は、唯今限り門番を廢業して常世神王になるのだなあ。さうして貴様が鷹取別になれ
「馬鹿にするない。貴様が家來だ」

と囁いて居る。又もや門の戸を手厳しく打叩く。

高彦「オイオイ、また來たぞ來たぞ。今度は氣をつけぬと吾々を連れて行くかも知れないぞ。貴様望み通り常世神王になつて【フン】縛られて連れて行かれるとよいワ」

倉彦「ヤア、常世神王はもう廢業だ」

門外には人馬の物音物凄く聞えゐる。

「ヤアヤア、吾は常世神王の從臣、竹山彦なるぞ。この門速に開けよ」

倉彦「オイ、黄泉島へ出陣したと思つた竹山彦が歸つて來よつたぞ。こりやきつ

と敗軍ぢやな」

高彦「まア何でもよい。早く開かうかい」

と二人は立つて門を外し、左右に門を開いた。竹山彦は雲霞の如き大軍を率ゐて、

威風堂々と入り来り、奥へ奥へと進み入る。

常世神王夫婦は、青息吐息思案に暮るる折しも、竹山彦の歸り来りしと聞きて

合點ゆかず、四五の侍臣と共に本殿に現はれ来り、竹山彦に拜謁を許した。竹山

彦は威勢よく神王の前に座を占めたり。

常世神王「汝は竹山彦に非ずや、黄泉島に出陣せしに非ざるか。然るに中途に歸

り来れるは其意を得ず、これには深き仔細のあらむ」

竹山彦「御不審御尤もなれど、ロツキー城には悪人多く、常世神王様を陷害せむ

とする者現はれたるを中途にて探知し、容易ならざる一大事と、常世城の軍卒を

残らず召連れて歸りたり。懸て以下の諸將も各自部下を引き連れて歸り来るべし。

かくなる上は吾々は常世城を固く守り、ロツキー城の守り少くなりしを幸ひ、一

擧に攻め寄せて、日の出神を捕虜にし、神王の禍を殲滅せむ。ア、面白し面白し

「ヤア、遠は竹山彦、好い所へ氣がついた」

かかる折りしも、門前またもや騒々しく、矢叫びの聲、鬨の聲、手に取る如く

聞え来る。これは常世城の勇將猛卒一人も残らず歸城したる叫び聲なりけり。

これより常世神王は、將卒の歸りしに力を得て、ロツキ一城に攻寄せせる事となりぬ。ロツキ一城に於ては、この様子を聞き大いに驚き、黄泉島に向ふ軍卒の一部を割きて、急ぎ歸城せしめ、防禦に全力を盡したるにぞ、そのために黄泉島の兵力は、その大半を削がるるに至れり。

(大正一一・二・二五 舊一・二九 加藤明子録)

第二章 桃の實(四五)

茲に日の出神は、神伊邪那諾神の神勅を奉じ、三軍に將として黄泉島に向つて花々しく進軍せり。

石拆司、根拆司、石筒之男司をして先陣を宰らしめ、甕速日司、樋速日司、建布都司をして本隊の部將とし、後陣には閻淤加美神、閻御津羽神を部將とし、旗鼓堂々として黄泉島の比良坂に向つて進軍せしめ、左翼の軍隊には正鹿山津見神、

駒山彦、右翼には奥山津見神、志藝山津見神を部將とし、遊軍として闇山津見神、羽山津見神、原山津見神、戸山津見神の十六神將をして鶴翼の陣を張り、魚鱗の備へ勇ましく、天の鳥船、岩樟船に乗せて雲霞の如き大軍を送り、天地も震動ぐばかりの言靈を發射せしめたり。

茲に常世の國のロッキー城に現はれたる大國彦は、自ら日の出神と偽稱し、美山別をして、大雷、黒雷、火雷、拆雷の勇將を遣はし、數多の魔軍を指揮せしめ、照山彦は伏雷、土雷の部將を率ゐて左翼となり、竹島彦は鳴雷、若雷の部將を率ゐて右翼となり、國玉姫、田絲姫、杵築姫をして醜女探女を引率せしめ、爆彈、弓矢、槍、劍などの兇器を以て山上に攻め登り、一擧に黄泉島を占領せむと猛虎の勢凄じく攻め來る。

天震ひ地動き、得も言はれぬ激戦は茲に開始されける。桃の實に擬へたる國玉姫、田絲姫、杵築姫の婉麗並びなき姿も、靈主體從の神軍に對しては、その魔力を發揮するの術更になかりけり。

中空よりは、神軍として月照彦神、足眞彦神、少彦名神、弘子彦神、雄姿を現

はし神軍を指揮しつつあり。美山別の軍勢は、この神軍の應援に進み兼ね、稍躊躇の色ありしが、中空より聞ゆる森嚴なる言靈の響に、頭は痛み胸は裂けむばかり苦しき悶えて、止むを得ず坂の上より退却を始めたれば、日の出神の率ゆる神軍は、時を移さず比良坂を下りて、美山別の魔軍を追跡すること益々急なり。美山別の一隊は、八種の雷神に數萬の魔軍を添へて生命限りに盛り返し來るを、日の出神は左翼部隊なる正鹿山津見、駒山彦の一隊を割いて、迂迴して魔軍の背面に向はしめたるに、魔軍は不意の言靈に再び膽を抜かれ、萎縮して思はず大地に俯伏する。月照彦、足眞彦らの神軍の活動を稱して蒲子生りきと云ひ、駒山彦、正鹿山津見の一隊の活動を稱して、湯津津間櫛を引闕きて投棄て給へば乃ち笥生りきと云ふなり。

日の出神は、軽々しく進み敵の術中に陥らむ事を恐れ、此の機に乗じて元の本陣に大部隊の神軍を還し、宣傳歌を高唱して、敵の襲撃に備へつつありき。

美山別の一隊は、ここを先途と全力を盡し、魔軍の力を集中し、一團となつて驀地に日の出神の陣營に向つて進み來る。一進一退、容易に勝負も見えざりける。

美山別は勝に乗じ、あらゆる精巧なる武器を以て縦横無盡に攻め寄せ来るを、
日の出神の神軍は、各自兩刃の劍を携へをれども、素より折伏の劍にあらず、攝
取不捨の利劍なれば、敵の鋒鋌に對しても容易にこれを用ゐず、ただ至誠至實の
言靈を應用して、これに對抗するのみ。されども人盛なれば天に勝ち、惡は善を
虐げ、暴は柔を苦しめ、時ならずして神軍の形勢は益々悲境に陥りぬ。
この時桃上彦の娘、松代姫、竹野姫、梅ヶ香姫は月、雪、花の三人の女將を從
へ、數多の美しき女人を率ゐて、宣傳歌を歌ひながら、敵の陣中を目がけて長袖
淑に踊り舞ひ狂ふにぞ、遠の魔軍も、容色端麗にして天女の如き清楚なる姿に眼
眩み、魂奪はれ、呆然として各武器を地に投げ見つめ居る。
松、竹、梅、月、雪、花の宣傳使は、魔軍の陣中を前後左右に飛び廻り、聲も
涼しく宣傳歌を歌へば、魔軍の將美山別を始めとし、八種の雷神に至るまで、女
神の姿に恍惚として戦ひの場にある事を忘るるに至りぬ。此間に日の出神は、諸
將を引率して黄泉比良坂の坂の上に退却し、ここに一時休養せり。魔軍は何れも
戦ふの力なく平伏するを、松、竹、梅以下の女神は、悠悠として日の出神の屯せ

る黄泉比良坂の坂の上に還り来り、戦況を具さに奏上せり。この時空中に聲あり、
「吾は神伊邪那諾命、日の出神をして黄泉軍を言向け和さしめたれども、魔軍の
勢強くして容易にこれを歸順せしむ可からず。諸神將卒は戦ひに勞れ艱みたる折
しも、汝松、竹、梅の桃の實現れ来りて魔軍を言向け和し吾神軍を救ひたるは、
この戦ひに於ける第一の功名なり。これより松、竹、梅の桃の實は、吾軍を助け
たる如く、世人の悪魔に悩まされ、憂瀨に落ちて苦しまむ者あらば、汝が言靈を
以てこれを救へよ。汝ら三柱に對して、意富加牟豆美神といふ御名を賜ふ
と宣らせ給ひぬ。」

(大正一一・二・二五 舊一・二九 東尾吉雄録)

第二章 混々怪々(四五二)

醜の魔風の吹き荒ぶ、ロッキー山の山風、大國姫神は黄泉島なる戦ひに、味方

の勝を美山別、國玉姫の訪れを、今や遅しと待ち居たる。時しもあれや大空を、轟き渡る天の磐船、此處彼處、圓を描いて下り來る。鳴音高き大雷、火雷の二柱、ロッキー山の城門に現はれ、門外より門番に命じ、鐵門を左右に開かしめ、息もせきせき奥殿目がけて進み入る。

ロッキー山の重臣武虎別は進み出で、大雷、火雷の二將を見るより、
「オー、思ひがけなき二神の歸城、黄泉島の戦ひ、味方の勝敗如何に、速かに話されよ」

大雷「吾々中途にて急ぎ歸りしは、餘の儀にあらず。黄泉島の戦鬪は殆ど味方の全敗、このまま打捨て置かば、敵の大將日の出神は數多の神軍を引連れ、黄泉島は未だ愚、常世の國に攻め渡り、ロッキー山を占領し、吾々をして根底の國に追ひ落さむは目睫の間にあり。貴下は速かに此由大神に奏上されよ」
火雷「時後れては一大事、瞬くひまも猶豫ならず。早く早く」と急ぎ立てる。

武虎別は何の答もなく、そのまま隔ての襖を押し開きて慌しく奥殿目がけて進

み入りぬ。後に二人は呆然として【もど】かしげに、大國姫の出場を首をのばして今や遅しと待ち居たるが、此時、門前に何となく騒がしき音聞え來る。二人は耳を澄まして其物音に聞き入れば、國玉姫、杵築姫、田絲姫の三柱の美人は悠々として數多の女神を引連れ、此の場に入り來るなりき。大雷は思はず聲をかけ、
「ヤア貴下ら三人は戦ひの眞最中にも拘はらず、危急存亡の場合、戦陣を捨て、女々しくも歸り來れるか。之には深き様子のある事ならむ、具に物語られよ」

國玉姫 「アツハ、、、オホ、、、、」

杵築姫 「ウフ、、、、エへ、、、、」

田絲姫 「イヒ、、、、ホ、、、、」

三人一同にいやらしき聲を張りあげ、敗軍も心に留めざるが如き氣樂さうな笑ひ聲に、大國姫命、武虎別は慌しく出で來り、

大國姫 「アイヤ、汝は大雷、火雷にはあらざるか。天下分目の此戦ひ、敵も味方も死力を盡し、鎬をけづる眞最中に歸り來るは其意を得ず、いぶかしさの限りなり。また國玉姫ら三人のその笑ひ聲は何事ぞ」

とやや顔色を赭らめて問ひかくなれば、大雷は大口開いて、

「【オ】ホ、ホ、ホ、恐れ入つたる御挨拶、鬼も、大蛇も、狼も、搦んで喰ふ大雷、

【オ】メ【オ】メ歸り來る理由があらうか。大勢の軍卒を引連れながら腰を屈め、

尾を巻いて【お】ぢ【お】ぢと歸り來る理由はない。恐れながら此大雷は、日の

出神の御使鬼武彦の化神なるぞ。己れの正體は判るまい。狼狽へきつた其面付の

【を】かしさ。大國姫命も、畏れ多くも、伊邪那美神をさし措き伊邪那美大神と

偽り、この世を誑る大曲津の張本、この儘にしては【オ】、置くものか。ヤイ、

もうそんな馬鹿な藝當は【お】け【お】け。【を】こがましくも、ロッキー山の

魔神の【お】里にあり。押しも押されもせぬ日の出神に敵對ふとは、分に過ぎた

る汝の企み、今後は三五教の教を守り、ソナナ恐ろしい計畫を致すでないぞ。何

だツ、【お】多福面をしよつて、【おつ】に構へて大國姫の贖神が、伊邪那美命

なぞとは尻が呆れるワイ。根の國底の國に落ちて怖ろしい責苦に遇へば、如何に

【お】轉婆の其方も、多寡が女の弱腰、鬼の鐵棒や斧を以て追ひまくられては、

【お】前の逃げ場所もあるまい。【オ】メ【オ】メと根底の國で恥を搔くより、

今の中いまうちに心こころを改あらため、面おも白しろくない計たくみ畫えを止やめて祖おや神がみ様さまに從したがへ。さう致いたせば【お】前まへの罪つみは追おひ追おひと赦ゆるされるであらう。大おほ雷いかづちと見みえたるは大おほきな間まち違がひ、鬼おに武たけひこ彦ひこが千せん變べん萬ばん化くわの活くわ動どうだ。アハ、、、、

火ほ雷いかづち

【ホ】、、、、呆ほうけた面つらして【ホ】口くち【ホ】口くちと、涙なみだをこぼして其その態さまは何なんだ、今いま迄までの悪わるい【たくみ】を【ホ】ホ、【ホ】ウキで掃はいた様やうに、さつぱりと放ほうして終しまへ。伊い邪ざ那な美み神のかみと甘うまく化ばけおほせ、これで大だい丈ぢやう夫ぶだと【ほ】くそ笑ゑみをして居ゐた其その方ほう、何なに【ほ】ど自じ分ぶんの力ちからに呆ほうけて誇ほこつて居ゐても、ごうたくを吐はきいても、貴きさ様の欲ほしい黄よもつじま泉な島なかなかは中な々なか以もつて手てに入いらぬぞ、細ほ引そびきの禪ふんどしだ。あつちに外はづれ、こつちに外はづれ致いたして【ボ】夕もち餅もちは棚たなから落おちて來こないぞ、發ほ根つこんから改かい心しん致いたさばよし、大おほきな布ほ袋てつ腹はらを拘かかへて、何なにを企たくんでも【ホ】コトンばかりだ、時ほ鳥とだ。八はつ千せん八やこ聲ゑの血ちを吐はいて、苦くるしみ藻も搔がき、譽ほ處まわらうか法ほ螺らの抜ぬけ殻がら、穴あなでも掘ほつて、すつ込こまねばならぬやうな恥はづかしいことことが出來できて、【ホ】口くち【ホ】口くちと涙なみだをこぼし、天てん地ちの神かみには放ほう棄かされ、取とり返かへしのならぬ事ことが出來しゆつたいたすぞ。改かい心しんいたすなら今いまぢや。

【ホ】、、、、火ほ雷いかづちとは真ま赤かな偽いつはり、われは火ほ産むすび靈のかみ神だ。よつくわが面つらを見みて置おけ

タイ、【イ】タイと半死半生、見るも哀れな次第であるぞよ。【イ】ヒ、ヒ、ヒ、命あつての物種だ。一時も早く魂を入れ換へ致すがよからう。コンコンコンコンカイカイカイ

忽ち五人の男女は牛の如く大なる白狐となり、大國姫、武虎別目がけて飛び付かむとする。この時またもや門前騒がしく、日の出神の御來場と先導者の聲、城の内外に響き来る。

(大正一一・二・二五 舊一・二九 藤津久子録)

第二三章 神の慈愛 (四五三)

大國姫命は、武虎別と共に、此場の怪しき光景に膽を奪はれ、呆然として何の辭もなく佇み居る折しも、日の出神と稱する大自在天大國彦は、四五の従者と共に此の場に現はれ來り、

「ヤア、ロツキー城は大變な事が起つて來た。常世城常世神王、數多の軍勢を引連れ叛逆を企て、味方に於ては淤藤山津見、固虎彦を以て之に當らしめ居れども、始終の勝利は覺束なし。汝大國姫、今より祕かに黄泉島に渡り伊奘册尊と稱して出陣し、味方の士氣を鼓舞し以て大勝利を博し、神軍を追拂へよ。然らば如何に廣國別勢猛く攻め來るとも、汝が武威に恐れて忽ち降服せむ。本城に立籠り、暗々廣國別に滅ぼされむは策の得たるものに非ず。吾は是より本城に止りて、寄せ來る敵を待ち討たむ。汝は一時も早く黄泉島に向へ」

大國姫「委細承知仕りました。併しながら怪事多き此城中、十二分の御注意あれ」と言ひ棄て、天の磐船に乗りて天空を轟かしながら、四五の從兵と共に、黄泉島に向つて急ぎ進み行く。

この時又もや門外騒がしく、淤藤山津見は、固山彦と共に周章しく入り來り、日の出神に申上げます。ロツキー城は、最早刀折れ矢盡き、遂に敵の占領する所となりました」

日出神「工、腑甲斐なき奴輩奴。吾は是より廣國別の軍に向ひ勝敗を決せむ。淤

滕山津見、固虎、吾に續け

と言ひながら、駿馬に跨り、威風凜々として少數の軍卒を率ゐ、ロッキー山城を後に見て、ロッキー城に向つて驅けつくる。

ロッキー城に致り見れば、表門は開放され、一人の敵軍もなければ味方の影もなし。曠日の出神は怪しみながら、將卒を率ゐて四方に心を配りつつ奥深く進み入る。見れば、狐の聲四方八方より、

狐々怪々

寂として人影もなし。

日出神、合點の行かぬ今の鳴聲。アイヤ、淤滕山津見、固虎彦、残る隅なく搜索

せよ

淤滕山津見、オ、吾こそは三五教の宣傳使、今まで汝が味方と云ひしは、汝の惡逆無道を懲さむ爲なり。サア、斯くなる以上は尋常に降服するか

工、

固山彦、汝は日の出神と名を偽り、ロッキー城に立籠り、神界の經綸を根底より

破壊せむとせし惡鬼羅刹の張本、斯くなる以上は、隠るとも逃ぐるとも、最早力及ばぬ。覺悟を致せ」

日出神「ヤー残念至極、大國姫は黄泉島に向つて進軍し、部下の勇將猛卒は、或は出陣し或は遁走し、今はわが身一つの、如何とも術なし。サア、汝等斬るなら斬れよ、殺すなら殺せよ」

淤藤山津見「アイヤ贗日の出神、よつく聽け。天地の神明は愛を以て心となし給ふ。吾々人間として如何ともなし難きは空氣と水と死とである。死するも生くるも神の御心だ。徒に汝が如き命を奪ひて何の效かあらむ。假令肉體は死すると、汝の靈は再び惡鬼となりて天下に横行し、妖邪を行ふは目に見るが如し。吾は汝の生命を奪ひて以て事足れりとなすものでない。汝が靈魂中に割據せる惡靈を悔い改めしめ、或は退去せしめ、改過遷善の實を擧げさせむと欲するのみ。三五教は汝らの主張の如き、武器を以て人を征服し、或は他國を略奪するものにあらず。至仁至愛の神の教、よつく耳を洗つて聽聞せよ」

「オー、小賢しき汝の言葉、聞く耳持たぬ。斯くなる以上は最早吾等の運の盡、

鍛へに鍛へし都牟刈太刀を味はつて見よ

と言ふより早く、太刀をズラリと引き抜いて、
淤藤山津見、固山彦に斬つて掛か
るその勢凄じく、恰も阿修羅王の荒れ狂ふが如し。
淤藤山津見、固山彦は劍の下
をくぐり、一目散に表門指して逃げ出す。

日出神「ヤア、卑怯未練な奴。なぜ尋常に勝負を致さぬか」

固山彦「エ、残念だ、淤藤山津見さま、如何に三五教の玉の教なればとて、斯の
如き侮辱を受けながら、旗を捲き鋒を納めて、この場を逃ぐるは卑怯と見られま

せう。變事に際して劍の威徳を現はすは、神も許し給ふべし」

淤藤山津見「イヤイヤ、至仁至愛の神の心を以て吾は此場を逃ぐるなり。龍虎共
に戦はば勢ひ互に全からず。彼を斬るか、斬らるるか、彼も神の子、吾も神の子、
神の御子同士傷つけ合ふは、親神に對して申譯なし。暫く彼が鋭鋒を避けて、更
めて時を窺ひ悔い改めしめむと思ふ」

「エ、三五教は誠に以て行き難い教であるワイ」

と地團駄踏んで口惜しがる。日の出神は見え隠れに後をつけ來り、この話を聞い

て大いに驚き、思はず、

「ワツ」

とばかり泣き伏しにける。

固山彦「ヤア、なんだか暗がり泣聲が致しますよ」

淤滕山津見「さうだなア、何だか妙な泣聲だ、よく似た聲だ。ヤア、暗中に泣き

叫ぶは何人なるぞ」

暗中より、

「私は日の出神と名を偽つた大國彦であります。只今貴方の仁慈に富める御言葉を聞いて、感涙に咽び思はず泣きました。私は今迄の悪を翻然として悔い改めま

す。どうぞ御赦し下さいませ」

淤滕山津見「ホー、満足々々、斯くならば敵も味方もない、全く兄弟だ。兄弟を

助けたさに、吾は宣傳使となつて苦勞を致して居るのだ。貴方の知らるる如く、

吾も舊は大逆無道の醜國別、神の仁慈の雨に浴し、悔い改めて宣傳使となりし者、

かくなる上は貴下と共に是より常世城に進み、常世神王廣國別を神の教に歸順せ

しめむ
」

固山彦「ヤア、流石は淤滕山津見さま、本當に感心だ。實地の良い教訓を受けました。サアサア日の出神……ではない大國彦殿、これより常世城に向ひませう」
嚇し上手の淤滕山津見、固い一方の固山彦、目から火の出る日の出神の、意外な憂目に大國彦、今は全く悔い改めて、心の駒も勇み立ち、三人一同に連錢葦毛の駿馬に跨り、魔神の猛る常世の暗の常世城、群がる敵を物ともせず、神を力に信仰を杖に、生死の境を超越し、勇氣を鼓して敵の群衆に向つて、馬の蹄の音勇ましく、ハイヨーハイヨと鞭を加へて進み行く。

竹山彦その他の部將は、この光景を見て、抵抗するかと思ひの外、馬上より、「ヤア、大國彦命、ウローウロー、目出度しめでたし、一時も早く奥殿に入らせられよ」

と案に相違の挨拶ぶり、大國彦は怪訝の念に驅られながら、淤滕山津見、固山彦と共に、馬上ゆたかに奥へ奥へと進み行く。今まで雲霞の如き大軍と見えしは、夢幻と消え失せて跡形もなく、奥殿には嘯嘯たる音楽響き渡り爽快身に迫る。一

同は奥の間に端坐し、天津祝詞を奏上し宣傳歌を唱ふ。

是よりロツキ一城も常世の城も、十曜の神旗翻へり、

神徳を讚美する聲天地に

響き、常世國は一時天國樂園と化したるぞ目出度けれ。

(大正一一・二・二五 舊一・二九 松村眞澄録)

第二四章

言向和〔四五四〕

善と惡とを立別る

遠き神代の大峠

黄泉の島の戦ひに

弱りきつたる美山別

國玉姫の部下たちは

朝日輝く日の出神の

味方の軍に艱まされ

天地に轟く言靈の

貴の力に這々の體

悶え苦しむ折からに

黒雲塞がる大空を 轟かしつつ舞ひ降る

磐樟船の刻々に 地上に向つて降り来る

大國姫を神伊邪那美大神と 敵や味方を偽りて

日頃企みし枉業を 遂げむとするぞ淺ましき。

神軍の言靈に魂を抜かし、膽を挫かれ、腰を抜かした醜女探女の惡神等は、泥

に酔うたる鮒の如く、毒酒に酔うた狸々の如く、骨も筋も莚蕪然と悶え苦しむ其

處へ、常世の國の總大將、神伊邪那美神の御出陣と聞いて、再び元氣を盛り返し、

八種の雷神を始めとし、百千萬の魔軍は一度にどつと鬨をつくつて、黄泉比良坂

指して破竹の如くに攻め登る。

「ウロー、ウロー」の叫び聲、天地も震撼するばかりにて、天津御空は黒雲益々

濃厚となり、雷霆鳴り轟き、大地は震動し、海嘯は山の中央までも襲ひ來り、黄

泉の國か、根の國か、底の判らぬ無殘の光景に、美山別、國玉姫は、

「常世の國の興亡此一擧にあり」

と、部下の魔軍を勵まして、

「進め進め」

と下知すれば、命知らずの魔軍は、醜女探女を先頭に、心の闇に迷ひつつ、力限りに戦ひける。

爆弾の響き、砲の音、矢の通ふ音は、暴風の聲と相和して益々凄じくなり来る。

此の時日の出神は比良坂の坂の上に立ちて、攻め登り来る數萬の魔軍に向ひ、

「神伊邪那岐大神、神伊邪那美大神、守らせ給へ。常世の國より疎び荒び来る黄

泉神、大國姫の伊邪那美命に一泡吹かせ、心の曲を拂ひ去り、皇大神の神嘉言の

聲に邪の心を照させ給へ。一二三四五六七八九十百千萬の神等よ、日の出神の一

つ炬を、天地に照すは今この時ぞ。許させ給へ」

と云ふより早く、姿は消えて巨大なる大火球と變じ、魔軍の頭上に向つて唸りを

立て、前後左右に飛び廻るにぞ、數多の魔軍は、神光に照されて眼眩み、炬の唸

りに頭痛み、耳痺れ、身體忽ち強直して化石の如く、幾萬の立像は大地の砂の數

の如くに現はれける。

正鹿山津見は涼しき聲を張りあげて、

神が表に現はれて
善と悪とを立別る

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

只何事も人の世は
直日に見直せ聞き直せ

身の過失は宣り直せ
黄泉の島は善惡の

道を隔つる大峠
言問ひわたす神々の

誠の道を千代八千代
定むる世界の峠

鬼も大蛇も曲津見も
言問ひ和す言問岩

此坂の上に塞りたる
千引の岩は神の世と

邪曲世を隔つる八重の垣
出雲八重垣妻ごみに

八重垣造る神の國
ソモ伊邪那美の大神と

詐り來る曲神の
大國姫よ國姫よ

汝が命は幽界の
黄泉醜女を悉く

言こと向むけ和やはせ現うつしよ世をあとに見み捨すてて歸かへり行ゆく

百ももの靈みたま魂まもを守まもれかし黄よもつ泉の國くにに出いでまして

一ひと日ひに千ち人ひと八や千ち人ひとの落おち行ゆく魂たまを和なごめつつ

現うつつの國くにに來きたらじと黄よ泉みの鐵かなど門をよく守まもれ

神かむい伊い邪な岐なの大神おほかみの生せい成せ化くわ育わの御おん德とくに

日ひの出で神のかみと現あらはれて一ひと日ひに千ち五い百ほの人ひと草ぐさや

萬よろつ民たみ草ぐさを大おほ空ぞらの星ほしの如ごとくに生うみ殖ふやし

神かみの御み國くにを開ひらくべし那な岐ぎと那な美みとの二ふた柱はしら

互たがひに呼い吸きを合あはせまし國くにの八や十そく國に八や十その島しま

青あを人ひと草ぐさや諸もろ々もろの活いける物ものらを生うみなして

堅かき磐は常とき磐はに神かみの世よを樹たてさせ給たまへ常とこ世よ國くに

口くちツつキき一ざん山をふり捨すてて心こころをしづめ幽かくりよ界の

黄よもつ泉の神かみと現あれませよ黄よもつ泉の神かみと現あれませよ

大國姫はこの歌に感じてや、千引の岩の前に現はれて、

吾は常世の神司

神伊邪那美の大神と

百の神人詐りて

日に夜に枉を行ひつ

心を曇らせ惱ませて

あらぬ月日を送りしが

神の御稜威も明けき

日の出神や諸神の

清き心に照されて

胸に一つ炬輝きぬ

輝きわたる村肝の

心の空は美はしき

誠の月日現れましぬ

嗚呼天地を固めたる

神伊邪那美の大神の

吾は黄泉に身をひそめ

醜の枉靈の醜みたま

醜女探女を悉く

神の御教に導きて

靈魂を洗ひ清めさせ

再び生きて現世の

神の柱と生れしめむ

美し神世に住みながら

曲業たくむ醜神を

一日に千人迎へ取り

根底の國に連れ行きて

百の責苦を與へつつ

きたなき魂を清むべし

あゝ皇神よ皇神よ

常世の暗の黄泉國

暗を照して日月の

底ひも知れぬ根の國や

底の國まで隅もなく

照させ給へ朝日照る

夕日輝く一つ炬の

日の出神よいざさらば

百の神等いざさらば

と歌つて改心の誠を現はし、黄泉の大神となつて幽政を支配する事を誓ひ給ひたるぞ畏けれ。ここに伊邪那岐神の神言以ちて、日の出神その他の諸神將卒は、刃に衄らず、言靈の威力によつて、黄泉軍を言向け和し、神の守護の下に天教山に向つて凱旋されたり。

數多の曲津神は悔い改めて、生きながら善道に立歸るもあり、靈魂となりて悔い改むるもあり、或は根底の國に落ち行きて黄泉大神の戒めを受け、長年月の間

苦しみて、その心を改め、
靈魂を清め、
現界に向つて生れ來り、
神業に参加する神々
も少からずとの神言なりけり。

(大正一一・二・二五 舊一・二九 井上留五郎録)

第二章 木花開〔四五五〕

天雲も伊行きはばかる遠近の 鮮嶽清山拔き出でし
天教山の眞秀良場や 心もつくしの山の上
地底の國より吐き出す 猛き火口に向ひたる
天津日向のあをぎ原 穢き國に到りたる
醜のけがれを清めむと 神伊邪那岐の大神は
日の出神と諸共に 千五百軍を呼び集へ

浅間の海に下り立ちて 御身の穢を拂ひます

大神業ぞ勇ましき 天の教を杖となし

進む衝立船戸神 心の帯を固く締め

曲言向けし神ながら 道之長乳齒彦の神

國治立の大神の 御稜威の御裳になり出でし

道の蘊奥を時置師 一度に開く木の花の

散りては結ぶ大御衣 神の心も和豆良比能

宇斯能御神や御禪に なります神は道俣神

心の空も飽咋の 宇斯能御神と冠りに

戴き奉り左手の手纏に 救ひの御手を曲神の

穢れの上に奥疎神 四方の大海國原も

神の心に奥津那藝佐毘古 奥津甲斐辨羅神

神世幽界邊疎神 邊津那藝佐毘古

邊津甲斐邊羅神 十二柱の神たちは

黄泉の島へ出でまして
この世の曲靈を照し給ふとき
穢に生れし神ぞかし
ア、麗しく尊さの
限り知られぬ神業よ。
限り知られぬ神業よ

伊邪那美大神

久方の天津御神の言靈の
伊吹の狭霧に黄泉島

黄泉軍を言向けて
暗よりくらき烏羽玉の

常夜の空も晴れ渡り
天と地とに冴え渡る

日の出神の功績は
この世の光となりぬべし

三五の月に彌まさり
御魂も清き月照彦の

神のみことの宣傳使
尊き御代に大足彦の

神のみことの言靈別や
嶮しき國は平けく

狭けき國は弘子の
神の伊吹に拂はれて

世の曲神も少彦名

神の光の高照姫や

心も清き眞澄姫

八咫の鏡の純世姫

清き教も龍世姫

地教の山に現はれし

神伊邪那美大神の

御稜威輝く瑞御魂

世は望月の永遠に

圓く治まる五六七の世

天津御國も國原も

堅磐常磐に常立と

開化くる御世ぞ樂しけれ

天津御神の御教は

一度に開く木の花の

咲き匂ふなる天教山の

嶺永遠に動搖なく

天津日嗣の何時までも

變らざらまし神の御世

豐葦原の瑞穂國

御稜威も高き嚴御魂

この世の泥をことごとく

洗ひ清むる瑞御魂

嚴と瑞との二神柱は

天に現はれ地に生れ

清き神世を経緯の

錦の御旗織りなして

天津御空の星の如

八洲の國の砂の如やしまくにすなごと 天の益人生み生みてあめますひとう
世を永久に永遠によとこしへとことは 雲に抜き出た高砂のくもぬでたかさこ
珍の島ヶ根の尉と姥うづしまがねじやううば 千歳の松の彌茂りちとせまついやしげ
榮え盡きせぬ神の國さかつかせぬかみくに 限りも知れぬ青雲のかぎもしあをくも
棚引く極み白雲のたなびきはしらくも 向伏す限りたてよこのむかふかぎ
神の御稜威に治むべしかみみいづをさ 神の御稜威に治むべしかみみいづをさ

と歌ひ終らせ、伊邪那美大神は「あをぎ」が原の神殿深く御姿を隠し給ふ。
木花姫命は満面に笑を湛へ、諸神の前に現はれ給ひて聲音朗かに歌ひ給ふ。
このはなひめのみこと まんめん えい なみのおほかみ はら しんでん ふか みすがた かく うた たま

豊葦原の中國にとよあしはらなかくに 一輪清く芳ばしくいちりんきよかん
匂へる白き梅の花におほるしろうめはな 神世の昔廻り來てかみよむかしめぐき
國治立の大神がくにはるたちおほかみ 日に夜に心配らせしひよよこころくば
常夜の國も晴れ渡りとこよくに ははわた 曲津軍も服従ひてまがついくさまつる

いちど ひら こ はな
一度に開く木の花の

やみ くら よ なか
闇より暗き世の中を
あまつみかみ みこと
天津御神の神言もて

よもつ しま あまくた
黄泉の島に天降り
しご くにばら ことむ
醜の國原言向けて

ひ でのかみ あらほ
日の出神と現れし
あめ つち おほみちわけ
天と地との大道別の

かみ みこと いさ
神の命と勇ましく
ことど わた ことひらわけ
事戸を渡し琴平別の

いづ みたま ももびきちびき
嚴の御魂の百引千引
いは 射ぬく まごころ
岩をも射ぬく誠心を

つらぬ とほ くは ゆみ
貫き徹す桑の弓
ゆみはりづき そらたか
弓張月の空高く

かがや わた かみがみ
輝き渡る神々の
いさを きよ てんけうざん
功は清し天教山の

をね わ づ ことたま
尾根に湧き出る言靈は
うみ かがみ うつ
湖の鏡に映るなり

うつ かは よ なか ひ
移り替るは世の中の
なら 聞き こ はなひめ
習ひと聞けど兄の花姫や

さ にほ はる ひ
咲き匂ふなる春の日も
またた うち くれなゐ
瞬く間に紅の

いろか なつ わかみどり
色香も夏の若緑
すず かげ おく
涼しき風に送られて

よも やまやま にしきお
四方の山々錦織り
もみぢ ち こがらし
紅葉も散りて木枯の

かぜ ふ すさ ゆきしも
風吹き荒み雪霜の
こと は みる
ふる言の葉にかへり見て

心こころを配くばれ神かみ々がみよ 心こころを配くばれ神かみ々がみよ
春はるの花はな咲さく今日けふの日ひは 吾わが胸むねさへも開ひらくなり
吾わが胸むねさへもかかをるなり かかをりゆかしかしき神かみの道みち
一いち度どに開ひらく梅うめの花はな 一いち度どに開ひらく梅うめの花はな
一いち度どに開ひらく梅うめの花はな 一いち度どに開ひらく梅うめの花はな
一いち度どに開ひらく梅うめの花はな 一いち度どに開ひらく梅うめの花はな

日ひの出で神かみは、神かみ人がみららの總そう代だいとして凱がい旋せんの歌うたを詠よませ給たまひぬ。その歌うた、

日ひの若わか宮みやに現あれませる 神かみ伊むい邪いざ那な岐ぎの大神おほかみは
妹いも伊い邪いざ那な美みの大神おほかみと 天あま津つ御み神かみの神み言こともて
天あめと地つちとの中なか空ぞらに 架かけ渡わたされし浮うき橋はしに
立たたせ給たまひて二ふた柱はしら 撞つきの御み柱はしら大神おほかみと
天あまの瓊ぬほ矛こをさしおろし 溢あふれ漲みなる泥どろ海うみを
こをろこをろにかきなして 豊とよ葦あし原はらの中なか津つ國くに

筑紫の日向のたちばなの
をどのあをぎが原の邊に

天降りまし木の花姫の
神の命と諸共に

この世の泥を清めつつ
珍の國生み島を生み

萬の神人生みまして
山川草木の神を任せ

大宮柱太知りて
鎮まり給ふ折からに

天足の彦や胞場姫の
醜の魂より現れし

八岐大蛇や鬼狐
荒ぶる神の訪に

萬の災群れ起り
常夜の暗となり果てし

世を照さむと貴の御子
日の出神に事依さし

大道別と名乗らせて
世界の枉をことごとに

言向け和せと詔り給ふ
力も稜威もなき吾は

恵みの深き木の花姫の
三十三相に身を變じ

助け給ひし御恵みに
力添はりて四方の國

荒振る曲を言向けて
黄泉の島の戦ひに

神の御稜威を顯はせし
 神の御稜威を顯はせし
 神のみことの稜威ぞかし
 神のみことの稜威ぞかし
 三五の月の御教に
 三五の月の御教に
 千尋の海の底深く
 千尋の海の底深く
 暗き根底の國までも
 暗き根底の國までも
 明し照さむ神の道
 明し照さむ神の道
 富士と鳴門のこの經綸
 富士と鳴門のこの經綸
 神の大道を天地と
 神の大道を天地と
 鎮まりませよ百の神
 鎮まりませよ百の神
 桃上彦の貴の御子
 桃上彦の貴の御子
 心すくなる竹野姫
 心すくなる竹野姫
 神の命の三柱は
 神の命の三柱は
 この世に現れ嚴御魂
 この世に現れ嚴御魂
 三五の月の御教を
 三五の月の御教を
 堅磐常磐に守り坐せ
 堅磐常磐に守り坐せ
 瑞の御魂と何時までも
 瑞の御魂と何時までも
 意富加牟豆美の桃の實と
 意富加牟豆美の桃の實と
 色香目出たき梅ヶ香姫の
 色香目出たき梅ヶ香姫の
 堅磐常磐の松代姫
 堅磐常磐の松代姫
 鎮まりいませよ百の神
 鎮まりいませよ百の神
 共に開かむ、いざさらば
 共に開かむ、いざさらば
 天津日かげの永遠に
 天津日かげの永遠に
 龍の宮居も烏羽玉の
 龍の宮居も烏羽玉の
 世界隈なく晴れ渡り
 世界隈なく晴れ渡り
 嚴の御魂や瑞御魂
 嚴の御魂や瑞御魂
 その功績は木の花姫の
 その功績は木の花姫の

堅磐常磐に守り坐せ』

この御歌に數多の神々は歡喜の聲に満たされて、さしもに高き天教山も破るる許りの光景なりき。

木の花の鎮まり給ふこの峰は
不二の三山と世に鳴り渡る

(大正一一・二・二五 舊一・二九 上西眞澄録)

第二六章 貴の御兒(四五六)

神の御稜威も彌高く、恵みも深き和田の原、抜き出て立てる不二の山、雲を摩したる九山八海の、神の集まる青木ヶ原に、黄泉軍を言向けて、凱旋したる神伊

奘諾大神は、上瀨は瀨速し、下瀨は瀨弱しと詔り玉ひ、初めて中瀨に降潛きて、美はしき身魂を滌ぎ、選り分け各々の司の神を定め給へり。

大國彦を八十禍津日神に命じ、美山別、國玉姫、廣國別、廣國姫をして、八十禍津日神の神業を分掌せしめ給ひ、次に淤藤山津見をして大禍津日神に任じ、志藝山津見、竹島彦、鷹取別、中依別をして、各その神業を分掌せしめ給ひぬ。大禍津日神は惡鬼邪靈を監督し或は誅伐を加ふる神となり、八十禍津日神も亦各地に分遣されて、小區域の禍津神を監督し、誅伐を加ふる神となりぬ。(詳しき事は言靈解を讀めば解ります)

次に豊國姫を神直日神に任じ、月照彦神、足眞彦神、少彦名神、弘子彦神をして其の神業を分擔せしめ給ひ、國直姫をして大直日神に任じ、高照姫、眞澄姫、純世姫、龍世姫、言靈姫をして其の神業を分掌せしめ給ふ。何れも皆靈的主宰の神に坐しける。

次に木の花姫神、日の出神をして、伊豆能賣神に任じ給ひぬ。(言靈解を見るべし) 總て神人の身魂は、其の靈能の活用如何に依りて優劣の差別あり。之を上

中下の三段に大別され、猶も細別をすれば、正神界も邪神界も各百八十一の階級となる。邪神は常に正神を壓迫し誑惑し、邪道に陥れむと晝夜間斷なく隙を窺ひつつあるものにして、第三段の身魂の垢を洗はむが爲に、底津綿津見神、底筒之男神を任じ給ひ、第二段の身魂を洗ひ清むる爲に、中津綿津見神、中筒之男神を任じ給ひ、第一段の身魂を洗ひ清むる爲に、上津綿津見神、上筒之男神を任じ給へり。何れも瑞の御魂の活動にして、大和田原の汐となりて世界を還り、雨となり、雪となりて、物質界の穢れをも洗ひ清め生氣を與ふる御職掌なり。

斯くの如く分掌の神を任せ給ひ、「いやはて」に左の御眼を洗ひ給ひて、天照大御神を生ませ給ひ、太陽界の主宰となし給ふ。次に右の御眼を洗ひ給ひて、月讀命を生み給ひ、太陰界の主宰となし給ひ、「いやはて」に陰陽の火水を放ち給ひて、豊國姫の身魂を神格化して神素盞鳴尊と名づけ、大海原の司に任じ給ふ。

豊國姫命より神格化せる神素盞鳴尊の又の御名を本卷にては國大立命といふ。國大立命は四魂を分ちて、月照彦神、足眞彦神、少彦名神、弘子彦神となり、現、神、幽の三界に跨りて神業に参加し給ひつつあることは前卷既に述べたる所なり。

(大正一一・二・二六 舊一・三〇 外山豊二録)

第二篇 楔身の段

第二十七章 言靈解一(四五七)

皇典美曾岐の段

「是を以て伊邪那岐大神宣り玉はく
是を以て」とは前の「黄泉大神と事戸を渡し玉ひ」
云々の御本文を受けて謂へ
る言葉であります。

【イザナギ】の命の御名義は、大本言靈即ち體より解釋する時は、【イ】は氣なり、【ザ】は誘ふなり、【ナ】は雙ことなり、【ギ】は火にして即ち日の神、陽神なり。【イザナミ】の【ミ】は水にして陰神なり、所謂氣誘雙神と云ふ御名であつて、天地の陰陽雙びて運り、人の息雙びて出入の呼吸をなす、故に呼吸は兩神在すの宮である。息胞衣の内に初めて吹くを號けて天浮橋と云ふ。その意義は【ア】は自らと曰ふこと、【メ】は回ることである。【ウキ】はウキ、ウクと活用き、【ハシ】はハシ、【ハス】と活用く詞である。【ウ】は水にしてニ也。【ハ】は水にして横をなす、即ちニである。水火自然に廻り、浮發して縱横を爲すを天浮橋と云ふ。大本神諭に「此の大本は世界の大橋、この橋渡らねば世界の事は判らぬぞよ。經と緯との守護で世を開くぞよ。日の大神月の神様は、此世の御先祖様であるぞよ」とあるは此の意味に外ならぬのであります。

天地及び人間の初めて氣を發く、之を二神天浮橋に立ちてと云ふのである。孕みて胎内に初めて動くは、天浮橋であり綾の大橋である。是の如く天地の氣吹き吹き、人の息吹き吹きて、其末濡りて露の如き玉を爲す、是れ鹽累積成る島であ

る。水火は【シホ】であり、【シマ】の【シ】は水なり、【マ】は圓かと云ふ事
で、水火累積て水圓を成し、息の濡をなす、その息自づと凝り固まる、之を淤能
碁呂島と云ふのである。要するに伊邪那岐、伊邪那美二神は、地球を修理固成し、
以て生成化々止まざるの御神徳を保有し、且之を發揮し、萬有の根元を生み玉ふ
大神である。併し一旦黄泉國の神と降らせ玉へる時の伊邪那美の大神は、終に一
日に千人を殺さむ、と申し玉ふに立到つたのであります。更に日本言靈學の用よ
り二神の神名を解釋すれば、伊邪那岐命は萬有の基礎となり土臺となり、大金剛
力を發揮して修理固成の神業を成就し、天津神の心を奉體して大地を保ち、萬能
萬徳兼備し、の根元を定め、永遠無窮に活き徹し、天津御祖の眞となり、善道に
誘ふ火水様である。次に伊邪那美命は、三元を統べ體の根元を爲し、身體地球の
基臺となり玉となりて暗黒界を照し玉ふ、太陰の活用ある神様であつて、月の大
神様であり、瑞の御靈である。斯の如き尊貴圓滿仁慈の神も、黄泉國に神去りま
す時は、やむを得ずして體主靈從の神と化生し給ふのである。此處には御本文に
より男神のみの御活動と解釋し奉るのであります。

吾は厭醜惡穢國に到りて在りけり」

【ア】の言靈は天也、海也、自然也、也、七十五聲の總名也、無にして有也、

空中の水靈也。これを以て考ふれば、吾とは宇宙萬有一切の代名詞である。この宇宙萬有一切の上に醜惡汚穢充滿して、實に黄泉國の状態に立到つたと曰ふ事である。現代は實に天も地も其他一切の事物は皆「イナシコメシコメキタナキ」國と成り果てて居るのである。政治も外交も教育も實業も道義も皆悉く廢れて、神の守り玉ふてふ天地なるを疑ふばかりになつて來て居るのであります。

故に吾は御身の被爲たと詔りたまひて、筑紫の日向の立花の小門の阿波岐原に到りまして美曾岐被ひたまひき」

大々的宇宙及び國家の修被を斷行せむと詔りたまうたのである。御神諭に、三千世界の洗濯、大掃除を天の御三體の大神の御命令に依りて、良の金神が立替立直しを致す世になりたぞよ」と示されたるは、即ち美曾岐の大神事であります。

【ツ】は實相眞如決斷力也、照應力也。

- 【ク】は暗くらやみの交代かうたい也、三大曆さんだいれきの本元ほんげん也、深奥しんおうの極きよく也。
- 【シ】は世よの現在げんざい也、皇國くわうこくの北極ほくきよく也、天橋立あまのはしだて也。
- 【ノ】は天賦てんぷの儘まま也、産靈子むすびのこ也、無障さはりなき也。
- 【ヒ】は顯幽貫徹けんいうくわんでつ也、無狂くるひなき也、本末一貫ほんまついつくわん也。
- 【ム】は押し定おさだむ也、國くにの億兆おくてうを成なす也、眞身まみの結むすび也。
- 【カ】は晴はれ見みる也、際立きはだち變かはる也、光ひかり暉かがやく也。
- 【ノ】は續つづく言ことば也。
- 【タ】は對照力たいせうりよく也、平均力へいきんりよく也、足たり餘あまる也。
- 【チ】は溢あふれ極きはまる也、造化ざうくわに伴ともふ也、親おやの位くらゐ也。
- 【ハ】は太陽たいやうの材料ざいれう也、天體てんたいを保たもつ也、春はる也。
- 【ナ】は火水ひみづ也、眞空しんくうの全體ぜんたい也、成なり調ととのふ也、水素すゐその全體ぜんたい也。
- 【ア】は大本初頭おほもとはじめ也、大母公だいぼこう也、圓象入眼ゑんしやうにぶがん也。
- 【ハ】は延のび開ひらく也、天あめの色いろ也、齒は也、葉は也。
- 【ギ】は靈魂れいこんの本相ほんさう也、天津御祖あまつみおやの眞しん也、循環無端じゆんかんむたん也。

【八】は切斷力也、フアの結也、邊際を見る也。

【ラ】は高皇産靈也、本末打合ふ也、無量壽の基也。

以上の言靈を約むる時は、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原は、實相眞如の顯彰にして一切の事物を照應し、決斷力を具有して、暗黒界を照變し、神政を樹立し、御倉棚の神なる宇宙經綸の三大曆即ち恆天曆、太陽曆、太陰曆の大本元を極めて、深甚玄妙の極を闡明し、現在の世を濟する爲に天橋立なる皇國の北極に天賦自然の産靈子を生成化育して、障壁なく狂ひなく顯幽貫徹、本末一貫、以て萬象を押定め、眞身の結に依りて國の億兆を悉皆完成し、光輝以て神徳を發揚し、青天白日の瑞祥を照して、宇宙一切の大變革を最も迅速に敢行し給ひ、上下一致、顯幽一本、平均力を以て、善惡美醜清濁を對照し、全智全能にして、親たるの位を保ち、溢れ極まる靈力を以て造化に伴ひ、太陽に等しき稜威を顯彰して天體を保有し、春の長閑なる松の代を改立し、眞空の全體たる靈魂球を涵養し、水素の本元たる月の本能を照して、宇宙一切を完成調理し、萬有を結びて一と成し、天地を祭り人道を守り、國家を平けく安らけく治め幸はひ、男性的機能を發揮し、

大仁大慈の神心を照し、造化の機關たる位を保ち、元の美はしき神世に突き戻し、
圓象入眼、總ての靈と體に生命眼目を與へ、大母公として世の大本となり、初頭
と現はれ、無限に延び無極に開き、蒼天の色の如く清く、且つ高く廣く、生成化
育の徳を上下の末葉に及ぼし、天津御祖神の眞を體得し、循環極まりなく、各自
靈魂の本相を研ぎ盡し、妖邪を切斷し世の邊際を見極め、言靈力を以て破邪顯正
し、本末相對して世を清め洗ひ、一切無量壽たるの根基を達成すべき靈系高皇産
靈の神業を大成する靈場と曰ふことである。現代の世に於て、斯の如き靈場たる
神界の經綸地が、果して日本國に存在するであらう乎。若し存在せりとせば、其
地點は何國の何れの方面であらう乎、大本人と云はず、日本人と云はず、世界の
人類は、急ぎ探究すべき問題であらうと思ふのであります。

次に美曾岐の言靈を解釋すれば、

【三】は水也、太陰也、充也、實也、道也、玉と成る也。

【ソ】は風の種也、身の衣服也、を包裹居る也。

【ギ】は活貫く也、白く成る也、色を失ふ也、萬に渡る也。

要するに、所在汚穢を清め塵埃を拂ひ、風と水との靈德を發揮して、清淨無垢の神世を玉成し、虚榮虚飾を去り、萬事に亘りて充實し、活氣凜々たる神威を顯彰し、金甌無缺の神政を施行して、宇内一點の妖邪を留めざる大修祓の大神事を云ふのである。現代の趨勢は、世界一般に美曾岐の大神事を嚴修すべき時運に遭遇せる事を忘れては成らぬ。大本の目的も亦、この天下の美曾岐を斷行するに在るのであります。

故投棄つる御杖に成りませる神の御名は衝立船戸神[□]

御杖の言靈、〔ツ〕は大金剛力決斷力で玉の藏であり、〔エ〕は中腹に成就し行き進み玉を保つことであつて、即ち神の御力添へをする役目であります。然るに神は、この杖までも投げ棄て玉うたと云ふことは、よくも汚れたものであります。現代で曰へば大政を補弼する大官のことであります。

衝立船戸神の名義は、上と下との中に衝立ち遮り、下情を上を達せしめず、上の意を下に知らしめざる近親の神と云ふことである。現代は何事にも總てこの神様が遮り玉ふ世の中でありませぬ。杖とも柱とも成るべき守護神が、却て力に成ら

ず邪魔になると曰ふので、伊邪那岐大神は、第一着に御杖を投げ棄て賜うたのであります。

次に投棄する御帯に成りませる神の御名は道の長乳齒の神[□]御帯の言靈は、【才】は靈魂、精神を治め修むることで、亦神人合一の連結帯である。【比】は光華明彩、照徹六合の意である。即ち顯界の政を爲すに當りては、必ず精神的に天地人道を説き諭し、以て億兆をして歸依せしめ、顯界の政治に悦服歸順せしめねば成らぬのである。是が所謂神の御帯であります。神は此御帯も穢れて使へなく成つたから投げ棄て玉うたのであります。

道の長乳齒の意義は、天理人道を説く宗教家、教育家、倫理學者、敬神尊皇愛國を唱ふる神道家、皇道宣傳者、演説説教家等の大家と曰ふ事である。この帯を投棄して給ふと云ふ事は、總ての教育、宗教、倫理の學説を根本より革正し給ふと曰ふ事であります。

(大正九・一・一五 講演筆録 谷村眞友)

第二十八章 言靈解二（四五八）

□次に投棄つる御裳に成りませる神の御名は、時置師神^{ときおかしのかみ}。御裳の言靈、【モ】は下である。平民教育の意味であり、社交的言辭の意である。

時置師神は、小説や演劇や歌舞や藝技や俗歌等の頭株と言ふ事である。是も根本的に革正さると言ふ事で、御裳に成る神を投棄て玉ふと言ふ事でありませす。

□次に投棄つる御衣に成りませる神の御名は、和豆良比能宇斯神^{わづらひのうしのかみ}。

御衣の言靈は、身の家と云ふ事である。人の肉體は靈魂の住所であり御衣であります。薬浴防棄避の五種の醫術も、皇國醫法に適せず、治病の效なく、却て害毒となるを以て、現代の醫法を廢し玉ふと云ふ事で、御衣を投棄て玉ふと曰ふ事である。【ワヅラヒノウシ】神とは、病み煩ひを癒す神と曰ふ事である。凡て醫術薬法の、皇國の神法に背反せる事を看破して、根本的革正し玉ふために、御衣を投棄て玉うたのであります。現代の西洋醫學も漢法醫も、之を廢して神國固

有の醫學を採用せなくては成らぬやうに成つて來て居るのと同じ事であります。

次に投げ棄つる御禪に成りませる神の御名は道俣神[□]

御禪の言靈は、走り驅り廻ると云ふ事で、要するに交通機關や通信機關を指し

て「八力マ」と言ふのである。今日の汽車は、危車となり鬼車となり、電車、自

動車、汽船、飛行船、郵便、電信、電話等も大に改良すべき必要がある。要する

に從來の交通や通信機關に對して根本的革正の要あり、故に一旦現代の方法を大

變更すべき事を、御禪を投棄つると曰ふのであります。

道俣神とは、鐵道や航路や道路の神と云ふ事である、交通と通信機關の四通八

達せる状況を指して道俣と云ふのである。日本にすれば、現今の鐵道や道路や郵

便や電信なぞも、大々的に改良せなくては成らぬやうになつて居る。是を擴張し

以て國民の便利を計らねばならぬ今日の現状であるのと同じ事であります。

次に投げ棄つる御冠に成りませる神の御名は飽咋之宇斯神[□]

右の言靈は、三公とか、公卿とか、殿上人とか、神官とか言ふ意味である。今

日の世で曰へば、華族とか、神官とか、國務大臣とか、高等官とか曰ふ意味であ

る。是も斷乎として改善すると言ふ事が御冠を投げ棄つると言ふ事である。現代

は實に一大改革を必要とする時期ではありますまいか。

□次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の御名は、奥疎神、次に奥津那藝佐毘古神、次に奥津甲斐辨羅神

左の御手と言ふことは、左は上位であり官である。奥疎神は陸軍である。奥津

那藝佐毘古神は海軍である。奥津甲斐辨羅神は陸海軍の武器である。従來の軍法

戦術では到底駄目であるから、大々の改良を加へ、神軍の兵法に依り、細矛千足

國の實を擧ぐ可く執り行う爲に、左の御手の手纏を投棄て玉ふのであります。

□次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の御名は、邊疎神、次に邊津那

藝佐毘古神、次に邊津甲斐辨羅神

右は下であり民であり地である。邊疎神は農業である。邊津那藝佐毘古神は工

商業である。邊津甲斐辨羅神は農工商に使用すべき機械器具である。是も一大改

良を要するを以て、従前の方針を變革する事を、右の御手の手纏に成りませる神

を、投げ棄て玉ふと言ふのであります。

「右の件、船戸神より以下邊津甲斐辨羅神以前、十二神は身に着ける物を脱ぎ棄て玉ひしに由りて生りませる神なり」

右の十二神は、黄泉國如す醜穢き國と化り果てたるを、大神の大英斷に由りて、大々の改革を實行され、以て宇宙大修祓の端緒を開き給うた大神業であります。

「於是上瀨は瀨速し、下瀨は瀨弱しと詔ごちたまひて、初めて中瀨に降潛きて滌ぎたまふ時に成りませる神の名は、八十禍津日神、次に大禍津日神、此二神は、其の穢き繁國に到りましし時の污垢に因りて成りませる神也」

上瀨とは現代の所謂上流社會であり、下瀨は下流社會である。上流社會は權力財力を恃みて容易に體主靈從の醜行爲を改めず、却て神諭に極力反抗するの意を「上瀨は瀨速し」と言ふのである。下流は權力も財力もなく、なにほど神諭を實行せむとするも、其日の生活に苦しみ且つ權力の壓迫を恐れて、一つも改革の神業を實行するの實力なし。故に「下瀨は瀨弱し」と言ふのである。そこで大神は中瀨なる中流社會に降り潛みて、世界大修祓、大改革の神業を遂行したまふのである。中流なれば今日の衣食に窮せず、且つ相當の學力と理解とを有し、國家の

中堅と成る可き實力を具有するを以て、神明は中流社會の眞人の身魂に宿りて、一大神業を開始されたのであります。

大神が宇宙一切の醜穢を祓除し玉うた時に出現せる神は、八十禍津日神、つぎに大禍津日神の二神であります。人は宇宙の縮圖である。世界も人體も皆同一の型に出来て居るのであるから茲に宇宙と云はず、伊邪那岐大神の一身上に譬へて示されたのである。故に瑞月亦之を人身上より略解するを以て便利と思ふのであります。

八十禍津神は、吾人の身外に在りて吾人の進路を妨げ且つ大々の反對行動を取り、以て自己を利せむとするの惡魔である。現に大本に對して種々の中傷讒誣を敢へてし、且つ書物を發行して奇利を占めむとする三文蚊土の如きは、所謂八十禍津神であります。之を國家の上から言ふ時は、排日とか排貨とか敵國陸海軍の襲來とかに當るのである。この八十禍津神を監督し、制御し、懲戒し玉ふ神を八十禍津日神といふのであります。日の字が加はると加はらざるとに依つて、警官と罪人との様に位置が替るのであります。大禍津神は吾人の身魂内に潛入して、

悪事醜行を爲さしめむとする悪靈邪魂である。色に沈溺し、酒に荒み、不善非行を爲すは皆大禍津神の所爲であります。

之を國家の上に譬へる時は、危険思想、反國家主義、政府顛覆、内亂等の陰謀を爲す非國民の潜在し、且つ體主靈從同様の政治に改めむとする、惡逆無道の人面獸心的人物の居住して居る事である。之を討伐し懲戒し警告するのは大禍津日神であります。

正 八十禍津日神 大禍津日神
邪 八十禍津神 大禍津神

(大正九・一・一五 講演筆録 外山豊二)

第二十九章 言靈解三 (四五九)

□ 次に其の禍を直さむと爲て成りませる神の御名は、神直日神、次に大直日神、次に伊都能賣神□

神直日神は宇宙主宰の神の直靈魂にして、大直日神は天帝の靈魂の分賦たる吾人の靈魂をして完全無疵たらしめむとする直靈である。所謂罪科を未萌に防ぎ至靈にして、大祓の祝詞に、之を氣吹戸主神と謂すのである。又八十曲津日神、大曲津日神は、大祓祝詞に、之を瀨織津姫神と謂ひ、伊都能賣神を速秋津彦神、速秋津姫神と謂ひ、神素盞鳴神を速佐須良姫神と謂すのである。以上の四柱の神様を總稱して祓戸の大神と謂ふのであります。

即ち伊邪那岐命が黄泉津國の汚穢混濁を拂滌せむとして、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に、楔身祓ひの神業を修し玉ひし時に生れませる大神なるは前陳の通りである。

大曲津日神は、大神の神勅を奉じて邪神を誅征し討伐し玉ふ大首領の任に當る神であつて八十曲津日神を指揮し使役し玉ふ神である。之を現界に移寫する時は、大君の勅命を畏みて征途に上る總司令官の役目である。以下の將卒は、即ち八十

曲津日神様であります。猶ほ更に直日（直靈）と曲靈について左に大要を示して置きます。

直靈ちよくれい

直日の靈は荒魂の中にも、和魂の中にも、奇魂の中にも、幸魂の中にも含有する。四魂中各自極めて美はしく、至つて細しき靈の名稱にして、善々美々なるものを謂ふ。

直靈は過失を未萌に消滅せしむるの能力あり。四魂各自用ゐて直は其中にあり、之れ即ち直靈なり、神典之を神直日大直日と云ふ。始祖の所名なり。

直靈は平時に現れず、事に當つて發動す。

神直日とは、天帝の本靈たる四魂に具有せる直靈魂を謂ふ。

大直日とは、吾人上帝より賦與せられたる吾魂の中に具有せる直靈魂を謂ふ。

< 圖表省略 >

曲靈きよくれい

曲靈きよくれいは神典しんでん之これを八十曲津神やそまがつかみ、大曲津神おほまがつかみと謂いふ。

八十曲津神やそまがつかみは吾人ごじんの靈魂れいこん以外いぐわいに在ありて災禍わざはひを爲なす曲靈きよくれいなり。大曲津神おほまがつかみは吾人ごじんの

靈魂れいこん中ちゆうに潛ひそみて災禍さいくわを爲なす曲靈きよくれいなり。

曲靈きよくれいなるものは悉ことごとく罪惡ざいあく汚穢をゑより湧出ゆつしゆつするものなり。

曲靈きよくれい、荒魂あらみたまを亂みだるときは爭あらそひとなり、和魂にぎみたまを亂みだるときは惡あくとなり、幸魂さちみたまを亂みだるときは逆さかとなり、奇魂くしみたまを亂みだるときは狂きやうとなる。

曲靈きよくれいは體たいを重おもんじ靈れいを輕かるんずるに因よりて成なり出いづる惡靈あくれいなり。

曲靈きよくれいは世俗せぞくの所謂いはゆる惡魔あくまなり、邪神じゃしんなり、妖魅えうみなり、探女さぐめなり。

< 圖表省略 >

神明しんめいの戒律かいりつ

省、恥、悔、畏、覺の五情は靈魂中に含有す、即ち神明の戒律なり。末世の無識、妄に戒律を作り、後學を眩惑し、知識の開発を妨害す、神府の罪奴と謂ふ可し。

< 圖表省略 >

釋迦の十戒と謂ひ、基督の十戒と謂ひ、其他の學者神道者の唱導する戒律は、悉皆淺薄偏狹、頑迷固執にして社會の發達、人智の開明に大害を爲すものなり。

人は天帝の御子なり、神子たるもの、眞の父たり母たる上帝より賦與せられたる至明至聖なる戒律を度外視し、人の智慮に依つて作爲したる不完全なる戒律を楯と頼み、以て心を清め徳を行ひ、向上し發展し、立命せむとするは愚の骨頂にして、恰も木に縁つて魚を求めむとするが如し。

省る。この戒律を失ひたる時は、直靈直に曲靈に變ず。

恥る。この戒律を失ひたる時は、荒魂直に争魂に變ず。

悔る。この戒律を失ひたる時は、和魂直に惡魂に變ず。

畏る。この戒律を失ひたる時は、幸魂直に逆魂に變ず。

覺る。この戒律を失ひたる時は、奇魂直に狂魂に變ず。

直靈五情曲靈の解

< 圖表省略 >

荒魂は勇なり、	勇の用は進なり	果なり	奮なり	勉なり	克なり。
和魂は親なり、	親の用は平なり	修なり	齋なり	治なり	交なり。
幸魂は愛なり、	愛の用は益なり	造なり	生なり	化なり	育なり。
奇魂は智なり、	智の用は巧なり	感なり	察なり	覺なり	悟なり。

< 圖表省略 >

義

義は四魂各之れ有り、而して裁、制、斷、割を主る也。

之れを四魂しこんに配はいせば裁さいは智ちなり、制せいは親しんなり、斷だんは勇ゆうなり、割かつは愛あいなり。
裁さいは彌縫補綴びほうほてつの意いを兼かね、制せいは政令法度せいれいほふどの意いを兼かね、斷だんは果毅敢爲くわきかんゐの意いを兼かね、
割かつは忘身殉難ぼうしんじゆんなんの意いを兼かぬ。

政せいは正せいなり、令れいは理りなり、法ほふは公こうなり、度どは同どうなり。

過あやまちを悔くい改あらたむるは義ぎなり。

< 圖表省略 >

欲よく

欲よくは四魂しこんより出いでて而しかして義ぎを併立へいりつす。故ゆゑに義ぎの裁制斷割さいせいだんかつに對たいして、名めい、位ゐ、
壽じゆ、富ふうとなる。名めいは美びを欲ほつし、位ゐは高かうを欲ほつし、壽じゆは長ちやうを欲ほつし、富ふうは大だいを欲ほつす。

< 圖表省略 >

< 圖表省略 >

經魂けいこんたる荒和二魂くわうわにこんの主宰しゆさいする神魂しんこんを嚴いづの御魂みたまと云いひ、緯魂ゐこんたる奇幸二魂きかうにこんの主宰しゆさい

する神魂を瑞の御魂と云ひ、嚴瑞合一したる至靈を伊都能賣御魂と云ふのである。

(大正九・一・一五 講演筆録 谷村眞友)

第三〇章 言靈解四(四六〇)

次に水底に滌ぎたまふ時に成りませる神の御名は、底津綿津見神、次に中筒之男命、中に滌ぎたまふ時に成りませる神の御名は、中津綿津見神、次に上筒之男命、水の上に滌ぎたまふ時に成りませる神の御名は、上津綿津見神、次に上筒之男命、此三柱の綿津見神は阿曇の連等が祖神ともち齋く神なり、故阿曇の連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱の神は墨江の三前のおほ大神なり

【三】は形體具足成就也。充實也。天真也。道の大本也。肉體玉也。

【ナ】は萬を兼統る也。水素の全體也。思兼神也。顯を以て幽を知る也。行き届き居る也。

【ソ】は心の海也。金剛空也。臍也。を包み居る也。無限清澄也。

【コ】は天津誠の精髓也。全く要むる也。一切の眞元と成る也。親の元素也。劣り負くる也。

要するに水底は、海の底とか河の底、池の底なぞで、水の集合したる場所である。水は總てのものを養ひ育て、生成の功を爲し、且つ又一切の汚物と混交して少しも厭はず、萬物の汚穢を洗滌し、以て清淨ならしむるものは水ばかりである。また水は低きに向つて流れ、凹所に集まり、方圓の器に従ひ、以て利用厚生の活用を爲すもので、宇宙間に於て最も重要な神器であります。火の熱にあへば、蒸發して天に昇り、雲雨となりて地上一切を哺育す。斯の如き活用ある神靈を稱へて、水の御魂と申上げるのである。

【ミ】は形體具足成就して、一點の空隙なく、隨所に充滿し、天真の儘にして少しも争はず、生成化育の大本をなし、人身を養ひ育て、玉と成るの特性を保ち、

【ナ】は萬物を統御し、有形を以て無形の神界を探知し、思兼の神となりて世を開き治め、上中下共に完全に行き届き、【ソ】は精神の海となりて神智妙能を發揮し、臍下丹田よく整ひて事物に動ぜず、限りなく澄み切りて一片の野望なく、利己的の行動を爲さず、の尊嚴を發揮し、【コ】は天津誠の眞理を顯彰して親たるの位を惟神に保ち、生類一切の眞元と成りて、全地球を要むるの神力靈能を具有するも、和光同塵、以て時の致るを待ちて、天にのぼる蛟龍の如く、時非なる時は努めて自己の靈能を隱伏し、劣者愚者弱者にも、譲りて下位に立ち、寸毫も心意に介せざる大眞人の潛居せる低所を指して水底と云ふのであります。ア、海よりも深く山よりも高き、水の御魂の一日も速く出現して、無明常暗の天地を洗滌し、以て天國極樂淨土の出現せむ事を待つ間の長き鶴の首、龜も所を得て水底より浮び上るの祥瑞を希求するの時代であります。

綿津見の神の言靈解

【ワ】は輪にして筒の體である。紋理の起りである。親子である。世を知り初むる言靈である。物の起りにして人の起りである。締寄する言靈である。順々に世を保つ言靈である。子の世にして親の位を踐む言靈であります。

【タ】は對照力である。東は西に對し、南は北に對し、天は地に對し、生は死に對する如きを對照力と云ふのであります。

【ツ】は大金剛力である。強く續き、實相眞如、之を【ツ】と言ふのである。又應照應對力對偶力であり、産靈の大元であり、平均力の極であり、靈々神々赫々として間斷なく、大造化の力にして、機臨の大元であり、速力の極であります。

【ミ】は水であり、身であり、充ち滿つるの意にして、惟神大道の【ミチ】であります。

以上の四言靈を以て思考する時は、實に無限の神力を具備し、圓滿充全にして、天下の妖邪神を一掃し、所在罪惡醜穢を洗滌し玉ふ威德兼備の勇猛なる五六七の大神の御活動ある神である事が分明するのであります。

筒之男命

【ツツノオ】の言靈は、大金剛力を具有し、以て正邪理非を決斷し、水の元質を發揮して、一切の惡事を洗ひ清め、靈主體從日本魂の身魂に、復歸せしめ玉ふてふ神名であります。茲に底中上の神と命とが區別して載せられて在るのは、大に意味のある事である。古典は靈を稱して神と言ひ、體を稱して命と言ふ。神とは幽體、隱身、即ち【カミ】であつて、命とは體異、體別、即ち身殊の意味である。後世の古學を研究するもの、無智蒙昧にして、古義を知らずに神と命を混用し、幽顯を同稱するが故に、古典の眞義は何時まで研究しても、分つて來ないのであります。又底とは最も下級の神界及び社會であり、中とは中流の神界及び社會であり、上とは上流の神界及び社會を指すのである。故に綿津見神は底中上の三段に分れて、神界の大革正を斷行し玉ひ、筒之男命は、同じく三段に分れて、現社會の大革正を斷行し玉ふ御神事であります。大本神諭に「神の世と人の世との立替立直しを致すぞよ」とあり、亦「神、佛儒人民なぞの身魂の建替建直しを

致す時節が参りたから、良の金神大國常立尊が、出口の神と現れて、天の御三體の大神の御命令通りに、大洗濯大掃除を致して、松の世五六七の結構な世にして上中下三段の身魂が揃うて、三千世界を神國に致すぞよ』と示されてあるのも、斯の三柱の神と、命との御活動に外ならぬのであります。

現代の如く世界の隅々まで面白からぬ思想が勃興し、人心は日に月に悪化し、暴動や爆弾騒ぎが相次いで起り天下は實に亂麻の如き状態である。斯かる醜めき穢き國になり果てたる以上は、どうしても楔身被の大々の御神業が開始されなくては、到底人間の智力、學力、武力などで治めると云ふことは不可能であります。八十曲津神、大曲津神の征服は絶対無限の金剛力を具有し玉ふ神劍の發動、即ち神界の大被行事に待たなくば、障子一枚儘ならぬ眼を有て居る如うな人間が何程焦慮して見た所で、百日の説法屁一つの力も現れないのである。是はどうしても神界の一大權威を以て大被を遂行され、日本國體の崇高至嚴を根本的に顯彰すべき時機であつて、實に古今一轍の神典の御遺訓の、絶対的の神書なるに驚くのであります。

神界の權威なる、宇宙の大修被は人間としては不可抗力である。由來天災地妖の如きは、人間の左右し得るもので無いと、現代の物質本能主義の學者や世俗は信じて居るが、併しその實際に於ては、天災地妖と人事とは、極めて密接の關係が有るのである。故に國家能く治平なる時は、天上地上俱に平穩無事にして、上下萬民鼓腹擊壤の怡樂を享くるのは天理である。地上二十億の生民は、皆悉く御皇祖の神の御實體なる、大地に蕃殖するものであるが、この人間なるものは、地上を經營すべき本能を稟け得て生長するのである。然るに、萬物の靈長とまで稱ふる人間が吾の天職をも知らず、法則をも究めずして、日夜橫暴無法なる醜行汚爲を敢行しつつあるは、實に禽獸と何等擇ぶ所は無いのである。全體宇宙は天之御中主神の御精靈體なる以上は、地上の生民等が橫暴無法の行動によつて、精神界の順調も、亦亂れざるを得ない次第である。要するに天災地妖の原因結果は、所謂天に唾して自己の顔面に被るのと同である。人間を始め動物や植物が、天賦の生命を保つ能はずして、天死し或は病災病毒の爲に、變死し枯朽する其の根本の原因は、要するに天則に違反し、矛盾せる國家經綸の結果にして、政弊腐敗

の表徴である。現時の如く天下擧つて人生の天職を忘却し、天賦の衣食を爭奪するが爲に營々たるが如き、國家の經綸は實に矛盾背理の極である。皇國は世界を道義的に統一すべき、神明の國であつて、決して體主靈從的の經綸の如く、征服とか占領とかの、無法橫暴を爲す事を許さぬ神國である。皇典古事記の斯の御遺訓に由り奉りて、國政を革新し、以て皇道宣揚の基礎を確立し、以て皇祖天照大神の御神勅を仰ぎ、以て世界經綸の發展に着手すべきものなる事は、良の金神國常立尊の終始一貫せる御神示であります。

(大正九・一・一五 講演筆録 谷村眞友)

第三一章 言靈解五(四六一)

☐ 墨江の三前の大神 ☐

【スミノエノミマへ】の言靈を解説すると、

【ス】は、眞の中心也、本末を一轍に貫ぬく也、玉也、八咫に伸び極まる也、出入の息也、不至所無く不爲所無き也、天球中の一切也、八極を統ぶる也、數の限り住む也、安息の色也、清澄也、自由自在也、素の儘也。

【ミ】は、瑞也、滿也、水也、體也。

【ノ】は、助辭也。

【エ】は、ヤ行の【エ】にして心の結晶點也、集り來る也。胞衣也、悦び合ふ也、撰る也、大也。

【ノ】は、助辭也。

【ミ】は、三也、天地人の三也、太陰也、屈伸自在也、圓也、人の住所也。

【マ】は、一の位に當る也、一の此世に出る也、全備也、圓也、人の住所也。

【ヘ】は、の堅庭也、動き進む義也、部也、邊也、高天原の内にを見る也。

以上の言靈を總括する時は、明皎々たる八咫の神鏡の如く澄極まり、顯幽を透徹し、眞中眞心の位に坐し、至らざる所無く、爲さざる所無く、清き泉となり、一切の本末を明かにし現體を完全に治め、萬物發育の本源となり、以て邪を退け

正を撰み用ゐ、温厚圓満にして月神の如く、各自の天賦を顯彰し、身魂の位を明かにし、一の位を世に照し活動自在にして、地の高天原に八百萬の神を集へ、以てを守る三柱の大神と曰ふ事である。故に三柱の大神の御活動ある時は、風水火の大三災も無く、飢病戦の小三災も跡を絶ち、天祥地瑞重ねて來り、所謂松の世五六七の世、天國淨土を地上に現出して、終に天照大神、月讀命、須佐之男命の三柱の貴の御子生れ給ひ、日、地、月各自其位に立ちて、全大宇宙を平けく安らかに治め給ふに至るのであります。故に神の御子と生れ天地經綸の司宰者として生れ出でたる人間は、一日も早く片時も速に、各自に身魂を研き清め、以て神人合一の境地に入り、宇内大襍袂の御神業に奉仕せなくては、人間と生れた效能が無く成るのであります。

宇都志日金拆命

宇都志日金拆命は、綿津見神の御子であつて、阿曇の連は其の子孫である。宇

都志日金拆命の名義を言靈に照して解釋すると、

【ウ】は、三世を了達するなり、艮の活動也。

【ツ】は、大造化の極力也。平均力也、五六七の活動也。

【シ】は、世の現在也、基也、臺也、龍神の活動也。

【ヒ】は、顯幽悉く貫徹する也、本末一貫也、太陽神活動の本元也。

【カ】は、光り輝く也、弘り極まる也、禁闕要の大神、思兼神の活動也。

【ナ】は、智能完備也、萬物を兼結ぶ也、直靈主の活動也。

【サ】は、水質也、水の精也、昇り極まる也、瑞の神靈の活動也。

【ク】は、明暗の燒點也、成り付く言靈也、國常立の活動也。

以上の言靈活用に依り、命の御名義を總括する時は、知識明達にして大造化の極力を發揮し、天下の不安不穩を平定し、理想世界を樹立するの基礎となり、鎮臺となりて、顯幽を悉皆達觀し、一大眞理に貫徹して一切事物の本末を糺明し、邪を破り正を顯はし無限絶對無始無終の神明の光徳を宇内に輝かし、皇徳を八紘に弘めて止まず、智能具足してよく萬物を兼ね結び合せ國に戰亂なく疾病なく飢

饑なく、暴風なく、洪水の氾濫する事なく、大火の災なく、萬物を洗ひ清めて、
瑞の御靈の心性を發揮し、明暗正邪の燒點に立ちて、能く之を裁斷し、以て天國
淨土を建設するの活用を具備し成就し給ふ御活動の命と曰ふ事である。即ち宇宙
一切は、綿津見神の活動出現に依りて、良の金神、五六七の大神、龍宮の姫神、
太陽神の活動、禁闕要の大神、思兼神、直靈主、稚姫神、月讀神、大國常立神等
の出現活動に據りて、萬有一切は修理固成され清淨無垢の世界と成りて、終に三
貴神を生み給ふ、原動力の位置に在る神と曰ふ意義であります。

阿曇の連

【アヅミノムラジ】の名義は、天之御中主神の靈徳顯はれ出でて、至治泰平の
大本源となり、初頭となり、大母公の仁徳を擴充し、大金剛力を發揮して、大造
化の眞元たる神靈威力を顯彰し、純一實相にして、無色透明天性その儘の位を定
め、萬民を愛護して、月の本能を實現する眞人と曰ふことが、【アヅミ】の活用

である。

【ムラジ】は、億兆を悉く強國不動に結び成して、凡ての暴逆無道を押し鎮め、本末能く親和して、産靈の大道たる惟神の教を克く遵守し、萬民を能く統轄して、國家を富強ならしめ、一朝事あるときは、天津誠の神理を以て、神明鬼神を號令し、使役する神の御柱を稱して、【アヅミ】の【ムラジ】と謂ふのであります。ア、伊邪那岐大神の心つくしの宇宙の大修祓の神功無くして、如何で神人の安息するを得むや。實に現代は大神の美曾岐の大神事の、大々的必要の時機に迫れる事を確信すると共に、國祖國常立尊、國直日主命、稚姫君命の神劍の御發動を期待し奉る次第であります。（完）

瑞の神歌

靈幸ふ神の心を高山の
雲霧分けて照せたきもの

日の光り昔も今も變らねど

東の空にかかる黒雲

この度の神の氣吹の無かりせば

四方の雲霧誰か拂はむ

葦原に生ひ繁りたる仇草を

薙拂ふべき時は來にけり

靈主體從の教を四方に播磨瀉

磯吹く風に世は清まらむ

（大正九・一・一五 講演筆録 外山豊二）

第三篇

邪神征服

第三章 土龍（四六一）

海月くらげなす漂ただよふ國くにを眞細まっぶさに 固かため成なしたる伊邪那岐いざなぎの

皇大神すめおほかみは日ひの國くにの 元津御座もとつみくらに歸かへりまし

神伊邪那美かむいざなみの大神おほかみは 月つきの御國みくにに歸かへりまし

速須佐之男はやすさのをの大神おほかみは 大海原おほうなばらの主つかさ神がみと定さだめ給たまひて

伊都能賣いづのめの神かみの靈みたまの木この之花は姫ひめ 日ひの出で神かみに現うつ界つ、幽かく界り、神かみの界よを

守まもらせ給たまひ天地あめつちは 良よく治をさまりて日月じつげつは

清きよく照てり渡わたり風爽かぜさわやかに 雨あめの順ついで序ほも程ほど々に

榮さかえ三口みの御代よとなり 天津神等あまつかみたち八百萬やほよろづ

國津神等くにつかみたち八百萬やほよろづ 百ももの民草たみくさ千萬ちよろづの

草木獸くさきけものに至いたるまで 惠めぐみの露つゆに潤うるほひて

歡あそぎ喜よろこぶ其聲そのこゑは 高天原たかあまはらに鳴なり響ひびく

芽出度き神世となりにけり
黄泉軍の戦争に

八十の曲津は消え失せて
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
直日に見直し聞き直し

互に睦み親しみて
天の下には争鬪も

疾病も老も死も無くて
治まりけるも束の間の

隙行く駒の此處彼處
荒振る神の曲津見は

八岐大蛇や醜の鬼
醜の狐の曲業の

おこり來りて千早振る
神の御國を攪き亂し

世人の心漸くに
あらぬ方にと傾きて

亂れ騒ぐぞ由々しけれ
恵みも深き皇神の

誠の光に照らされて
常世の國の自在天

大國彦や大國姫の命は畏くも
魂の眞柱樹て直し

任のまにまに黄泉國
常世の國に留まりて

四方の神人守れども
常世の彦や常世姫

神の末裔なるウラル彦　　ウラルの姫は懲りずまに

盤古神王と詐りて　　ウラルの山の麓なる

アーメニヤの野に都を構へ　　探女醜女と諸々の

八十の曲津を引寄せて　　又もや此世を亂し行くこそ是非なけれ。

闇を照す東雲別の宣傳使、東彦は石凝姥神となつて、アルタイ山の麓の原野に

進み行く。ここには可なり大きな川が流れて居る。之を宇智川と謂ふ。此川を渡

るもの、百人の中ほとんど九十九人まで生命をとらるので、一名死の川又は魔

の川と稱へて居る。石凝姥神はアーメニヤに宣傳を試みむとし、アルタイ山を越

え、クスの原野を涉り、アカシの湖、ビワの海を渡つてコーカス山の南麓を通り、

アーメニヤに行かむと行を急ぎける。

石凝姥神は漸う此魔の川の邊に着いた。橋も無ければ舟も無い。加ふるに濁流

が漲つて居る。偶上流より巨大なる材木が續々として流れ來り、川に横たはり、

自然に浮橋が出来た。この時四五の男は川邊に立ち此光景を眺めて話に耽り居た

り。

甲「此川は何時も泥水が流れ通しで、向ふへ渡らうと思へば誰も彼も川の真中で皆生命をとられて仕舞ふのだが、今日は又珍らしい材木が澤山に流れて來よつて、自然の橋が出来たがどうだらう。吾々も三年前にあの橋が出来て、こちらに良い果物があるのを幸ひに漸う渡つたと思へば橋は流れて仕舞ひ、歸る事は出来なくなつて、もう一生川向ふの吾家には歸る事はあるまいと覺悟して居たのに、今日は又如何した事か、橋が架かつた。此機を幸ひに歸らうぢやないか」

乙「まあ待て、一つ思案せなくてはならぬ。大切な、一つより無い生命だ。魔の川の藻屑になつても困るからのう」

丙「何、構ふものかい。戀しい女房や兄弟が心配して待つてゐるから、運を天に任して一つ渡つて見ようかい」

丁「何でも此水上にウラル彦の家來の悪神が居つて、三五教の宣傳使とやらが此川を渡らぬ様に魔神が守護して居ると云ふ事だよ。吾々はウラル教でもなければ、三五教でもない。いろいろの神さまが現はれて、兩方から喧嘩をなさるものだから

ら、吾々の迷惑此の上なしだよ

甲「オー、其三五教で想ひ起したが、ウラル彦の神とやらが、三五教の宣傳使が來たら、引攬へてアルタイ山の砦まで引立てて來い。さうすれば此川に橋を架けてやる。そして澤山の褒美を與るとの事だから、こんな處へ三五教の宣傳使が來よつたら、それこそ引捉まへて一つ手柄をしようぢやないか」

乙「そんな都合の良い事があれば結構だが、吾々の様な寶頭盧型では、到底思ひも寄らぬ事だ。三年も斯うして川を隔てて、棚機さまでさへも年に一度の逢瀬はあるに、永い間川を隔てて互に顔を見乍ら、儘ならぬ憂目に遭うて居る様な不運な者だから、そんな事はまア孫の代位には會ふかも知れぬよ」

斯く語り合ふ處へ何氣なく石凝姥神は、三五教の宣傳歌を歌ひ乍ら進み來る。一同は此聲に耳をすませ頸を傾け、

甲「オー、噂をすれば影とやら、呼ぶより誹れとは此事だ。三五教の宣傳使の歌らしい。オイオイ皆の奴、此川邊の砂の中へ體軀をスツカリ匿して首だけ出して、様子を考へて見ようかい」

一同は灰の様な軽い柔かい砂の中へ、首から下をスツカリ隠して仕舞ひ、俯伏になつて宣傳歌を聞いて居る。石凝姥神は何氣なく此川邊に進み來り、川の面を見れば、澤山の材木が横倒れになつて自然の橋を架けてゐる。

「ホー、神様の御恵と言ふものは結構なものだナア。實は此宇智川は死の川とか魔の川とか謂つて到底渡る事が出来ない。此川を首尾克く渡るものは百人に一人より無いと云ふ事を聞いて居たが、今日は又、何と云ふ都合の好い事だらう。之も全く三五教の神の御守護だ。ア、之を思へば前途の光明は赫々として輝き渡る様な思ひがするワイ。何は兔もあれ廣大無邊の神恩を感謝する爲めに、此處で一つ神言を奏上し、宣傳歌を潔く歌つて渡る事にしよう」

と獨語ち乍ら神言を奏上し始むる。日は西山に傾いて川水に光を投げて居る。祝詞の聲始まると共に、附近の川邊から呻き聲聞え來る不思議さ。

石凝姥神は不圖聲する方を眺むれば、四五の黒い圓いものが何だかウンウンと呻いてゐる。

「ホー、此奴はウラル彦の部下の魔神の所作だナア。大方悪魔が化けてゐるのだらう。何だ西瓜畑の様に……黒い、圓いものがウンウンと呻き出したぞ。どれ一つ正體を見届けてやらうか」

と膝を没する柔かき砂原に足を向け、黒い圓い塊を掴んで見れば、土人の首である。見れば眼をギョロギョロさせ口を開けて、

「ア、ア、お前は三五教の宣傳使か、此川は魔の川と謂つて渡るものは皆生命が無くなるのだ。三五教がある爲めに此土地の人民はどれだけ苦勞するか知れやしない。之から吾々が寄つてたかつて、お前を引捉まへてアルタイ山の魔神の砦に連れて行くから覺悟をせい。斯う橋が架つた様に見えても此橋は化物だ。吾々も向ふ岸に歸りたいのだが土産が無ければ渡る事は出来ぬ。オイ皆の者、出て此奴を引捉まへて呉れ。俺の頭の毛を引掴へよつて離さうとしよらぬので如何する事も出来やしなない」

此聲に四人の頭は俄に砂より「ムツク」と姿を現し、前後左右より石凝姥を取り圍む。

「一同」ヤア、待ちに待つたる三五教の宣傳使、さア尋常に手を廻せ」

「貴様等は一體何だ、砂の中に住居を致す人間か。【オチヨボ】蟲か【ベンベコ】

蟲の様な奴だなア。斯んな馬鹿な態を【すな】。此方は三五教の宣傳使だ。此川

を渡つてアーメニヤに進み、ウラル彦の悪神を平げてお前等の難儀を救うてやる

のだ。心配致【すな】」

「一同」板【すな】も糞もあるものかい、砂の中を自由自在に潜る此方だ。弱い奴

は引捉まへてウラル彦の神に奉り御褒美を頂戴致す積りだが、萬々一お前が手に

負へぬ剛の者なら、俺等は砂の中を潜つて隠れるから、如何する事も出来やせぬ

ぞ」

「何だ、貴様は土龍か、火鼠か、蚯蚓の様な奴だな。砂を潜る、それは面白い。

一遍その藝當を旅の慰めに見せて呉れないか。素直に砂くぐりを致せ。やり損な

ひは【すな】」

「洒落やがるない。貴様こそ素直に手を廻せ、取り損なひを致して後で、後悔

【すな】」

と言ひ乍ら砂を掴んで石凝姥神の兩眼めがけて一生懸命に投げつける。石凝姥神

は目を閉ぎ乍ら思はず一人の男を手放した。五人は一度に立ち上り、

「さア、斯うなつてはもう大丈夫だ。早く此方の申す通りに致さぬか」

石凝姥「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬」

「ヤア、こいつは堪まらぬ。頭が痛い、目が眩む、潜れ、潜れ」

と土龍の様に砂を「ムク」ムクさせ乍ら全身を隠して走り行くのが浪の様に見え

て居る。石凝姥は砂を両手に握つて團子を拵へ息をふつかけると、忽ち凝結して

石の玉となりける。その玉を砂の浪を目がけて、「ポン」ポンと投げつくれば、

一同の土人は堪まり兼ねてか、砂「まぶれ」の體軀を「又ツ」と現はし、兩手を

合せ、

「カ、カ、カ、勘忍々々」

と砂上に平伏して謝り入る。

「オイ、土龍、許してやるから俺の前へ出て来い。何を怕ぢ怕ぢとして居るか。

少しも恐い事はないぞ」

□ ハイ、本當に、夕々、助けて貰へますか□

□ 假りにも三五教の宣傳使たるもの、嘘偽りは少しも申さぬ。素直に此方の前に

集まり來れ。良い事を聞かして與らう□

土人は恐る恐る前に集まり來り、俯伏せになり半泣きになつて居る。石凝姥は

又もや宣傳歌を聲爽かに歌ひ始めたり。

□ 吾は石凝姥の神 ウラルの神の曲津見を

言向け和し三五の 神の教に救はむと

東雲の空別け昇る 東の彦の宣傳使

心も固き石凝姥 神の命と現はれて

數多惡魔もアルタイの 山の砦を清めむと

夜を日に次いで道の爲め 世人を救ふ眞心に

宇智の川邊に來て見れば 瓜の畑を見る如く

圓い頭の此處彼處 此れ枉神の曲業と

川邊かはへに下り立ち髪かみの毛けを一寸握ちよつとにぎつて眺ながむれば

烏からすの様な黒くろい顔かほ 美事みごと、目鼻めはなも口耳くちみみも

眉毛まゆげも額ひたいも出来できてある 頭かしらばかりの人間にんげんが

如何どうして此處ここに住すまうかと 思案しあんにくるる折柄をりからに

土龍もぐらの様に「ムク」ムクと 砂すなもち上げて現あらはれし

黒くろさも黒くろし鍋墨なべずみの 様な體からだ軀からだは化物ばけものか

大馬鹿おほばか者ものか知らねども 三五あなひけう教せんの宣傳でんし使

召捕めしとり呉くれむと四方しほうより 吾われに向むかつて攻せめ來きたる

その有様ありさまの可笑をかしさに 天あまの數歌かずうた宣のりつれば

頭あたまを抑おさへ目めを顰しかめ 堪こらへ兼ねたる體ていたらく

吾行わがゆく道みちは三五あなひの 教をしへなれどもお前等まへらは

穴「あなあ」有けうり教たちまか忽たちまちに 土龍もぐらの様に穴「あな」あけて

砂すなに波なみをば立たたせある 【あな】面白おもしろや面白おもしろや

一つ嚇ひとして見みようとして 砂「すな」を握にぎつて固かためおき

神の御息を吹き掛けて

石凝姥の玉となし

前後左右に投げやれば

こりや堪まらぬと各自が

生命惜しさに我を折つて

素直に吾に従ひし

心の神の助け神　もう之からは慎みて

決して馬鹿な眞似は「すな」

素直に心を改めよ

素直に心を改めよ

と滑稽交りに宣傳歌を歌ひければ、五人は一齊に顔を上げ、

「ア、ア、有難う御座います。もう之から【スツカリ】と改心を致します。

【すな】と仰有つた事は【すな】ほに廢めます。オイオイ皆の奴、これから素

直になれよ

石凝姥「貴様もよく洒落る奴だな、さア之から此橋を渡るのだ。お前達も俺に跟

いて来い。俺が宣傳歌を歌ふ後から一緒に歌ふのだ。さうすれば無事安全に渡れるから」

甲 可^か愛^{あい}い^い嬬^{かかあ}に^{ひさ}久^{ひさ}し^{ひさ}振^ぶりに^{ごめんくわい}御^ご面^{めん}會^{かい}が^{かな}叶^{かな}ひ^{かな}ます^{かな}か^{かな}な^{かな}ア^{かな}」

乙 「又^{また}嬬^{かかあ}の^{こと}事^{こと}を^い言^いひ^いよ^いる^いワ^い。渡^{わた}つ^{わた}た^{わた}上^{うへ}の^{こと}事^{こと}だ^{こと}。一^{いっすん}寸^{すん}先^{さき}は^{やみ}暗^{やみ}の^よ世^よだ^よよ^よ」

石凝姥^{いしこりどめ} 「貴^き様^{さま}は^{けう}ウ^うラ^らル^る教^{けう}だ^だな^な」

乙 「滅^{めつ}相^{さう}な^な、ウ^うラ^らメ^めシ^し教^{けう}です^{です}。も^もう^う之^{これ}か^から^ら私^{わたくし}も^も三^{あなな}五^ひ教^{けう}に^にな^なり^りま^ます^す。然^{しか}し^し私^{わたくし}の^に女^に房^{ようぼう}

だけ^{だけ}は^は「あ^あな^なな^ない^い」教^{けう}に^にし^して^て貰^{もら}つ^つて^ては^は困^{こま}り^りま^ます^す」

丙 「三^{あなな}五^ひ教^{けう}で^でも^も心^{しん}配^{ぱい}す^する^るな^な。矢^やつ^つ張^ばり^り、「あ^あな^な」有^{あり}難^{がた}や^や「ア^アル^ル」タイ^{たい}山^{さん}だ^だ」

とし^{とし}や^やれ^れな^なが^がら^ら、石^{いし}凝^{こり}姥^{どめ}神^{のかみ}の^{あと}後^{あと}に^に跟^つい^いて^て浮^う木^きの^{はし}橋^{はし}を^{にし}西^{にし}に^{むか}向^{むか}つ^つて^て漸^{やう}く^く渡^{わた}り^り終^をり^はぬ^ぬ。

（大^{だい}正^{せい}一^{いつ}・二^に・二^に七^{しち} 舊^{きう}二^に・一^{いつ} 北^{きた}村^{むら}隆^{たか}光^{みつ}録^{ろく}）

第三^{だい}三^{さん}章^{しょう} 鯉^り公^{こう}（四^し六^{ろく}三^{さん}）

海^{くら}月^げな^なす^す漂^たふ^ふ國^{くに}を^か固^かめ^めむ^むと^と、心^{こころ}も^も堅^かき^き石^{いし}凝^{こり}姥^{どめ}の^{かみ}、神^{かみ}の^{みこと}命^{こと}の^{せん}宣^{せん}傳^{でん}使^し、其^{その}言^{こと}靈^{たま}に^か川^{かは}

の^べ邊^べの^し、四^し五^ごの^ど土^ど人^{じん}は^か堅^かき^か頭^{あたま}を^う宇^う智^ちの^{かは}川^{かは}、浮^う木^きの^{はし}橋^{はし}を^{あぶ}危^{あぶ}な^なげ^げに^に、や^やう^うや^やう^う西^{にし}へ^へ打^{うち}

渡り、

甲「ア、三五教の宣傳使様、お蔭で三年振りに故郷に歸る事が出来ました。これも全く、あなた様のお蔭でございます。私の村へ一寸御立寄りを願ひたいのは山々ですが、そこには一寸、エ、一寸……」

石凝姥「何だ、云ひ憎さうに、明瞭と云はぬかい」

「オイ鰯公、貴様俺に代つて申上げて呉れないか」

鰯公「ソナ甘い事を云ふな。此鰯公だつて久し「振り」に川を渡つて、やつと安心したとこだ、ソナ事明瞭と云はうものなら、それ又アルタイ山の魔神さまには「ブリ」ブリと怒られて、ドンナ災難が俺の頭に「ブリ」懸つて来るか、分つたものぢやないワ。さうすれば家の婿めが三年「振り」に折角歸つて来て、好い男「振り」を拜んで、ヤレヤレ嬉しやと思つて居たのに、お前さまは馬鹿だから、ソナ大事な事を喋つて、こんな目に遇ふのだと云つて、「ブリ」ブリ怒られて、大きな尻を俺の方へ「ブリ」ブリと振られやうものならつまらぬからなア」

石凝姥「オイ、貴様達は譯の分らぬ奴だな。何が「ブリ」ブリだ」

乙「イヤ最う毎日日日、大雨が【ブリ】ブリで、宇智川はドえらい洪水で御座います。家の嬢も【ブリ】ブリで腹立て、涙の雨が【ブリ】ブリになると困りますから、どうぞ是だけは御許し下さいませ」

「貴様たち、愚圖々々云つて秘密を明さぬならば、こちらにも考へがあるぞ。又石の玉を御見舞ひ申さうか」

と云ひながら、直ちに土を握つて團子を作り息を吹きかけたるを、

甲「マアマア待つて下さいませ。そんな石玉を貰つたら、私の頭は一遍にポカーンと割れて了ふ、堪つたものぢやない。膽玉までが潰れて鞆丸が縮んで了ひます」

石凝姥「それなら素直に、何だか秘密らしい貴様の口【振り】、白状せぬかい」

「ハイハイ、仕方がありません。さつぱりと申し上げます。エ、實は、誠にそれ

は、ほんにほんに、眞に、エ、アルタイ山の、ア、間の悪い曲神が、マアマア、

マアで御座いますが」

「貴様の云ふ事は益々分らぬ、眞面目に申さぬか。また石玉を呉れるぞよ」

「オイ、鰯公、貴様も俺ばかりに云はさずに、【ちつと】は責任を分擔したらど

うだ」

鯰公「エー仕方がない。どんな事があつても、三五教の宣傳使様引受けて下さい

ますか」

石凝姥「何でも引受けてやる、驚くな、尋常に眞實を申せ」

「アルタイ山には蛇摺と云ふ、それはそれはえらい悪神が棲んで居ります。其神

は毎日日日大きな蛇を十二匹宛餌食に致して居ります。其蛇がない時には此處ら

邊の村々に澤山の子分を連れて来て、嬬や娘を代りに奪つて喰ひますので、大事

な女房や娘を食はれては堪らないので、村々の者が各自手分けをして毎日十二匹

の太い蛇を獲つて、之をアルタイ山の窟に供へに行くのです。夏は澤山に蛇が居

つて取るのも容易ですが、斯う寒くなると残らず土の中へ這入つて了ふので、之

を獲らうと思へば大變な手間が入りますし、之を獲らねば女房子をいつの間にや

ら奪つて食はれるなり、イヤもう此邊の人民は、大蛇獲りにかかつては命がけで

御座います。若しもこんな事をあなたに申し上げた事が、アルタイ山の魔神の蛇

摺の耳へでも入つたら、それこそ此村は全滅の憂目に遇はねばなりませんから、

どうぞ助けて下さいませ」

「ヤア、何事かと思へばソナ事か、よしよし。此方がこれからアルタイ山に登つて其蛇摺の魔神を退治てやらう。貴様等は案内せよ」

一同「案内は致しますが、三年振りで漸う歸つたばかり、どうぞ一度吾家へ歸つて妻子に面會した上案内さして下さい」

「三年も居らなかつたのだから、屹度お前等の女房子は喰はれて了つたかも知れないよ」

一同聲を揃へてワアワアと泣き伏すあはれさ。

石凝姥「オー心配するな、滅多にそんな事はあるまい。とも角貴様等の村に暫らく逗留して様子を窺ふ事としよう」

と一同と共に彼等が部落に進み行く。

この部落を鐵谷村と云ふ。一行が此村の入口に差掛つた頃は、既に烏羽玉の闇の帳は下され、空には黒雲塞がり咫尺を辨ぜざる闇黒界となりぬ。

七八十軒もある鐵谷村は、何故か、どの家にも一點の燈火もついて居ない。微

に鼻をすする音や泣き聲が聞えてゐる。鯰公の一行はあまりの暗さに吾家さへも分らず、一歩々杖を持たぬ盲目の様な足付をして探りさぐり進んで行く。やや高き所に忽然として一柱の火光が瞬き始めた。石凝姥その他の一行は其火を目當にドンドンと進んで来て見れば、此處は鐵谷村の酋長の鐵彦の屋敷である。何だか秘密が潜んでゐる様な氣がする。石凝姥神は門前に立つて聲朗かに宣傳歌を歌ひ始めた。門内より雷の如き聲を張り上げて、

「ヤア、此門前に立ちて三五教の宣傳歌を歌ふ奴は何者だツ。酋長様の御家の一大事、そんな氣樂な事を云つてゐる場合ではあるまい。何處の何奴か知らぬが、惡戲た眞似を致すと笠の臺が飛んで了ふぞ」

門外より鯰公聲を張上げ、

「ヤア、さう言ふ聲は門番の時公ではないか。俺は三年前に宇智川の向岸に渡つたきり、丸木橋が落ちたものだから、今日まで歸らなかつたので村の様子はちつとも知らぬが、酋長の家の一大事とは何だい」

時公「何だも糞もあつたものか、蛇摑の曲神さまに酋長の娘清姫さまを今晚中に

アルタイ山の砦に人身御供に上げねばならぬのだ。あんな美しい可憐娘を蛇摑の曲神の餌食にするのかと思へば、俺はもう氣の毒で惜しうて何どころではない。貴様それにも拘はらず、蛇摑の嫌ひな宣傳歌を歌ふとは何の事だい。貴様の娘も今年の春だつたか、食はれて了うたのだよ」

鯉公は、

「エーッ」

と云つた限り、其場にドツと倒れ伏し人事不省となる。

甲「オイ、俺は貴様のよく知つて居る吉公だが、門を開けて呉れ。屹度酋長がお喜びになる事は請合だ。俺は救ひの神様をお迎へして來たのだから、清姫さまも屹度お助かりになるだらう。早く開けないかい」

「マア何は兔もあれ、開けて見ようか」

と時公はやや不安にかられながら、白木の門をガラガラと開ける。石凝姥神は、

「御免」

と云ひつつ門を潜つて進み入る。

(大正一一・二・二七 舊二・一 藤津久子録)

第三四章 唐櫃〔四六四〕

曲津の猛る世の中は かかる例もアルタイの

山の砦に巢を構へ 鬼が大蛇か蛇掴

魔神は一日に十あまり 二つの蛇を取り喰ひ

春夏秋はよけれども 雪降りしきる冬の夜は

蛇の姿もかくろひて 飢をばしのぐ由もなく

魔神は遂に遠近の 村町里に現はれて

世人の妻や娘子を 一日に一人奪り喰ひ

日々に減り行く女子の 哀にもれず鐵谷の

村の司の鐵彦が 一人娘の清姫に

白羽の征矢は立ちにける。

憂ひに沈む門の内、吹き來る風も濕り勝なる闇の夜に、門の戸叩いて入り來る、

心も堅き石凝姥の宣傳使は、門番時公の案内につれ、五人の土人と共に、玄關先

に立ち現はれたるを見るや、時公は慌しく奥の間に驅入り、

「申し上げます、申し上げます。三五教の宣傳使がお越しになりました」

主人の鐵彦は、妻の鐵姫、清姫と共に唐櫃の前に座を占め、門番の言葉も耳に

入らぬ體にて憂ひに沈み居る。

隣の室には、村人の口々に囁く聲悲しげに聞え居る。時公は、

「モシモシ、三五教の宣傳使が見えました」

鐵彦「何ツ、三五教の宣傳使とは、そりや大變だ。門を堅く閉ぢて一步も入れる

事は罷りならぬぞ」

時公は、

「ハイ」

と云つたきり、頭をがしがし搔いて縮まり居る。

「早く行つて門を閉めぬか。萬々一、三五教の宣傳使が吾屋敷へ一歩たりとも踏み込ませなば、又もやウラル彦の眷屬、蛇摺の神に如何なる難題を吹きかけらるやも圖り難し。疾く門を閉せよ」

「イ、今、コ、此處に宣傳使が無理やりに私を突き倒し蹴り倒し、跳ね飛ばし、加之に拳骨を喰はして這入つて來ました。いやもう亂暴な奴で、力の強い剛力無雙の私でも、どうする事も出來ませぬ。凶い後には「きつと」よい事が來ますから、どうぞ見直し聞き直して下さいませ」

「ホー、貴様は三五教だな、何時そんな教を聞いたのか」

「ハイ、今門の口で聞きました」

此時玄關に當つて、

「神が表に現はれて

善と惡とを立て別ける

ウラルの山に巢を構る
ウラルの彦の曲神の

部下に仕ふる蛇摺
三五教の宣傳使

現はれ来る上からは
もはや逃れぬ百年目

神の教の言靈に
人を奪り喰ふ曲神の

頭挫ぎて驚掴み
言向け和し鐵谷の

里に塞がる村雲や
悩みを清く吹き拂ひ

浦安國の浦安き
神の御國に治むべし

あゝ鐵彦よ鐵姫よ
身魂も清き清姫よ

案じ煩ふ事勿れ
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
唯何事も人の世は

直日に見直し聞き直し
世の曲事は宣り直す

三五教の神の道
鬼や大蛇や狼の

勢如何に猛くとも
神の御稜威の言靈に

言向け和し村肝の
心も晴れて冬の空

月照り渡る望の夜の御空すがしき清姫を

今宵の内に恙なく命救ひて曲神を

アルタイ山の山の尾に追ひ散らしつつ宇智川の

河瀬に袂袂ふべし河瀬に袂袂ふべし

憂ひを晴らせ疾く晴らせ喜び勇め諸共に

朝日は照るとも曇るとも月は盈つとも虧くるとも

假令天地は覆るとも三五教は世を救ふ

あな有難き神の道あな有難き神の道

と涼しき宣傳歌の聲。鐵彦親子を始め別室に集まりたる村人は、この歌を聞いて
今迄とは打つて變り蘇生したる如き面色にて、思はず知らず手を拍ち、ウロー、
ウローと叫びながら立ち上り踊り狂ふ。

此時又もや優しき聲にて宣傳歌を歌ひながら、門を潜つて入り来る女あり。玄
關に立ち止まり、

闇を縫ひ來る一つ火を 辿りて此處に來て見れば

鐵谷村の酋長の 鐵門はサラリと開かれて

憂ひを包む家の内 様子あらむと頭をば

傾け耳を澄ませつつ 暗さは暗し烏羽玉の

闇にも擬ふ鐵彦や 妻の鐵姫、清子姫

アルタイ山の曲神の 醜の餌食になる今宵

思ひは同じ女氣の 娘心を推し量り

世人を救ふ三五の 教を開く妾こそ

今宵は此處に「みかへる」の 神の教に仕へむと

思ふ心はアルタイの 谷より深く思ひつめ

宇智の川より尚ほ深く 心定めし宣傳使

今宵は吾を窟戸に 昇ぎて往けよ疾く往けよ

神が表に現はれて 善と惡とを立て別ける

今この時ぞこの時ぞ 時後れては一大事

早く此門開けよかし

早く此門開けよかし

石凝姥神は、思はぬ宣傳使の聲を聞きていぶかり、玄關に立ち出で見れば、黄泉比良坂の戦鬪に偉勳を奏したる梅ヶ香姫なり。二人は思はず顔を見合はせ、互に、

「オー」

と云つたきり、默然として暫し佇みその奇遇に呆れ居たりき。

（大正一一・二・二七 舊二・一 加藤明子録）

第三五章 アルタイ窟（四六五）

石凝姥神、梅ヶ香姫二人の宣傳歌に、酋長鐵彦を始め一同の者は、やつと安心の胸を撫でおろし、梅ヶ香姫の意見を容れ、清姫の身代りをこしらへ、梅ヶ香姫

を唐櫃の中に納めて、石凝姥神と時公の門番は唐櫃を昇ぎ、數百人の老若男女に送られて、アルタイ山の山口にさしかかれば、忽ち一天深黒に彩られ、烈しき山嵐は岩石も飛ばさむ許りに吹き荒んで來た。一同は風に逆らひながら、漸くにして山寨の前に進み着き、梅ヶ香姫を納めたる唐櫃を岩窟の前に靜に据ゑ、村人は先を争うて倒けつ輾びつ闇の山路を下り行く。

石凝姥神、時公の二人は、間近の茂みの中に身を横たへて、様子如何にと窺ひ居る。暫くあつてアルタイ山の一面に、大空の星の如く青き火光が瞬き始め、中より一層大なる松火の如き火は、ブウンブウンと唸りを立てて唐櫃の上空を、前後左右に駆け廻り駆け廻る事ほとんど一時ばかり、唐櫃の中よりは幽かなる宣傳歌響いて居る。この聲に恐れてや、大なる火光は上空を廻るのみにて、容易に下りて來ない。

數百千の山の青白き火は追々に消え失せ、咫尺も辨ぜざる闇黒と變じ、松火の火は追々と光薄く小さくなり行く。宣傳歌は唐櫃の中より次第々と聲高く聞え來る。一塊の火は忽ち上空に舞ひ昇り、西南の天を指して帯を引きつつ逃げて行

く。

石凝姥神はこの態を見て腕を組み、

「オイ、時公、今の火を見たか、随分立派なものだのう。到底アルタイ山でなければ、コンナ立派な火を見る事は出来ないぞ」

時公「ハイ、ドウも恐ろしい事で御座いました。何だか身體が縮かむ様で、手も足も動きませぬ」

「氣の弱い奴だなア。貴様一寸聲を當に、御苦勞だが唐櫃のそばへ寄つて、梅ヶ香姫はどうして居るか、調べて来て呉れぬか」

「ヘイ、イイエ、滅相な、ドウして足が立ちますものか」
「ソレナラ俺が行つて来るから、貴様はここに隠れて居れ」

と云つて立上らむとするを時公は、
「モシモシ、私も一緒に連れて行つて下さい。コンナ處に一人放つとけぼりを喰

はされては堪まりませぬワ」
石凝姥「貴様、手も足も動かぬと云つたぢやないか。連れて行けと云つた處で、

此闇がりに負うてやる譯にも行かず、仕方がない。マア神妙に待つて居るがよい」
「イヤ、ソレナラ、立つて御供を致します」
「ナンダ、なまくらな奴だ、臆病者だな、サア来い」
と手を引いて、唐櫃の前に探りさぐり進み行く。宣傳歌の聲は唐櫃の外に洩れ聞えてゐる。

石凝姥「オー、梅ヶ香姫殿、悪神は逃げ去つた様です」

と云ひながら、唐櫃の蓋をパツと取れば、梅ヶ香姫は白装束の儘髪振り亂し、雙刃の劍を闇にピカつかせながらスツクと起ち上り、

「ヤアー、アルタイ山に巢を構へ、人の命を奪ふ悪神蛇摺、思ひ知れよ」
と矢庭に聲する方に向つて迫り来る其權幕に、時公はキヤツと叫びてその場に倒れ伏す。

「ホー、梅ヶ香姫殿、お鎮まりなさい、拙者は石凝姥です。悪魔は最早西南の天に向つて火の玉となり逃げ去りました」
梅ヶ香姫「ヤー、蛇摺、汝は吾宣傳歌に恐れ、再び計略を以て三五教の宣傳使石

凝姥神りどめのかみと佯いつはり、吾われを籠絡ろうらくせむとするか。思おもひ知しれよ　
と劍つるぎを抜ぬき放はなつて、前後ぜんごさいう左右さゆうに振ふり立たて振ふり立たて迫せまり來きたる。石凝姥いしこりどめは後あとしざりし
ながら、

「マアマア、待まつた待まつた、本物ほんものだ　」

梅うめヶ香か姫ひめ 「此期このごに及およんで小賢こごかしき其その云いひ譯わけ、聞きく耳みみ持もたぬ　」

と白装束しろてやうぞくの儘まま、石凝姥いしこりどめに向むかつて斬きつてかかる。石凝姥いしこりどめは已やむを得えず、闇中あんちゆうに幽かすか
に見みゆる白しろき唐櫃からびつの蓋ふたを取とつて梅うめヶ香か姫ひめの刃やいばを受うけ止とめ、

「石凝姥いしこりどめだ石凝姥いしこりどめだ　」

と頻しきりに叫さけぶ。梅うめヶ香か姫ひめは岩角いはかどに躓つまづきバタリとその場ばに倒たふれたるが、あたかも時とき
公こうの倒たふれたる一尺いっしやくばかり傍そばなりしかば、時公ときこうは又またもやキヤツと聲こゑ立たて、

「へ、蛇摑へびつかみさま様、ワ、私わたくしは時公ときこうと云いふ男をとこで御座ございます。貴方あなたのお好すきな餌食えじきを御供おそな

へに來きた者もの、どうぞ命いのちばかりは御助おたすけ下くださいませ。お氣きに入いらぬか知しりませぬが、
實じつの處ところを白状はくじやう致いたしますれば、清姫きよひめではなくて、なんでも酸すい酸すい名なのついた風來ふうらい
者ものの乞食こじきひめ姫ひめで御座ございます。併しかし食くつてみな味あじは分わかりませぬ。お氣きに入いらねば、又また

明日の晩に本眞物を持つて來ます。是でよければ、どうぞ辛抱して、私はお助け下さいな」

石凝姥は暗中より、

「ホー、時公の奴、不埒千萬な、其方は清姫の身代りを持つて來たなア。身代りで濟むものなら、男でも女でもかまはぬ。この梅ヶ香姫は「スツ」ぱくて此方の口に合はぬ。貴様の肉はポツテリ肥えてウマさうだから、これから貴様を御馳走にならうかい」

時公「ソ、ソ、それは違ひます、そんな約束ぢやなかつたに、マ、待つて下さいませ。食はれる此身は厭はねども、家に残つた女房が嘸歎く事で御座いませう。命ばかりはお助け下さいませ。ア、こんな事になると知つたら、三五教の奴乞食の様な、石凝姥とやらの云ふ事を聞くぢやなかつたのに、是から彼奴を私が平げて、貴方の恨を晴らしますから、どうぞお助けを願ひます」

梅ヶ香姫闇がりより、

「ホ、ホ、ホ、」

時公ときこう「なんだ、アタイやらしい。ホ、ホ、ホ、處どころかい、今食いまくはれかけて居をるところぢや。お前は替玉かへだまで、蛇摺へびつかみさま様のお氣きに入いらぬとて、助たすかつて嬉うれしからうが、俺おれの身みにもなつて見たみがよい。千騎一騎せんきいつきの背せなか中に腹はらの替かへられぬ、苦くるしい場合ばあひになつて居をるのに、人ひとを助たすける宣傳使せんでんしが笑わらふと云いふ事ことがあるものか。馬鹿ばかにするない。もう斯かうなつては破やぶれかぶれだ。俺おれが食くはれる前まへに貴様きさまの命いのちを取とつて腹癒はらいせをしてやらう」

「ホ、ホ、ホ、ホ、時公ときこうさま、貴方あなた口くちばかり御達者おたつしやですなア、御手足おてあしが動きうごますか」

「ウ、動うごかいでかい、動うごかして見みせてやらう、かう見みえても、もとは時野川ときのがはと云いつて、小角力こずまふの一ひとつもとつた者ものだ。乞食女こじきをんなの阿魔女あまつちよるめ奴なが何なにを吐ぬかしよるのだ。それにつけても石凝姥いしこりどめの奴やつ、偉えらさうな法螺ほらばかり吹ふきよつて雲くもを霞かすみと逃にげて仕舞しまひよつた。どうせ三五教あななひけうの宣傳使せんでんしに碌ろくな奴やつがあるものか。ほんたうにドエライ目めに遭あはせよつたワイ」

石凝姥いしこりどめ作り聲ごゑをして、

「コラコラ時公、頼桁が過ぎるぞ。舌から抜かうか」

時公「下からも上からもありません。私の様な骨の硬い味のないものを食った處

で、胸が悪くなるばかりです。梅ヶ香姫よりもう一段酸い酸い、粹な男と内の嬢

が申します」

「その酸い奴が喰つて見たいのだ」

「矢張り嘘です、酸い奴は梅ヶ香姫」

石凝姥は元の聲になつて、

「オイ時公、随分俺の悪口をよく囁つたなア。とうの昔に蛇摺はアーメニヤの方

へ逃げて仕舞つたよ。最前から蛇摺と云つたのは、暗がりを幸ひ、俺が一つ貴様

の肝と心の善悪を調べて見たのだ。貴様はまだ改心が出来て居らぬワイ」

「ハイハイ、【ほんま】物ですか。【ほんま】物なら今から改心いたしますから

赦して下さいな」

「蛇摺の肉體は逃げ去つたが、其靈が俺に憑つて、貴様を喰へと云ふのだ。必ず

石凝姥を鬼の様な奴と恨めて呉れなよ。俺に憑つた副守護神が、貴様をこれから

喰ふのだよ」

「あなた、そんな殺生な副守護神を去して下され」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、ホ、」

時公「コレコレ梅ヶ香さま、旅は道連れ世は情だ。かうして三人この深山に出て来たのも深い因縁があつての事でせう。貴女宣傳使なら、あの副とか守とか云ふものを去して下さいな」

「ホ、ホ、ホ、」

石凝姥「アハ、、、、、嘘だ嘘だ」

時公「ウ、、ウ、ソウですか」

「洒落處でないワイ。もう夜が明ける、サアサア支度だ支度だ。梅ヶ香様、貴女は女の事だから、此唐櫃にお這入りなさい。私と時公と昇いで歸ります」

「昇げと云つたつて腰が抜けて昇げませぬ」

かくする中、東雲の空紅を潮し、あたりはホンノリと明け放れた。見れば邊りには大小の鬼の形したる岩石が、そこら一面に散亂して居る。石凝姥神は邊りの

手頃の細長き岩片を拾ひ、之に息を吹きかけ頭槌を作り、鬼の化石を片つ端より頭を目がけて叩き割れば、不思議や、其石よりは霧の如く、血煙盛んに噴出す。幾十百とも限りなき鬼の化石を一つも残らず首を斬り、ここに三人は悠々として山を下り、再び鐵谷村の酋長鐵彦の家居をさして悠然として凱歌をあげて歸り來る。

(大正一一・二・二七 舊二・一 岩田久太郎録)

第三十六章 意外(四六六)

アルタイ山の蛇摺 一度に開く梅ヶ香姫の
神の命の言靈に 吹き散らされて曲津見は
御空も高く駆け上り 西南指してアーメニヤ

雲を霞と逃げ去りし
 後に二人の宣傳使
 胸ドキドキと時公の
 供を引連れ歸り來る
 鐵谷村の鐵彦が
 館の前になりければ
 今の今まで悄氣返り
 弱り入つたる時公は
 肩を怒らし肘を張り
 俺の武勇は此通り
 鐵谷村の人々よ
 昔取つたる杵柄の
 猪喰た犬の時野川
 時世時節では是非もなく
 鐵彦さまの門番と
 身を下しては居たけれど
 愈めぐる時津風
 吹いて吹いて吹きまはし
 流石に強き蛇摺
 片手に掴んでビシヤビシヤと
 岩に投付け引つ千切り
 上と下との彼奴が顎
 右と左の手を掛けて
 ウンと一聲きばつたら
 鰻を斷つたその如く
 左右に別れてメリメリメリ
 時の天下に従へと
 言ふ諺を知つてるか

サアサア是これから時ときさまが 時ときの天下てんかぢや殿様とのさまぢや

迎とても敵かなはぬ鐵谷かなたにの 村むらの頭かしらの鐵彦かなひこも

俺おれに叶かなはぬ鐵姫かなひめよ 必かならず是これから此方このほうに

背そむいちやならぬぞ時野川ときのがは 時ときの天下てんかは俺おれがする

時ときの代官だいくわん日の奉行ひのぶぎやう 時ときにとつての儲け物まうのもの

モウ是これからはアルタイの 山やまの魔神まがみの蛇摺へびつかみ

此このとき時ときさまのある限かぎり 再ふたび出でて來くる例ためしない

ためしもあらぬ豪傑がうけつの 此このうでまへ腕前うでまへをよつく見みよ

御代みよは安やすらか平たいかに 時公ときこうさまが治をさめ行ゆく

「ドッコイシヨウドッコイシヨ」 「ウントコドッコイ、ドッコイシヨ」

「ヨイトコヨイトコ、ヨイトコサ」 「ヨイトサノ、ヨイトサ」

と手てを振ふり、足あしを六方ろくぱうに踏ふみながら、饒舌しゃべり散ちらし、鐵彦かなひこが門かどぐち口くちガラリと開あけて
入いり來きたる。

むらびと
村人は今日も酋長の館に詰めかけて、アルタイ山の様子如何にと待居たる折柄
なれば、此法螺を聞いて半信半疑の念に驅られ、喜ぶ者、顔を顰める者、ポカン
とする者など澤山に現はれたる。鐵彦夫婦は娘清姫と共に慌しく宣傳使の前に現
はれ、

「ヤア、御苦勞で御座いました。様子は如何で御座いませう。吾々始め一統の者、
御身の上如何にと、首を長くし、顔色を變へて待つて居ました。はやく様子を聞
かして下さいませ」

と三人一度に兩手をついて頼み入った。石凝姥はニツコと笑ひ、

「ヤア、先づ先づ御安心下さいませ、此通り梅ヶ香姫も無事に歸つて参りました
親子三人」
「ヤア、これは梅ヶ香姫さま、結構で御座いましたナ。これと申すも貴
女様の御親切が天地の神様に通じたので御座いませう。オー時公、お前は何か
偉う元氣張つて唄つて居たナア。早く様子を聴かして呉れよ」

時公「只今の時公は、昨日迄の時公とは、ヘン一寸違ひますよ。其積りで聴いて
貰ひませう。何時までも人間は金槌の川流れ、頭が上らぬといふ理屈はない。此

ときこう 時公の手柄話、よつく承はりなさい…… オイオイ、時野川の言靈をよつく聞けよ。

なかなかもつ 中々以て素適滅法界な……

かなひこ 鐵彦「オイ時公、前置は好い加減にして、早く本當のことを言はぬか」

「ヤア、お氣の毒な事が出来ました」

「エツ」

「折角三五教の宣傳使が清姫様のお身代りになつてやらうとの仁慈無限のお志、

われわれはじめ一同の者は誠に以て感謝の至りに堪へませぬ。併しながら蛇摺の奴、岩

窟の中からやつて来て、唐櫃の廻りをフンフンと嗅ぎまはり「ヤア此奴は香が違

ふ、酸いぞ酸いぞ、酸いも甘いも知り抜いた此蛇摺に、身代りを立てて誤魔化さ

うとは不都合千萬な鐵彦奴、モウ了簡ならぬ。是から此方が出張して、鐵彦親子

は申すに及ばず、村中の奴を老若男女の區別なく片つ端から皆喰つて了ふ」と云

つて、ドエライ聲で唸鳴りよつた其勢の凄じさ。何とも彼とも云ふに云はれぬ、

大抵の者なら皆腰を抜かして、到底この時公の様に歸つて來ることは出來ないの

ですが、そこは流石は時公だ。鬼をも掴んで喰ふやうな蛇摺の前に、何の怖るる

色もなく悠然として現はれ給ひ「ヤイ、蛇摺とやら、其方に申渡す仔細がある。貴様は蛇の代りに結構な人間様を喰ふ奴だ。モウ是からは人間を喰ふ様な事を致すと了簡ならぬぞ」と拳骨を固めて、ポンと擲る積りぢやつたが、擲るのだけは止めておいた。「モウ人間を喰ふ事は罷りならぬ」と言つた處、蛇摺の奴四つを目を細くしよつて「ヘイヘイ時公さまの御威勢には恐れ入りました。モウ是が人間の喰ひをさめ、一人だけは許して下さい」と頼みやがる。そこで此方も「ヨシ分つた、割と融通のきく奴だ。サア此處へ清姫を伴れて来た、これを喰つて満足せよ」と云つた處、蛇摺の奴「此奴は酸い贗物だ、本當の清姫をよこせ」とほざきやがる。「ヤアそれも尤もだ」と云つて請合つて歸つて来たのだ。サア清姫さま、氣の毒ながら今晚ぜひ御苦勞にならねばなりません。主人が門番に手を下げて頼むのだから、マ一度お前蛇摺に會つて談判をして来て呉れまいか」

「なかなか以て……抜かりのない時公は「オイ蛇摺、モウ人間の一つイヤ一人くらゐ喰つても喰はいでも、同じ事ぢやないか、モウ是で諦めて了へ」と千言萬語

を盡して云うて聞かした處「モウ是が喰ひをさめだから、是非喰はして貰ひたい。蛇摑の肉體は改心したから喰ひたくないが、腹の中の副守護神が喰ひたいと申すに依つて、女子の代りに時公を……ヤ違ふ違ふ……梅ヶ香姫の代りに、清姫と鐵彦、鐵姫を邪魔臭いから一緒に喰はして呉れ」と云ひよつたのだ。ナア鐵彦さま、貴方は此村を守る御方、今迄は吾々が集つて働いて、酋長さまと敬つて養つて上げたのだから、今夜は其勘定をなさるのだ。たつた三人の命を棄てて此村は愚か、國中の者が助かると思へば安い生命だ、御苦勞さま……」

鐵彦、鐵姫、清姫は一度にワツと泣き伏す。時公は、

「ワツハ、ハ、ハ、オツホ、ハ、ハ、」

村の者「オイ時公、何が可笑しい。貴様不届きな奴だ。こんな悲しい時に可笑しいのか、貴様を村中集つてたかつて成敗してやらう。覺悟せい」

「ヤア、騒ぐな騒ぐな、皆嘘だ」

「嘘とは何だ、冗談も時に依る」

「ヤア時公が言つたのぢやない、副守護神が云つたのだよ。みんな嘘だ嘘だ」

石凝姥いしこりどめ □ アハ、、、、、
梅ヶ香姫うめがかひめ □ ホ、、、、、
石凝姥は聲こゑを張はりあ上げて、

山路險やまぢけしきアルタイの 岩窟いはやの前に送まへられし

梅ヶ香姫うめがかひめの唐櫃からびつを 巖いはほの上に据すゑ置おきて

村人達むらびとは歸かへり行ゆく 梅ヶ香姫うめがかひめは唐櫃からびつの

中なかに潛ひそみて宣傳歌せんでんか 歌うたふ其聲そのこゑ中天ちうてんに

轟とどろき渡わたり曲神まががみは 幾百千いくひやくせんの火ひとなりて

見みまもり居ゐたる折柄をりからに 忽たちまち來きたる一ひとつ火びの

玉たまは此場このばに現あらはれて 唐櫃からびつの上へを右左みぎひだり

前まへや後うしろに舞まひ狂くるひ 聲こゑも涼すずしき梅ヶ香姫うめがかひめの

神かみの命みことの言靈ことたまに 恐おそれて逃にげ行ゆくアーメニヤ

跡形あとかたもなき暗やみの空そら 吾われは木蔭こかげに身みを忍しのび

此光景を窺へば 臆病風に襲はれし

胸もドキドキ時公が 腰を抜かして啜り泣く

彼を伴ひ唐櫃の 前に致りて蔽蓋を

開くや忽ち暗の夜を 透かして立てる白姿

髪振り亂す梅ヶ香姫の 神の姿に仰天し

狼狽へ騒ぐ面白さ 吾は此場の可笑しさに

魔神となつて聲を變へ 嚇して見れば時公は

譯も分らぬくどき言 女房が悔む助けてと

ほざく男の涙聲 腹を抱へる可笑しさを

こらへて漸う今此處に 歸りて見れば時公は

俄に肩で風を切り 大きな法螺を吹きかけて

煙に巻いた減らず口 あゝ鐵彦よ鐵姫よ

心も清き清姫よ 御心安く平けく
思召されよ三五の 神の教に救はれし

鐵谷村はまだ愚^{おろか}
四方の國々民草の^{よもくにくにたみぐさ}
憂^{うれ}ひはここに拂^{はら}はれぬ
歡^{よろこ}び勇^{いさ}め諸^{もろびと}人よ
喜^{よろこ}び祝^{いは}へ神^{かみ}の恩^{おん}
喜^{よろこ}び祝^{いは}へ神^{かみ}の恩^{おん}

この歌に鐵彦始め一同はヤツト胸を撫で下し、三五教の神徳に感じ、かつ二人の宣傳使が義侠心を深く謝し、茲に村内集まつて賑々しく祝の酒宴開きたり。やがて鐵彦の座敷を開放して大祝宴が開かれ、鐵彦は立つて感謝の意を表するため歌をうたふ。

此世を救ふ三五の^{このよすくあななひ}
世人を救ふ赤心の^{よびとすくまごころ}
石凝姥や梅ヶ香姫の^{いしこりどめうめがかひめ}
峰より高く海よりも^{みねたかうみ}
一人の娘清姫の^{ひとりむすめきよひめ}
生命ばかりか國々の^{いのちかみにくくに}
神の誠の宣傳使^{かみまことせんでんし}
岩より堅き神司^{いはかたかむつかさ}
神の命のアルタイ山の^{かみみことみことさん}
深き恵に助けられ^{ふかめぐみたす}
一人の娘清姫の^{ひとりむすめきよひめ}

人の禍悉く 拂ひ給ひし大御稜威

汝が命は久方の 天の河原に棹して

下り給ひし神ならめ あゝ有難や有難や

深き恵みに報いむと 心ばかりの此菟

酒は甕瓶たかしりて 百の木の實は横山の

如く御前に奉り 心の文を今此處に

受けさせ給へ宣傳使 果實の酒はさわさわに

あかにの穂にときこし召せ あゝ諸人よ諸人よ

救ひの神は三五の 誠の道の二柱

天と地とになぞらへて 日に夜に仕へ奉れ

日に夜に崇め奉れ あゝ尊しや神の恩

あゝ尊しや君が恩 たとへ天地は變るとも

榮え五六七の末迄も 娘を救ひ給ひたる

此御恵は忘れまじ さはさりながら、あゝわれは

三年の前に清姫が 姉と生れし照姫を

魔神の爲に呪はれて 損はれたる悲しさよ

三年の前に二柱 ここに現はれましまさば

あゝ照姫も清姫の 如くに無事に救はれむ

返す返すも恐ろしく 返す返すも悲しけれ

石凝姥の神様よ 梅ヶ香姫の神様よ

かへらぬ事を繰返し 愚な親とおもほすな

此世の中に何よりも 吾子に勝る寶なし

あゝさりながらさりながら それに勝りて尊きは

神の教ぞ御道ぞ あゝ是よりは三五の

道の教を寶とし 四方の民草導かむ

あゝ村人よ村人よ 神に齊しき宣傳使

唯一言も洩らさずに 御教を聴けよ、いざ聞けよ

聞いて忘れな何時迄も 聴いて行へ何處迄も

心を治め魂研き 月日の如く明かに

照して御神を讃めたたへ 誠の御神を讃めよかし

祈れよ祈れ唯祈れ 此世を救ふ三五の

神の御前によく祈れ

と二人の宣傳使に向ひ、涙と共に感謝する。これより鐵彦は神恩に報ゆるため、梅ヶ香姫の従者となつて、アーメニヤに進み行くこととなりける。

(大正一一・二・二七 舊二・一 松村眞澄録)

第三十七章 祝宴〔四六七〕

鐵彦夫婦は最愛の一人娘清姫の大難を免がれ、かつ國中の禍の種を除かれたるは、全く神の御恵みと、天津祝詞を奏上し、宣傳歌を奉唱し、祝ひの宴を開き、

むらぎつすつひやく
村中數百の老若男女は、上下の區別なく祝ひの酒に酔ひ潰れ、喜んで泣く者、笑ふ者、法螺を吹く者など、澤山現はれ來り、其中より四五の若者は門番の時公を取り巻き、

甲「オイ時公、貴様は随分えらい勢で歸つて來て、途法途轍もない法螺を吹き居つたが、宣傳使様の御歌を聴けば、何だ、貴様は腰を抜かして、吠面かわいたぢやないか。何でソナ空威張をするのだ」

時公「吠面かわくつて當然だ。ところで吠えぬ犬はないと言ふぢやないか。法螺を吹くのも吠面かわくのも、時公にとつての愛嬌だよ」

「また洒落よるナ。貴様ア、昔は時野川と言つて小角力をとつたと言つただらう。サア、俺と一つ、此座敷で角力をとつて見ようかい」

「措け措け、危ないぞ。葱の様なヒヨロヒヨロ腰で、鐵のやうな時さまに當るのは、自滅を招くやうなものだ。それよりもアルタイ山に行つた時の實地談を聴かしてやらうかい」

乙「オイ、皆の者、此奴の言ふ事は、いつも法螺ばかりだ。眉毛に唾を付けて聴

いてやれ」

「ヨー、俺に敬意を表して『ツハモノ』と言ふのか。イザこれより時公がアルタイ山の曲神退治の梗概を物語るから確かり聴け。抑々アルタイ山は深山幽谷、これに進み行く者は、虎狼か山犬か、但しは熊か時公さまか……」

甲「オイオイ、初めから吹くなよ。吾々も唐櫃を昇いで、現に登つた連中ぢやないか」

「ヤア、縮尻つた。これからが眞實の物語だ。そもそも汝ら村の弱蟲等に、皆の前で別れてより、暗さは暗し、雨は車軸と降つて来る、風は唸りを立てて岩石も飛び散るばかりの凄じさ。それを物とも致さず時公さまは、三五教の宣傳使石凝姥を従へて、梅ヶ香姫を昇ぎつつ巖窟を指して、天地も呑まむず勢に、七八尺も一足に跨げながら、巖戸の前にと立現はれ、ウン、ウンとばかりに唸つて見せた。流石に剛き蛇摑の野郎も、吾言靈に縮み上つて大なる火の玉と變じ、小さき火玉と諸共に、天に舞ひ昇り、西南の空を指して、アーメニヤに逃げ去つたり、と思つたのは彼が計略、忽ち時公さまの身體に神憑りいたし「ヤア、吾こそはア

ルタイ山の主神蛇摺であるぞ」と呶鳴り立てた。流石の宣傳使も慄ひ上つて、モシモシどうぞ生命ばかりはお助け下され、コゝこの通り腰の骨が宿替へ致しました、と「ほざき」よるのだ。そこでこの時公さまに憑つて來た蛇摺奴が「ヤア、この時公は赦す積りで居れども、副守護神の蛇摺が赦さない。頭から鹽をつけてムシヤムシヤとかぶつて喰つてやらうか」と仰有るのだ。梅ヶ香姫は白い手を合して「モシモシ時公さま、どうぞ石凝姥の宣傳使を助けて下さい」と可愛い顔して頼むものだから、時公さまも、副守護神も、俄に憐れを催して「今晚は喰ひ殺す處なれど、汝の優しい顔に免じて赦してやらう」と仰有つた。さうすると宣傳使が平蜘蛛になつて、喜ぶの喜ばないのつて、譬へるに物なき次第なりけりだ」

丙「オツト、時公、待つた。そりやお人が違やせぬか」

「人の一人ぐらゐ違つたつて何だ。一寸身代りになつて言つとるのだ」

乙「ハハー、さうすると時公が石凝姥の宣傳使で、その宣傳使が時公としたら眞實だな」

「そんな種明かしをすると、酒の座が醒める。マア黙つて聽かうよ。それからこ

の時公ときこうが手頃てしころの岩いはを拾ひろつて、フツと息いきを吹ふきかけ、固かたいかたい石いしの槌つちを造つくつて、鬼おにの化石くわせきの首くびを片かたつ端ぼしからカツンカツンとやった。その腕力わんりよくは炮烙ほうらくでも碎めぐやうに、首くびは中空ちゆうくうに舞まひ上あがつて、どれもこれもアーメニヤに向むかつて飛とんで行いつてしまつたよ。アハ、ハ、ハ、

甲かふ「オイ鰯公ぶりこう、チツト勇いさまぬか。この目出度めでたい酒さけに、何なにをベソベソと吠ほえてゐるのだ」

鰯公ぶりこうは泣なき聲こゑで、

「貴様きさま達は嬉うれしからうが、俺おれは三年さんねん振りぶでヤツト故郷こきやうへ歸かへつたと思おもへば、俺おれの娘むすめは今年ことしの春はる、蛇摑へびつかみの惡神わるがみに喰くはれてしまつたと言いふ事ことだ。天てんにも地ちにも一人ひとりよりない娘むすめの顔かほを見みようと思おもつて、今いまの今いままで樂たのしんでゐたのが、噫あゝ夢ゆめとなつたか。夢ゆめの浮世うきよと云いひながら、さてもさても悲かなしい事ことだワイ。これが泣なかずなにみられよか。アーン アーン アーン」

時公ときこう「ウアハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「ヤイヤイ、貴様きさまは何なにが可を笑かしい。俺おれが大切たいせつな娘むすめを喰くはれて悲かなしんでゐるのに、

笑ふと云ふ事があるものかい。ヤイ、アーン アーン アーン

「ワハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

鯰公は四邊かまはず、

「ウオーン ウオーン ウオーン」

と狼泣きをする。

甲「オイオイ鯰公、泣くな。貴様【とこ】の娘は、そら、そこに來て居るぢやないか。最前から貴様が歸つたと言ふ事を聞いて、探しまはして居るのだけれど、あまり色が黒くなつたものだから、分らぬので迷つてゐるのだ。時公の奴、貴様を威かしてやらうと思つて、アンナ法螺を吹きよつたのだよ」

鯰公「ウオーン ウオーン ウオーン、娘、娘、居るか居るか、女房も居るか」
此聲に女房も娘も走り來つて、鯰公に取り付き嬉し泣きに泣き立てる。
清姫は立上り、聲も涼しく歌ひ始めた。

「年てふ年は多けれど」

「月てふ月は多けれど」

日といふ日にちは多けれど
世界晴した今日の日

如何なる吉日の足日ぞや
曲津の神に呪はれて

命も既になきところ
あな有難や三五の

神の教の宣傳使
石凝姥の神司

梅ヶ香姫の御恵み
神の御稜威の輝きて

吾身はここにアルタイの
山より高き父の恩

母の恩にも彌勝る
神の恵の露に濡れ

濕り果てたる吾袖の
涙も乾く今日の空

噫有難やありがたや
吾が父母と諸共に

今より心を改めて
天教山に現れませる

日の出神や木の花の
嚴の御魂の御教と

黄金山に現れませる
埴安彦や埴安姫の

神の命の御教を
麻柱ひまつり祝ぎまつり

地教の山に現れましし
神伊邪那美の大神の

鎮まり給ふ月夜見の 圓き身魂を洗ひつつ
 この世の暗を照すべし 朝日は照るとも曇るとも
 月は盈つとも虧くるとも たとへ天地は覆るとも
 三教を守ります 誠の神は世を救ふ
 救ひの舟に棹さして 浮世の浪を漕ぎ渡り
 大海原に棹さして 高天原に漕ぎ行かむ
 月の光も清姫の 清き心の眞寸鏡
 隈なく光る今日の空 光り輝く今日の空
 あゝ諸人よ諸人よ 返すがへすも三五の
 教に魂を研けかし 神に身魂を任せかし
 祈れよ祈れよ眞心を 神に捧げて禱れかし
 祈るは命の基なるぞ 祈るは命の基なるぞ

と歌ひ終り、賑かに此宴會は閉された。茲に鐵彦は、二人の宣傳使と共に宣傳歌

を歌うたひながら後事こうじを妻つまの鐵姫かなひめに託たくし、アルタイ山ざんを右みぎに見みて、西にしへ西にしへと【クス】野のヶ原がはらの曠野ひろのを進すすみ行く。

(大正一一・二・二七 舊二・一 河津雄録)

(全文 昭和一〇・三・三〇 王仁校正)

附録 第三回高熊山參拜紀行歌(三)

王仁作

高熊山參拜者名簿(三)

(大正十一年四月十三日 舊三月十七日)

(七)

神が表に現はれて 【鈴木】ケ原も山奥も (鈴木すう)

澄ま【すう】れしき松の御代 【河合】と思召す神心 (河合一男)

【一男】聞いては十を知る 誠の【安保】と成り變り (安保米太郎)

神の教を村肝の 心に深く登【米太郎】 (齋田のぶ)

朝夕【齋】く【田】のもしさ その身【のぶ】じも【泉山】 (泉山貞夫)

魂の【貞】め【夫】嬉しみて 教祖の出【西】神の島 (西島躬幸)

神の【躬幸】も和田の【原】 荒浪よ【せつ】【博】々と (原せつ)

漕ぎ行く雄島女島瀉 波に浮べる神【山】の (同博子)

磯端清き上り【口】 【恆】き心の【彦】姫が (山口恆彦)

社の前に【平】伏し 難を【岡】して漸くに (平岡基良)

參詣したる大【基】の 教を守る【良】き信徒 (大野徳松)

恵みも【大野徳松】氏 【尾形太郎作】いさぎよく (尾形太郎作)

赤き心は【秋山】の 紅葉の色の【義之】が (秋山義之)

【新】たに【堀】り出す黄金の 玉の在所を【菊】の月 (新堀菊次)

【次】第々々【西】げり行く 草【村】わけて【三】りたる (西村二三)
【三】日月空に輝きて 常世の暗を明し行く
神の御稜威ぞ畏こけれ。

(八)

【西^から^ら】洋も大和も押竝べて 醜の【村】雲空を掩ひ (西村雛子)

親に離れし【雛子】鳥 高天に【上】るよしもなく (上瀧美祐)

佐久那垂りにと落【瀧】津 速川の瀬に【美】はしく (柳生宣子)

身魂を洗ひ大神の 【祐柳生】の【宣】傳使 (小原茂樹)

【小原】の中に【茂】る【樹】の 花も【吉井】の健【康^すこ^やか】に (吉井康

素)

匂ふも清し太【素】の 同じ教の道の【ため】 (同ため)

【前^すす】むも知らに退くも 知らずに【田】依る【稻】の國 (前田稻子)

天津日嗣の日の御子の　みこと畏こき【佐伯】の庄　（佐伯史夫）

稗田の阿禮が國く【史夫ふ】を　語り【岡】れしその如く　（岡文雄）

空澄み渡る瑞月が　神代の【文雄】傳へむと

【高】天【野】原の神業を　【やす】く楽しく述べ立つる　（高野やす）

何の淀みも【荒川】の　流るる如く物語る　（荒川保史）

浦【保】國の神の【史】　魂の【力】を【丸】めつつ　（力丸金吉）

【金】鐵溶かす勇猛心　【吉】凶禍福の外に立ち　（同あさを）

尊き神の御教を　【あさを】考へ無【田口】を　（田口改治）

たたく信者を【改】めて　誠一つに【治】め行く

【市場】の如く喧ましく　さわぎ廻りし人々に　（市場義堅）

眞【義】を【堅】く説きさとす　神の救ひの方【船】は　（船越英一）

萬のものに超【越】し　【英】でて尊き【一】の教

誠の【紙】の大【本】は　老も若きも押竝べて　（紙本鐵藏）

堅き心は金【鐵藏】　世界に【名】高き【島】國の　（名島鶴子）

千歳の松に【鶴】巢ぐひ 恵みの風も【福井】氏 (福井重内)
慶び【重】ねて【内】外の 國の民草勇み立ち
【篠】と亂れし國【原】も 【隆】き稜威を仰ぎつつ (篠原隆)
君の蔦歳祝ふなり。

(九)

四四十六の【菊】の花 薰り床しき玉の【池】 (菊池正英)
教【正】しく【英】でたる 【大】本神【野】おん恵み (大野只次郎)
【只】には聞くないち【次郎】き 【神】の【守】りの限りなく (神守)
榮え目出度植【木村】いと綿【密】に龍宮の (木村密)
池に漂ふ【松】の【島】 神の【懿】徳も世に【秀】で (松島懿秀)
【齋】祀の司【藤】原の 子孫の家に【相】生れ (齋藤相造)
天地【造】化の大神に 仕へて誌す筆の【文字】 (文字蔦之介)

【蔦】なきすさびも皇神【之】 深き【介】に【はつ】れじと (同はつ)

四方の草【村山】の上 照らす神の世近づきて (村山政光)

神【政】成就の【光】明を 海の【中】外の【島】々に (中島りう)

【りう】りう昇る朝日子の 姿も清く【中】天の (中村新吉)

【村】雲四方に吹き分けて 【新】らしく見ゆる景色【吉】さ

眺めも【吉田】の【春】の色 【治】まる御代の姿かな (吉田春治)

【左】を【近】く見渡せば 曾我部の野邊に咲き充てる (左近英吉)

木々の【英】^{はなぶさ}【吉】^よく薫る 數【多幾】多の青野原 (多幾光太郎)

天津日影に【光太郎】 家庭^{やには}もさ【きくえ】らえらに (同きくえ)

樂しむ人の笑ひ聲 【關藤】めあえぬ神【軍】の (關藤軍治)

道を【治】むる【大】八【島】 【金】龍海の波【次郎】^{しろう}く (大島金次郎)

心地も【よし】や【稻田】原 飛び交ふ【幾】多の小雀も (同よし)

チウチウ忠と【三郎】なり 鳴子も【古瀬】の田の面に (稻田幾三郎)

黄【金】の波も【平】けく 【野】邊も川【瀬】も恙なく (古瀬金平)

【長】閑に榮ゆる神の【則】 稜威高熊と響くなり (野瀬長則)

(一〇)

萬の災湧き充ちて 【板】けり狂ふ曲神を (板橋次郎)

誠の道に救はむと 高天原の大【橋】を

世に著【次郎】く架け渡し 【吉】とあしとを【田】て別くる (吉田秀

男)

【秀】妻の國の御教 變性【男】子と生まれませる

【原】つ御魂を【谷】の底 深く封【次郎】枉神も (原谷次郎松)

【松】の神代の近づきて 神の心も【石】の上 (石津末太郎)

遠【津】御神の御【末太郎】^{たる} 伊都の御【たま】や瑞御魂 (同たま)

深山の【奥】に名【西】おふ 國常立の大神の (奥西はる)

巖の教を【はる】ばると 山の尾の【上西】き擴め (上西信助)

【信】入悟入の諸人を 神の大道に【助】けゆく

【清水】湧き出る宮垣内 丑【寅】大神未申 (清水寅吉)

皇大神に神【吉】辭 宣るも涼しき神の庭 (同敏夫)

【敏夫】かさねて開け行く 【小】さき人の信仰も (小高もと)

【高】天原の神國に 悦び昇る【もと】ぞかし

秋津【島】根の【田】庭國 【まつ】の 教は遠近に (島田まつ)

【酒】へて雲【井】の空たかく 【峰】を照らして【生】れ出る (酒井)

峰生)

初日の如くいす【細】し 加々【見】の光り麗はしく (細見睦順)

【睦】び歸【順】神の道 開い【田所】は【彰】かに (田所彰)

御座の【湯川】いや高く 天に【貫】く松魚木は (湯川貫一)

眞【一】文字に輝きて 棟【木】の上も屋根【下】も (木下さわ)

揃うて清き尊【さわ】 神の心と仰がれぬ

【松】の神代の末【永】く 教の【友】と【吉】く睦び (松永友吉)
【高木】稜威を輝さむと 金【鐵】とかす【男】心は (高木鐵男)
神代の種と知られける

(一一)

神代も廻り【北澤】の 千歳を【祝】ふ【大】日本 (北澤祝大)
【眞金】の神の【幸】ひ【雄】 貴賤上下の區別なく (眞金幸雄)
仰ぎ【三島】の光り【佐平】 常夜の晴を【松】の月 (三島佐平)
【村】雲散りて【眞澄】空 龍宮館の神苑に (松村眞澄)
處狭き迄【植】込みし 【芝】生の花も今【盛】り (植芝盛隆)
【隆】く輝く池【中野】 男島に齋きし【岩】の神 (中野岩太)
雨と風との【太】御神 玉の【井】の【上】に御姿を (井上留五郎)
清く涼しく【留】たまひ 日【五郎】信ずる信徒の

【額】を照らし守りつつ　大御【田】柄の造りたる　（額田保）

【保】食神の御神徳　戴く心【中野】嬉しさよ　（中野作郎）

【作】りも豊かに【郎】らかに　稔りて神の大前に

【横山】の如獻り　盡きぬ【英二】四の神の綱　（横山英二）

曳かれて返さぬ【桑】の弓　高天【原】に【住之江】の　（桑原住之江）

心地も殊に【淑子】姫　【稻次】々に美はしく　（同淑子）

實る御【玖仁】の【豊】の國　野【山】も【崎】はひ【増】々に　（稻次

玖仁豊）

【造】化の神の御神業　開くも樂し【鈴木】原　（山崎増造・鈴木伊助）

【伊】照りかかやく御神【助】は　天津御空を【渡邊】の　（渡邊しづ）

月日の恵の【しづ】くなり　【同】じ教の【道】の【子】が　（同道子）

晴【西村】雲打ながめ　皇大神の神【徳】に　（西村徳治）

【治】まる御代を仰ぎつつ　【藤】の高山久方の　（藤井健弘）

雲【井】の空に端然と　勇壯【健】々根も【弘】く　（上原芳登志）

【上】る雲霧【原】ひつつ 景色も【芳登志】聳ゆなり (依田善五郎)

誠の道に【依田】かる 【善】一筋の神【五郎】母 (同たき)

聞くも目出【たき】神の【前】 【田】は【満】作の【稻】の波 (前田

満稻)

風おだやかに吹き渡り 【田邊】も【林】もいと清く (田邊林三郎)

よりて【三郎】君が御代 花の都も【澁谷】も (澁谷武一郎)

尚【武】慈愛の【一郎】に 心かたむけ【前】みゆく (前田よしや)

大御【田】柄の幸【よしや】 【あや】の高天をいそいそと (同あや)

【足】に任せて【立】ながら 進み【兼太郎】信徒が (足立兼太郎)

互に心合ふ【田中】 【清】き教の交りは (田中清右衛門)

この【右衛門】なき樂みぞ 【清水】湧き出る宮垣内 (清水床榮)

瑞の御靈の【床】しくも 【榮】えて桃も【櫻井】の (櫻井信太郎)

神の教を【信】じ【太郎】 人の心は玉の【井】の (井上ちよの)

【上】にも匂ふ【ちよの】春 道を【佐藤】りて神【六合雄】 (佐藤六)

合雄)

守る常磐の【木下】蔭　　【愛】は【隣】人のみならず　　(木下愛憐)

海の内外の限りなく　　大【小】無数の國々に　　(小原稜威夫)

高天【原】の神等の　　御【稜威夫】ひらく物語　　(江本立吉)

おし【江】の【本】の【立】ちも【吉】く　　彼岸に渡す大【橋】の　　(橋

本亮輔)

【本亮】かに【輔】けゆく　　五十【鈴】の川の水【木】よく　　(鈴木政吉)

神【政吉】しく治まりて　　豊葦原の【中】津國　　(中倉さだ)

御【倉】の棚も【さだ】まりて　　浦【安】國も發【達】し　　(安達政史)

天壤無窮の神【政史】　　語るも嬉し高熊の

山に現れます大神の　　御前に感謝し奉る。

(一一一)

小幡の【宮】の廣庭に 立ち並びたる【木】々【三】^{たかし} (宮木三)

【中條】の東流れたる 小川の水はいと【清】く (中條清吉)

汲み取る人は身心も 【吉】く洗はれて【仕合】も (仕合新太郎)

日々に【新】たに充ち【太郎】 【高】き恵みを【澤】々に (高澤たか)

受けし瑞白【たか】熊の 【岡】に登りて大【基】の (岡基道)

【道】を開きし物語 中和大【中條】分けて (中條武雄)

學びし【武雄】【小】まごまと 八【島】の國に擴めむと (小島修嶽)

【修】養したる神の【嶽】 【津】々む樹草も【村】々【藤】 (津村藤)

太郎)

生ひ茂り【太郎】賑はしき 正義に【敏】き大丈夫【夫】が (同敏夫)

御前に【菅】る【村】社 祝詞の聲も【なつ】かしく (菅村なつ)

【安】全無事の境界に 到【達】せむは【貞】かなり (安達貞子)

男【子】と女子の志豆機^{しづはた}を 【織田】由來は【志賀】の湖 (織田志賀子)

黄金【橋】の【本】清く 神の救ひを【公】に (橋本公子)

普ねく伊由【吉】渡さむと 神樂ケ【岡】の皇神の (吉岡善雄)

【善】一筋の大道【雄】 高熊山のいや高く
開きたまふぞ尊とけれ。

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

靈界物語 第一〇卷 靈主體從 酉の卷

終り